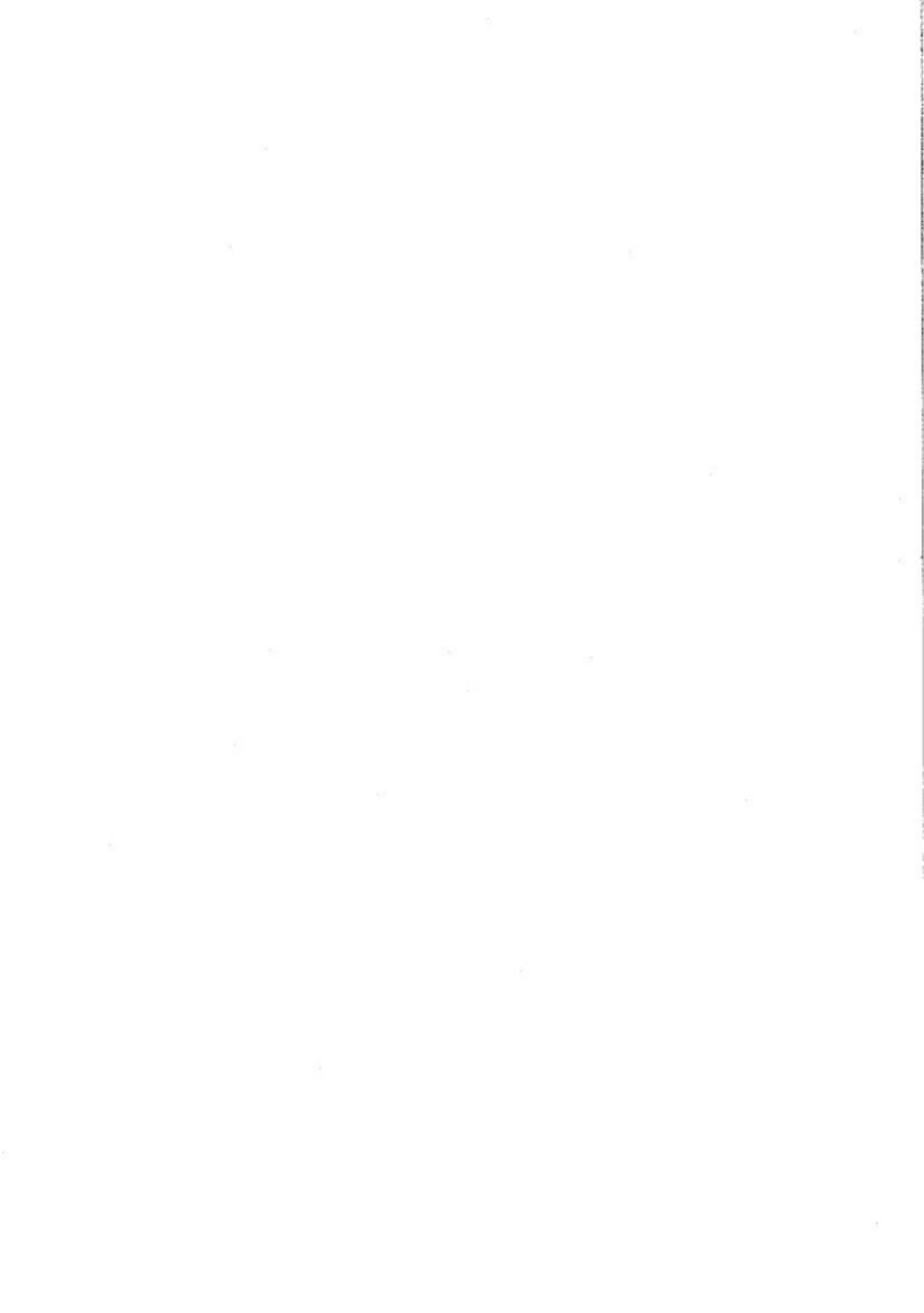


第10表 黒河尺日遺跡土器・土製品一覧 (11)

種類番号	遺物番号	形状	底形	口徑	底径	高さ	色調(底色)	色調(底色)	時期	詳細分類	備考
85	735	筒状	圓	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	716	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	717	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	718	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	719	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	720	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	721	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	722	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	723	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	724	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	725	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	726	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	727	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	728	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	729	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	730	53	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
86	731	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	732	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	733	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	734	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	735	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	736	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	737	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	738	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	739	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	740	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm
	741	49	筒状	1.8	1.6	5.0	7.278.1	灰白色	12.6cm~3cm	褐色	5.5cm~6.1cm~7.5cm

注: 表の括弧内は底色を示すもので、右側の値は底色を示すものである。

十段品の各部の割合は左から底・腰・身・口・蓋・蓋孔である。



第IV章 黒河中老田遺跡

1 遺跡の概要

A 概要

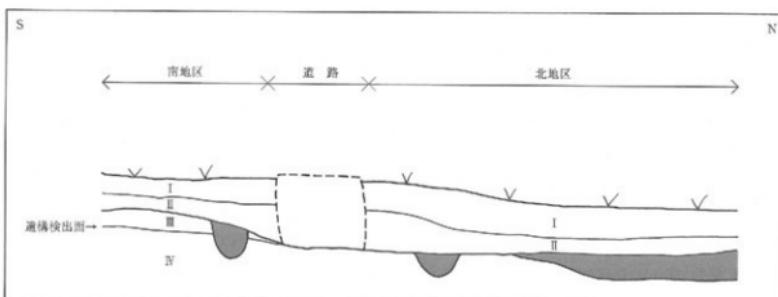
黒河中老田遺跡は射水丘陵北端の裾部に位置しており、黒河尺目遺跡の北側に隣接する。現況は水田で、道路を挟んで南側を南地区、北側を北地区とした。試掘調査の結果からは旧河道の左岸及び河道内に位置すると推測された。標高は5.5m～4.5mを測る。古墳時代及び古代の遺構を検出している。以下、各時代の様相を概観したい。

古墳時代 南地区及び北地区の南側で溝3条・土坑115基を検出した。遺構の大半は粘土採掘坑と考えられる土坑群で、試掘調査において予測された旧河道を中心に激しく重複した状態で検出している。これらの土坑群からは、床面から若干浮いた位置で一個体がそのまま潰れたような状態の土器が出土している。遺物の検出状態や遺構埋土と同じであることなどから、比較的短期間に形成されたものと考えられ、遺物の時期から古墳時代前期のものと考える。

古代 北地区中央から西にかけて、旧河道左岸のやや高くなった自然堤防上を中心に、溝1条・井戸1基・土坑54基を検出した。遺構は北に向かって希薄になる。古代においても粘土採掘を行っていると思われ、これらの土坑の中からは須恵器・叩き板等が出土しており、須恵器制作に伴うものと推定している。また、柱根を有する土坑が検出されているが、建物の平面プランは確認できず、集落というよりは作業場的な性格を有していたと推測される。出土遺物には8世紀前半～9世紀前半、10世紀～11世紀、12世紀～13世紀後半の古代から中世前半にかけてのものがみられるが、主体は8世紀後半～9世紀にある。このことから遺構の時期は概ね8世紀後半～9世紀代と考えている。

B 土層

基本層序はI層：耕作土、II層：黒色粘質土（遺物包含層）、III層：灰黄色粘質土、IV層：灰白色粘土または褐色シルト・にぶい黄色粘質シルト（遺構検出面）となる。III層は南地区的南側でみられ、北へ向かって減じている。III層上面での遺構検出は可能であるが、不明瞭である。IV層は北地区中央部から北にかけては褐色シルト・にぶい黄色粘質シルトとなり、旧河道を挟み南側とは様相を異にする。古墳時代及び古代の粘土採掘坑は主にIV層の灰白色粘土を採取していたものと考えられる。



第89図 黒河中老田遺跡基本層序模式図

2. 遺構・遺物

A 古墳時代

古墳時代の遺構は溝3条・土坑115基が検出されている。3条の溝はいずれも自然流路で、南地区・北地区の間の道路付近で合流して、旧河道に流れ込んでいる。土坑は粘土探掘に伴うもので、旧河道内及び肩部に帶状に連なっている。この旧河道部分については土坑の重複が激しく、湧水もあつたため、土坑の平面プランを抽出することができずS X160として一括で扱った。遺物は遺構内出土のものがほとんどで、遺構埋土の下位から一個体がそのまま潰れたような状態で出土する場合が多く、甕・壺に限られその他の器種は含まれない。埋土の状況は人為的に埋め戻されたと思われるものも含め、一気に埋まつた様相を呈するものが多く、壁面を掘り崩しながら連続的に掘り広げられたと推察される。出土土器群には若干の時期幅があると思われるが、一度探掘した坑を再び掘り下げると思われるものがないことから、比較的短期間のうちに営まれたもので、古墳時代前期前半頃と考える。

溝

65号溝（S D65, 第90・92・116図, 図版70・76・78・80・82・100）

南地区の中央北よりに位置する幅約8m, 深さ0.4mを測る溝である。S D65は北地区のS D103と同一の溝で、S X160に流れ込む自然流路である。南端部分は第90図にトーンで図示した範囲が浅い落ち込み状となって終わっているが、等高線からは帶状に連なる土坑をたどるラインを流路と推定することが可能である。S D65内及び肩部には粘土探掘坑と考えられる土坑が重複しており、土坑のプランを確認できたものとの切り合い関係からは、流路がある程度埋まつた後に土坑が掘られていると思われる。土層断面からは複数の土坑が切り合っている状態が観察でき、遺物の大半はこれらの土坑部分から出土している。遺物は土師器（1～8）、木製品（117）で、2は試掘トレンチ（18T）から出土した下半分と接合して完形になった。7・8は、口縁端部が肥厚したいわゆる布留系壺である。117は重複する土坑の底面付近から出土したもので、粘土探掘時の足場板の可能性がある。

102号溝（S D102, 第91・93図）

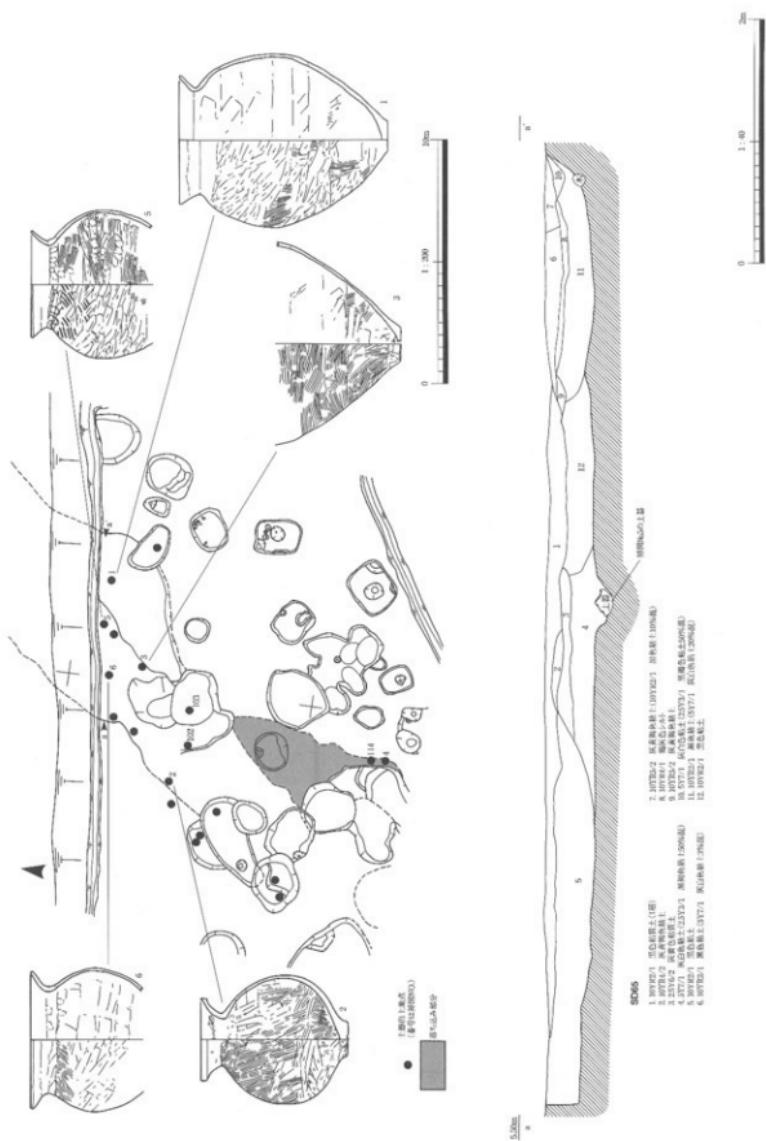
北地区の南東角に位置する溝で、S D103と合流し、S X160に流れ込む自然流路である。幅約23m、深さ0.2mを測る。埋土は黒色粘土の単層で、植物遺体を多く含むことから澱み状であったと思われる。遺物は土師器壺（9）がある。

103号溝（S D103, 第91・93・116図, 図版70・82・99・100）

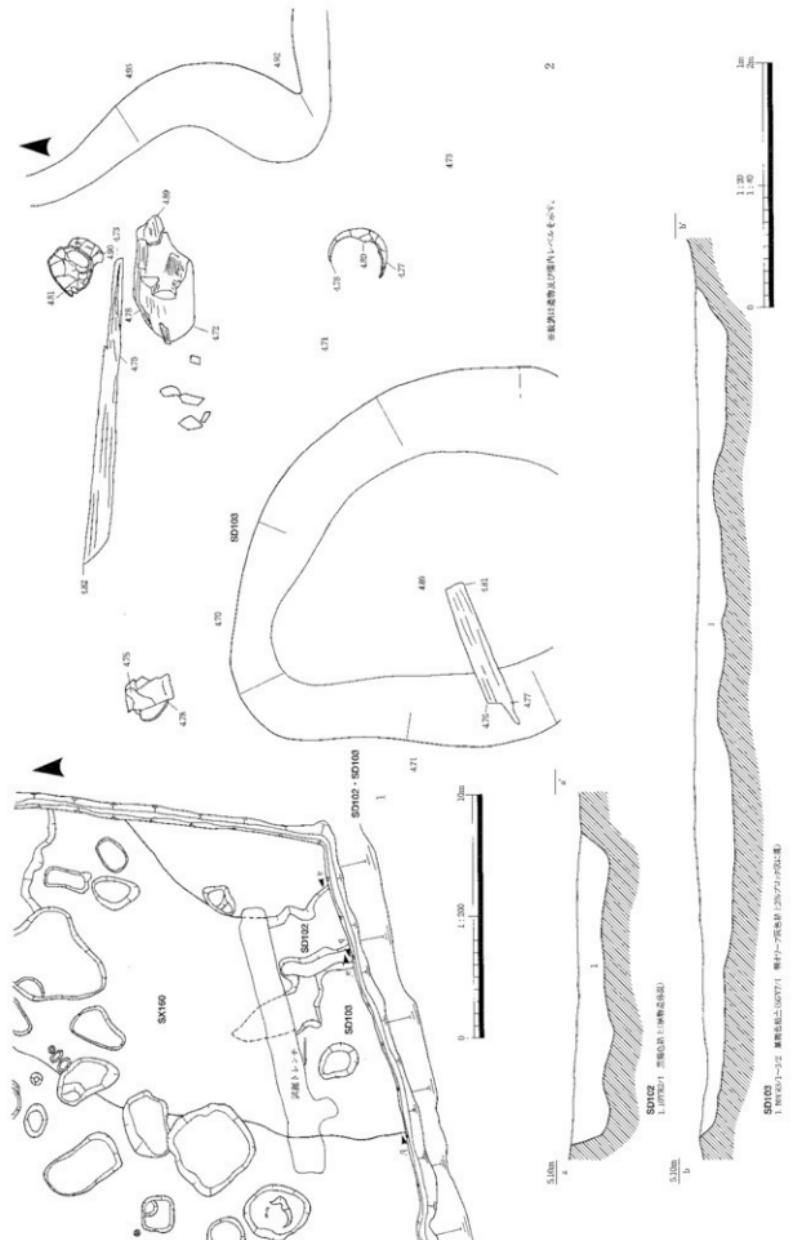
北地区の南東角に位置する溝で、南地区S D65と一緒になる溝で、S D102と合流しS X160に流れ込む自然流路である。幅約6.5m、深さ0.3mを測る。流路内には複数の粘土探掘坑と思われる土坑が重複している。遺物は土師器（10～12）と木製品（118・119）である。10は複合口縁で、外面ミガキ調整の赤彩された壺である。

160号遺構（S X160, 第93～99・116図, 図版71～75・77～79・81・82・100）

S X160は北地区南東角に位置している。幅約10m、深さ0.4～1mを測る。埋土は黒色粘土を主体とし、IV層に相当する灰色粘土をブロック状に含む。調査当初は複数の土坑が重複した土坑群として捉えたが、S D65及びS D102・S D103とは一連の遺構で、埋没した旧河道と考えられる。南地区的南西角から北地区的南東角へぬける流路で、南から北へ蛇行気味に流れていたと推測される。調査地区的北側約250mの平成13年度調査地区^①において確認された繩文中期以降に埋没したと考えられる河道（S D3）と同一の河道の可能性がある。S X160は河道内及び肩部において粘土探掘を行って



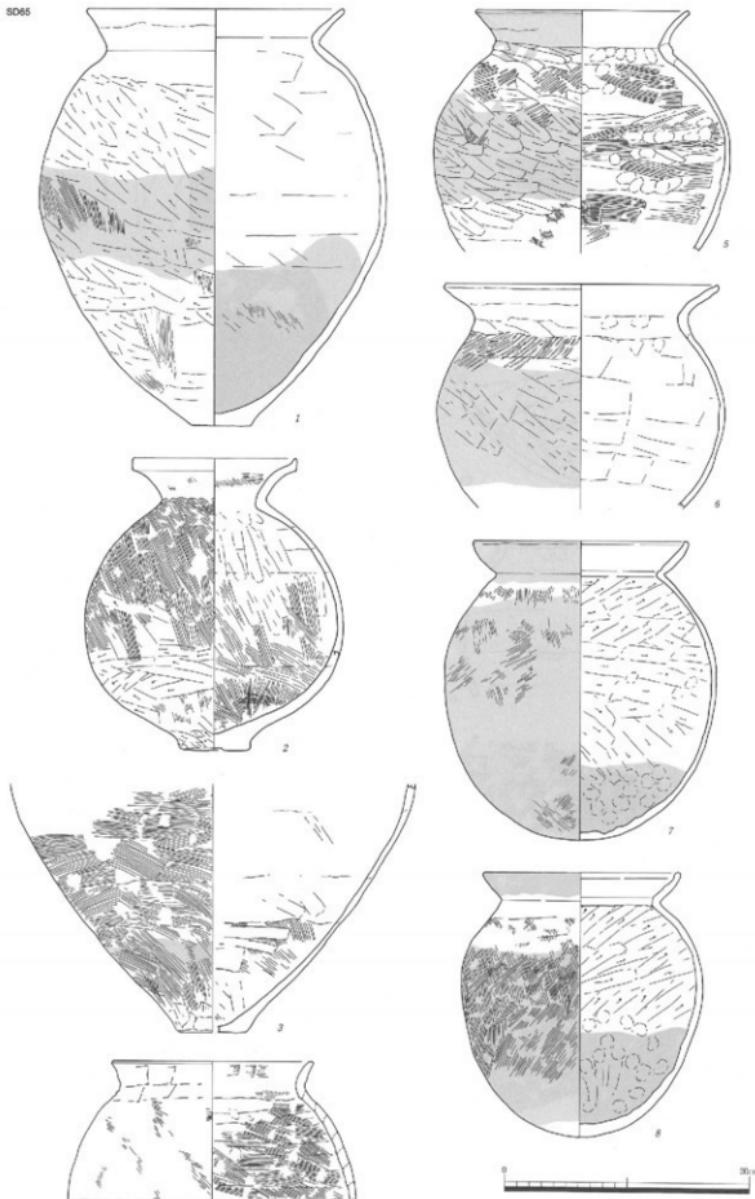
第90図 遺構実測図
SD65



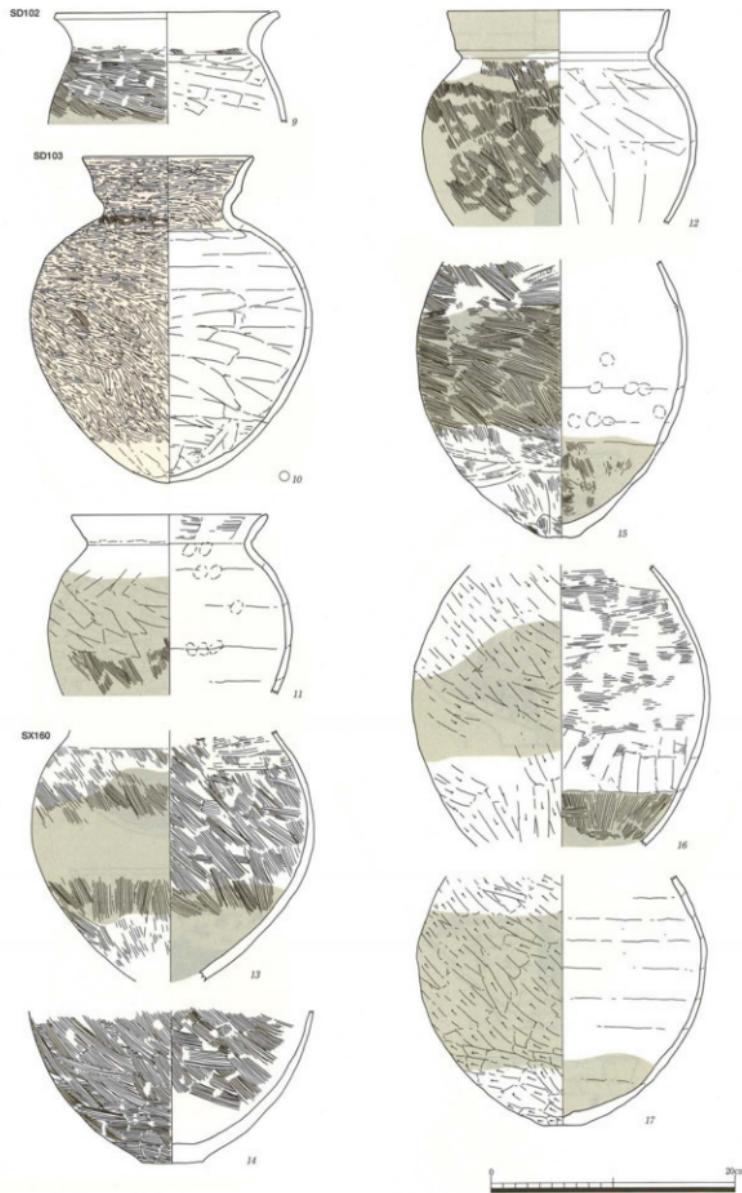
第91図 遺構実測図

1. SD102・SD103 2. SD103遺物出土状況

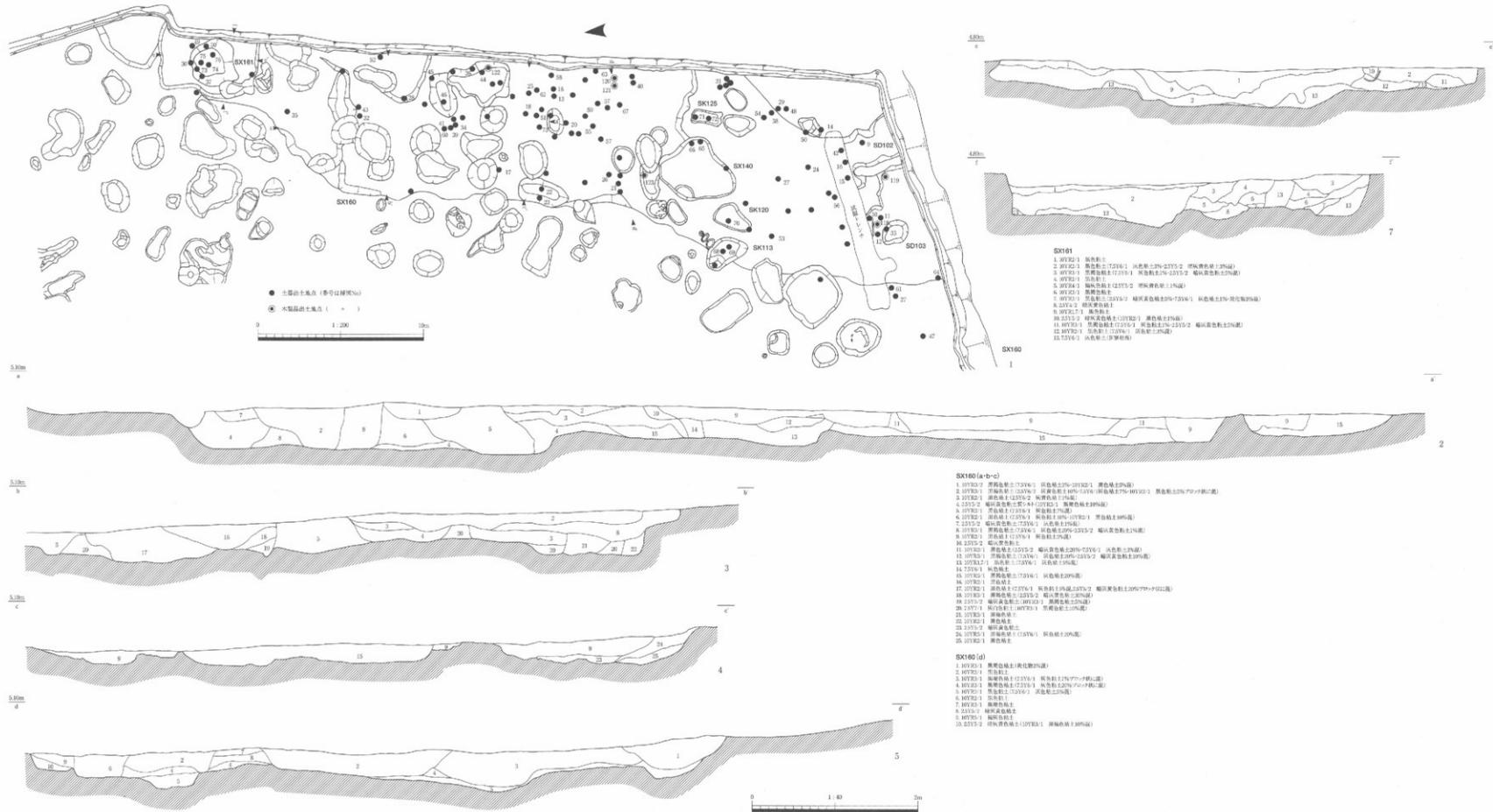
SD65



第92図 遺物実測図 (1/4)
SD65(1~8)

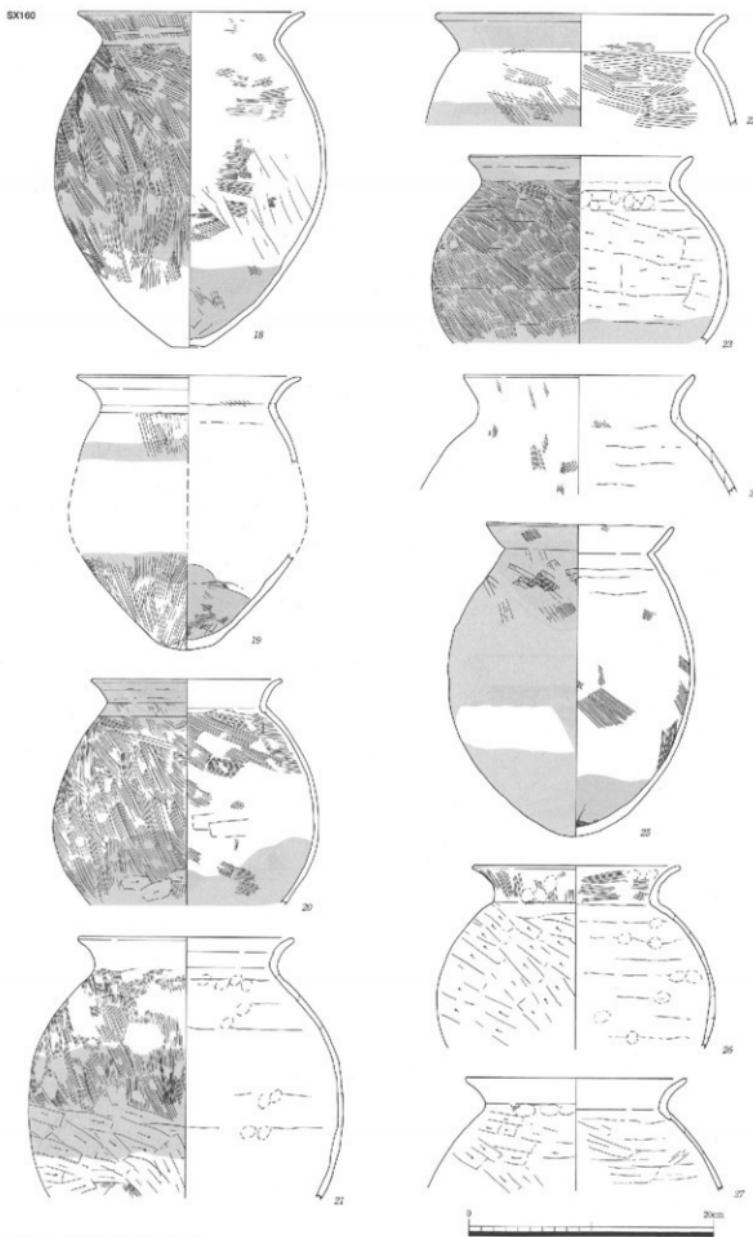


第93図 遺物実測図 (1/4)
SD102(9) SD103(10~12) SX160(13~17)

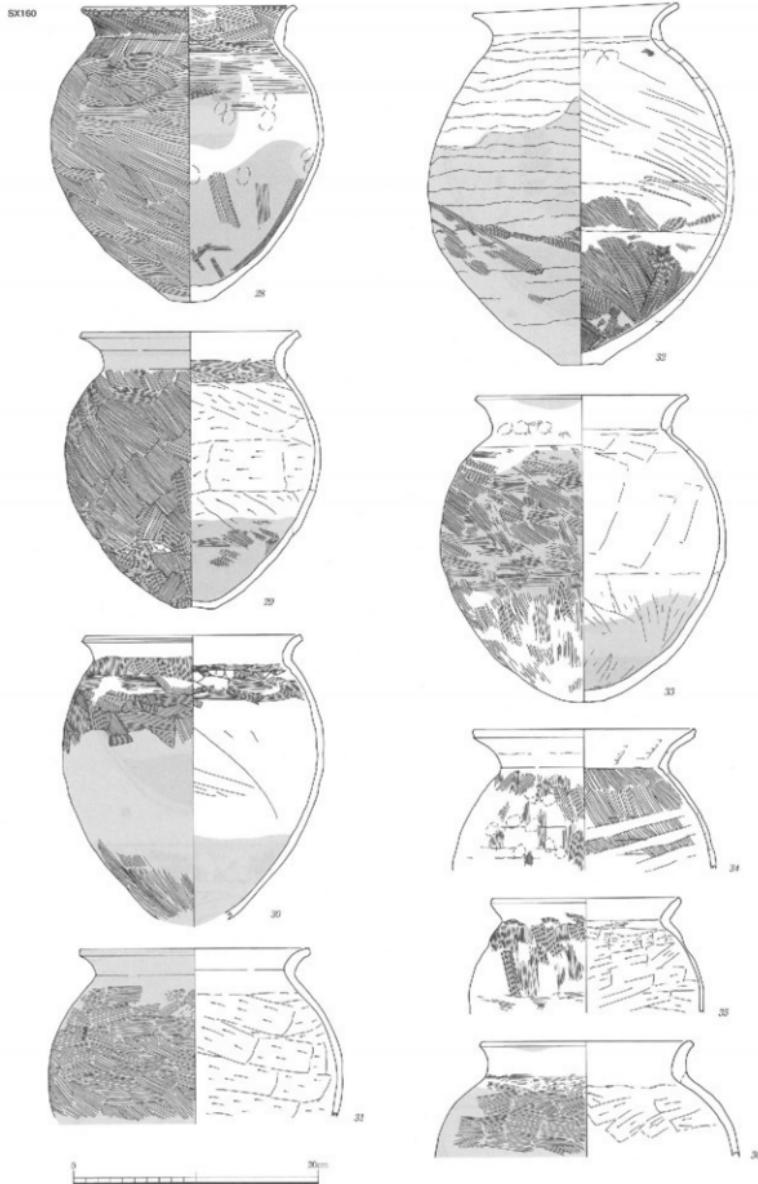


第94圖 遺構測量圖

1. SX160遺物出土狀況 2~5. SX160 6~7. SX161

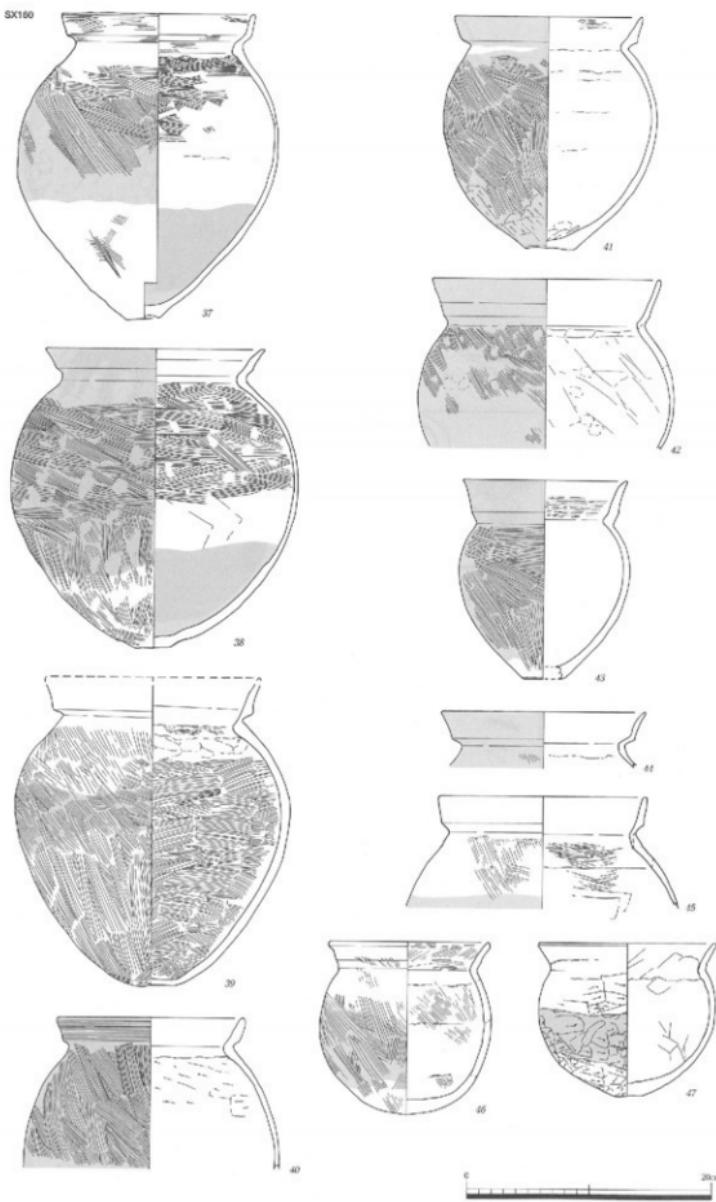


第95図 遺物実測図 (1/4)
SX160(18~27)



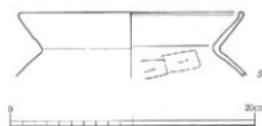
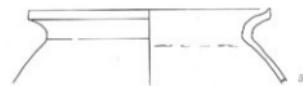
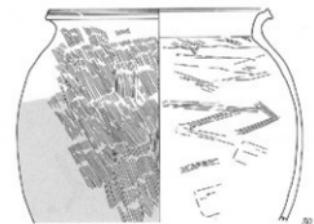
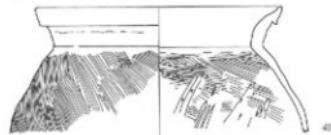
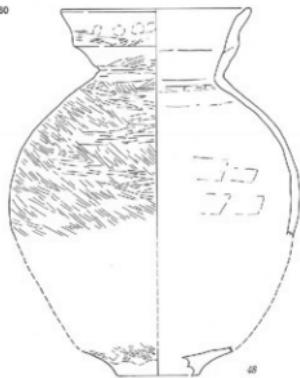
第96図 遺物実測図 (1/4)

SX160(28~36)

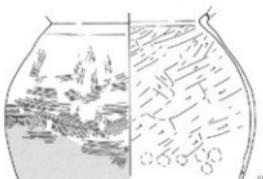
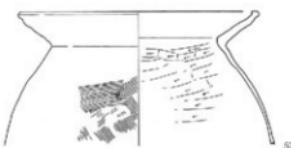
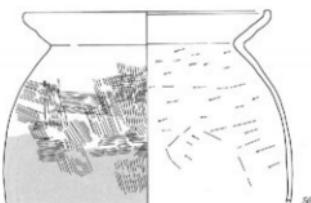
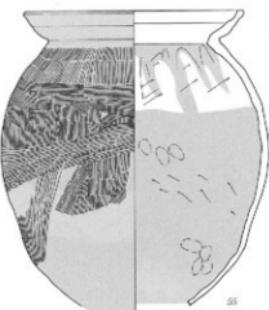
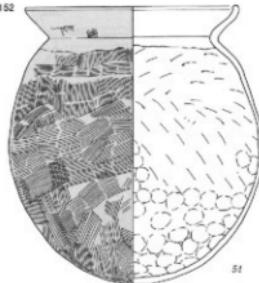


第97図 遺物実測図 (1/4)
SX160(37~47)

SK160

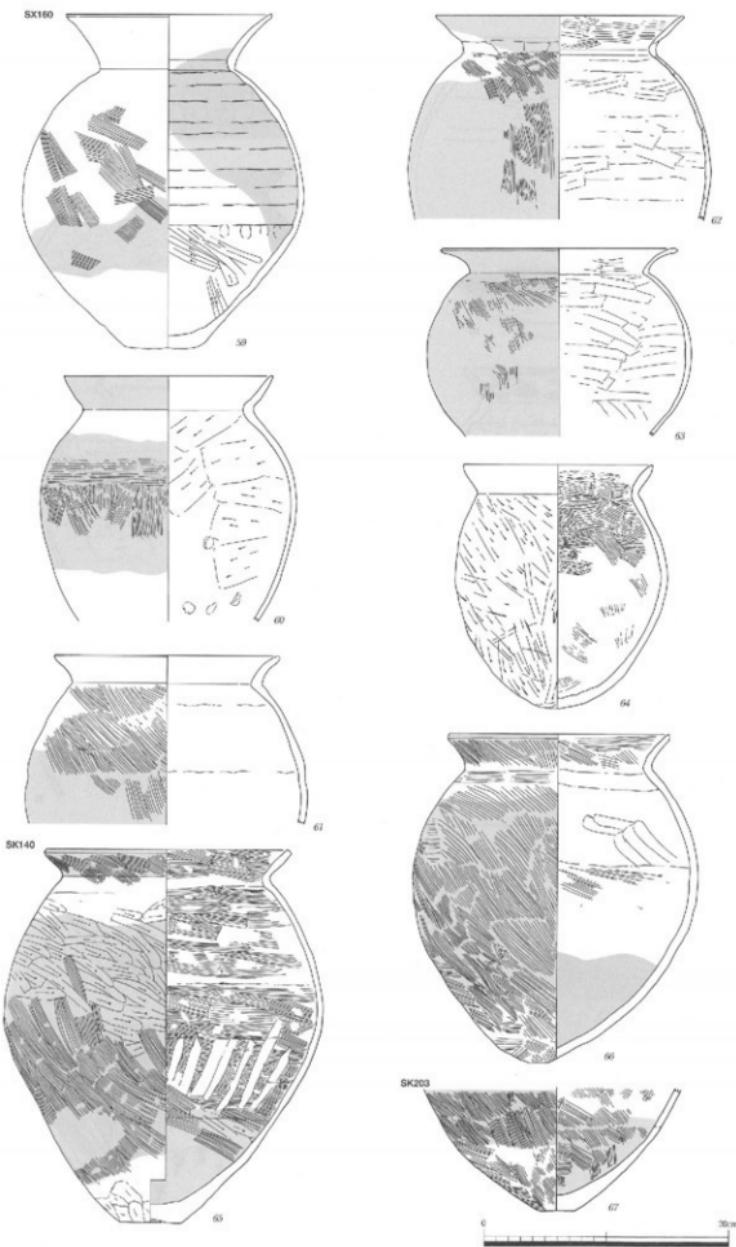


SK152



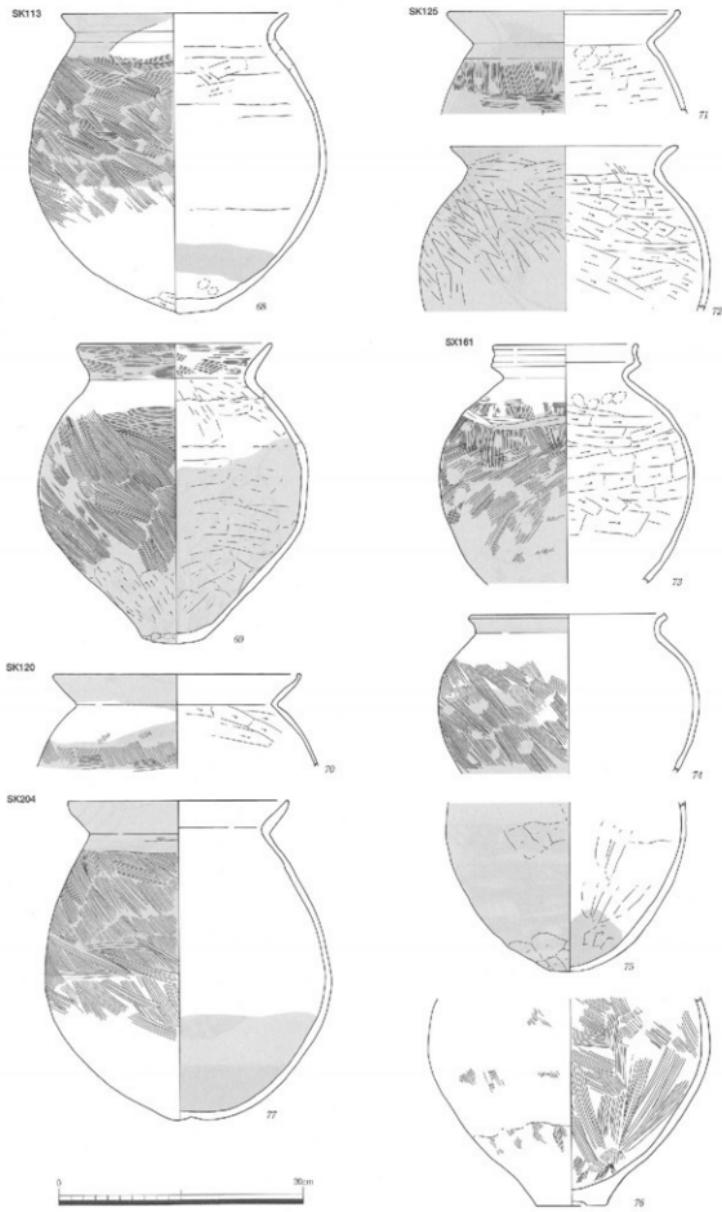
第98図 遺物実測図 (1/4)

SK152(54) SX160(48~53・55~58)



第99図 遺物実測図 (1/4)

SK140(65・66) SX160(59～64) SK203(67)



第100図 遺物実測図 (1/4)
 SK113(68・69) SK120(70) SK125(71・72) SX161(73～76)
 SK204(77)

いたと考えられ、その結果土坑が重複しながら帶状に連なったものと思われる。遺構完掘後に土坑底面の穴状に埋んだプランから各土坑を抽出できたものもあるが、掘削前に平面的に分離して検出することは困難であった。このためS X160として一括して扱ったが、抽出できた土坑には遺構番号を付して、各々記述した。遺物には縄文土器、土師器、須恵器、木製品がある。縄文土器と須恵器については小破片が多く、混入したものと思われる。土師器（13～64及び各土坑出土遺物65～77）は完形または半完形で、一個体が潰れたような状態で出土したものが多く、約100ヶ所で検出している（第94図の出土状況図）。くの字口縁壺を主体とし、有段口縁壺（37～45）、小型壺（46・47）、布留系壺（53～58）、山腹系の壺（52）、複合口縁の壺（48）等がある。概ね占墳時代前期前半のものである。木製品（120～123）はいざれもスギの板材である。

土坑

1号土坑（SK 1、第101・112図）

南地区南西角に位置する不整形の土坑で、調査区外へ伸びる。幅2.48m、深さ0.61mを測る。埋土は灰黄色粘土をブロック状に含む黒色粘土である。土坑底面はほぼ平坦で、北側は階段状に、南側は直線的に真っ直ぐ掘り下げている。粘土探掘坑と考える。遺物は土師器壺（78）がある。

2号土坑（SK 2、第101・118図）

南地区南西角に位置する楕円形の土坑。長軸2.10m、短軸1.18m、深さ0.48mを測る。土坑底面はほぼ平坦で、西側は階段状、東側は直線的に掘り下げている。埋土は中位に灰オリーブ色砂が帶状に堆積しており、粘土探掘後に粘土を溜めて置き、必要な量を掘り採る「粘土土坑」と思われ、さらに水築を行った可能性もあると思われる²²。遺物は縄文土器、土師器壺がある。

3号土坑（SK 3、第101・118図）

南地区南西角に位置する。長さ1.96m、幅1.66m、深さ0.42mを測る不整形の土坑で、SK 4と重複する。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土で、底面はほぼ平坦である。遺物には土師器壺、磨製石斧（129）がある。粘土探掘坑と考える。

4号土坑（SK 4、第101・112図、図版74）

南地区南西角に位置し、調査区外へ伸びる。幅2.04m、深さ0.57mを測る不整形の土坑で、SK 3と重複する。東側は下部がオーバーハングしてSK 3側へ入り込んでおり、SK 4掘削後にSK 3を掘り広げたと思われる。埋土は黒色粘土で、中位に灰色粘土が帶状に堆積しており、粘土探掘後はSK 2と同様な粘土土坑として利用されたと思われる。遺物は土師器壺（79～81）がある。

6号土坑（SK 6、第101・112図、図版78）

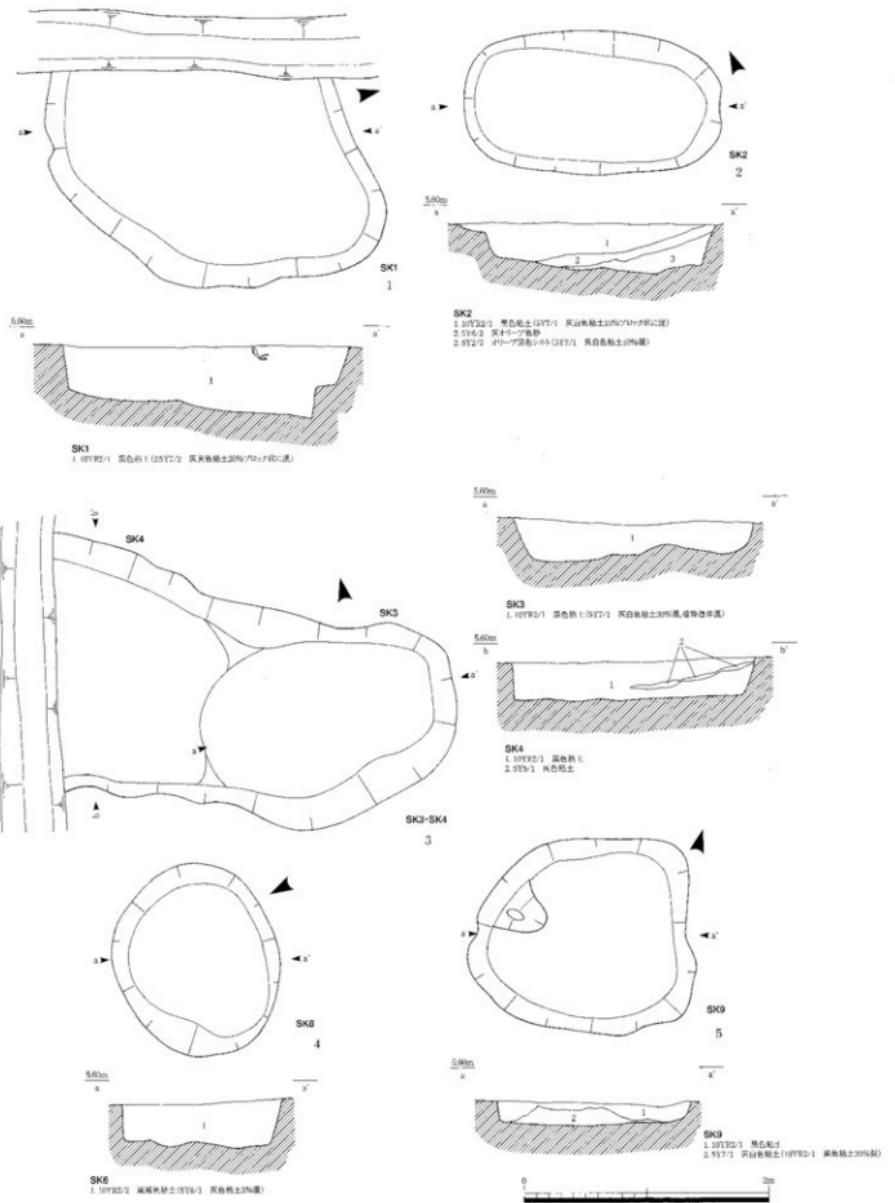
南地区南西角に位置する楕円形土坑。長軸1.60m、短軸1.38m、深さ0.49mを測る。埋土は灰色粘土混じりの黒褐色粘土で、直線的に掘り下げる。粘土探掘坑と考える。遺物は土師器壺（82）がある。

9号土坑（SK 9、第101図）

南地区西側に位置する。長さ1.74m、幅1.60m、深さ0.36mを測り、平面不整形を呈する。埋土は黒色粘土、黒色粘土混じりの灰白色粘土で、下位の灰白色粘土は粘土探掘後に溜めて置いた粘土がそのまま放置された可能性があり、粘土土坑と思われる。

10号土坑（SK 10、第102・112図、図版73）

南地区西側に位置する楕円形の土坑。長軸1.96m、短軸1.40m、深さ0.46mを測る。底面は南側に向かって傾斜しており、南壁は階段状になる。埋土は灰白色をブロック状に含む黒色粘土で、底面から若干浮いた位置で土師器壺（84）が一個体分潰れた状態で出土している。粘土探掘坑と考える。遺物



第101図 遺構実測図

1. SK1 2. SK2 3. SK3・SK4 4. SK6 5. SK9

は土師器壺（83・84）があり、84は受け口状の口縁の壺で、外面上半は粗いハケ調整である。

12号土坑（SK12、第102図）

南地区西側に位置する。SK14に切られる不整形の土坑で、長さ1.90m、幅1.42m、深さ0.47mを測る。埋土は灰白色粘土混じりの黒褐色粘土である。底面は棒で突いたような凸凹があり、北側下部はSK14側にオーバーハングしており、完掘時につながった。粘土採掘坑と考える。

13号土坑（SK13、第102図）

南地区西側に位置し、SK14に切られている。長軸1.06m、短軸0.70m、深さ0.29mを測る楕円形の土坑である。埋土は灰色粘土混じりの黒色粘土である。粘土採掘坑と考える。

14号土坑（SK14、第102・112図）

南地区西側に位置する。長軸1.70m、短軸1.08m、深さ0.34mを測る楕円形の土坑で、SK12・SK13を切る。埋土は黒褐色粘土の単層である。SK14はSK12及びSK13掘削後に横に掘り広げたものと思われ、粘土採掘坑と考える。遺物は土師器壺（85）がある。

16号土坑（SK16、第102・117図、図版69・100）

南地区西側に位置する。長さ2.07m、幅1.56m、深さ0.53mを測る楕円形に近い隅丸方形の土坑である。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土である。底面は平坦で、底面中央部からスギの板材（124・125）が2枚重なった状態で出土している。粘土採掘の足場にした板材の可能性を考えられ、粘土採掘坑と思われる。遺物はこの他に土師器壺がある。

17号土坑（SK17、図版67）

南地区南側に位置する楕円形土坑。長軸1.22m、短軸0.94m、深さ0.43mを測る。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土の単層である。床面はほぼ平坦で、南側にむかってゆるく傾斜している。粘土採掘坑と考える。

21号土坑（SK21、第102・112図、図版69・76）

南地区南側に位置する不整形の土坑。長さ2.30m、幅1.64m、深さ0.55mを測る。埋土は黒色粘土に灰白色粘土が帯状に堆積する。南側は緩やかな階段状を呈し、北側は直線的に掘られている。SK2と同様な粘土土坑と思われる。底面はほぼ平坦で、南側の段直下で土師器壺（86）が一個体そのまま潰れたような状態で出土している。

22号土坑（SK22、第103図）

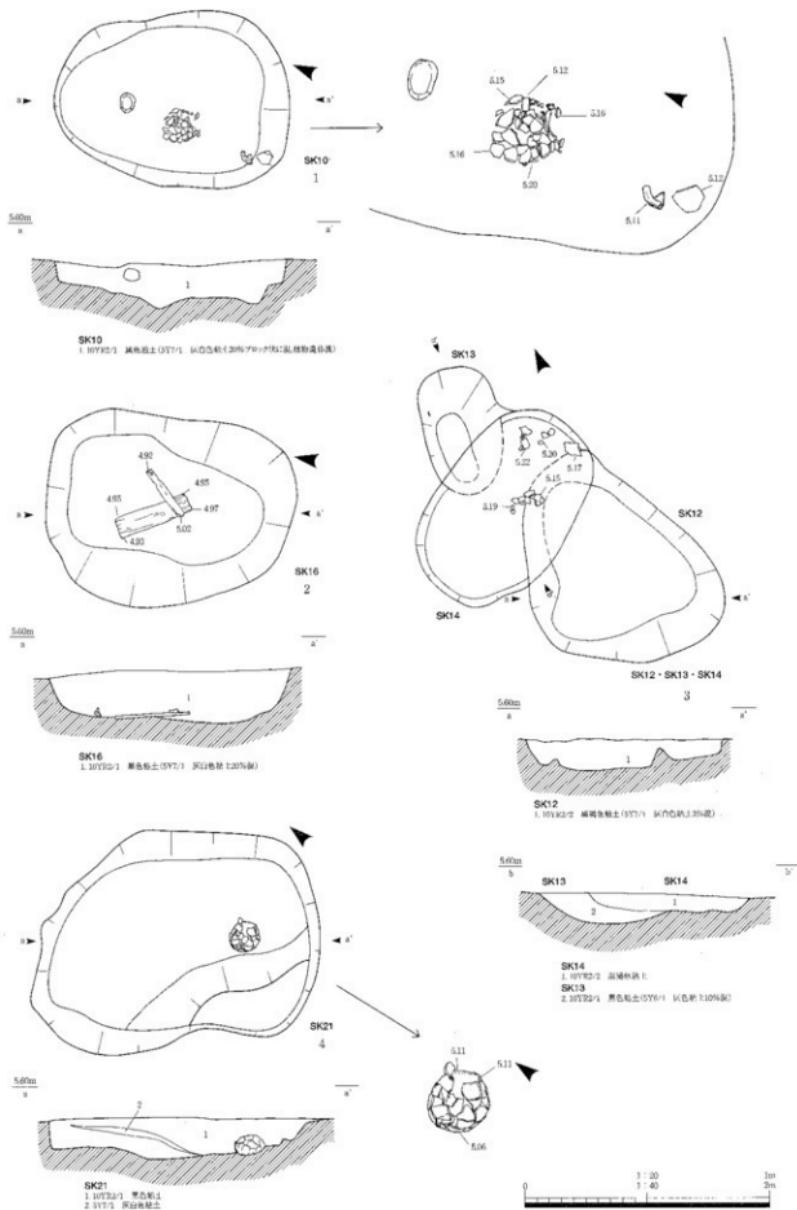
南地区中央やや南よりに位置する。長軸1.62m、短軸1.05m、深さ0.35mを測る楕円形の土坑である。埋土は灰白色混じりの黒色粘土である。SK23に切られているが、SK24を切っており、SK24→SK22→SK23の順で掘り広げていったと思われる。粘土採掘坑と考える。

24号土坑（SK24、第103・112図）

南地区中央やや南よりに位置する。長さ2.04m、深さ0.08mを測る不整形土坑で、SK22及びSK28・SK30に切られている。SK24は浅い皿状に掘り窪めた土坑で、SK24→SK30→SK28、SK24→SK22と掘り広げた粘土採掘坑と考える。遺物は土師器壺（87）がある。

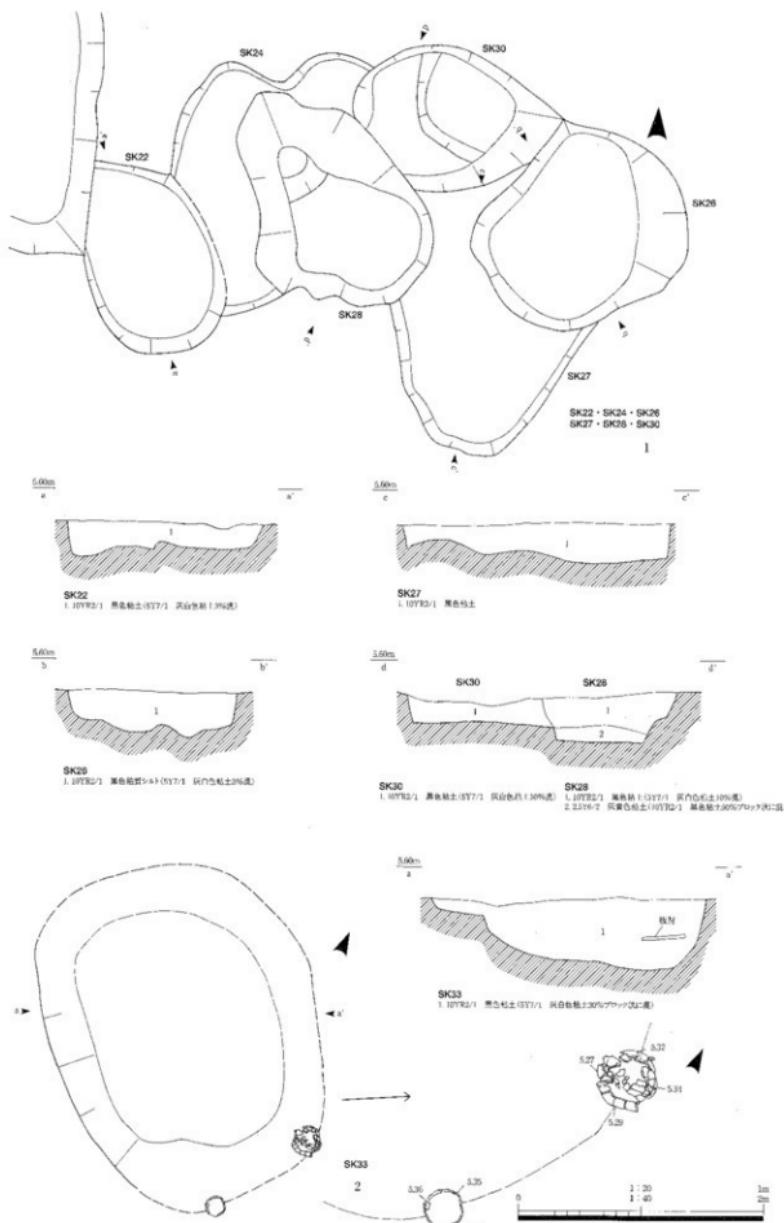
26号土坑（SK26、第103図）

南地区中央やや南よりに位置する。長さ1.70m、幅1.44m、深さ0.41mを測る円形土坑である。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘質シルトで、底面は凹凸がある。SK27と重複しており、SK27掘削後に掘り広げたと思われる。粘土採掘坑と考える。遺物は土師器壺がある。



第102図 遺構実測図

1. SK10 2. SK16 3. SK12・SK13・SK14 4. SK21



第103図 遺構実測図

1. SK22・SK24・SK26・SK27・SK28・SK30 2. SK33

27号土坑（SK27、第103図、図版67）

南地区中央やや南よりに位置する。長さ1.66m、深さ0.40mを測る不整形土坑で、SK26・SK28・SK30と重複している。埋土は黒色粘土の単層で、底面はほぼ平坦である。SK27→SK26、SK27→SK30→SK28と掘り広げたと思われる、粘土探掘坑と考える。

28号土坑（SK28、第103・113図）

南地区中央やや南よりに位置する不整形土坑。長さ2.06m、幅1.32m、深さ0.60mを測る。SK24・SK27・SK30と重複しており、SK24→SK27→SK30→SK28と掘り広げられた最終段階で、徐々に深く掘り下げられている。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土、黒色粘土がブロック状に混じる灰白色粘土の二層である。遺物は土師器壺（88）がある。

30号土坑（SK30、第103図）

南地区中央やや南よりに位置する。長さ1.72m、幅1.26m、深さ0.53mを測る不整形土坑である。SK24・SK27→SK30→SK28と掘り広げたと思われる。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土で、東側が一段深く掘削されている。粘土探掘坑と考える。

33号土坑（SK33、第103・113・117・118図、図版77・100）

南地区中央部に位置する。長さ2.60m、幅2.40m、深さ0.67mを測る不整形土坑である。西側は階段状に浅くなるが、底面はほぼ平坦で、埋土は灰白色粘土をブロック状に含む黒色粘土である。埋土中位からスギの板材（126）、南側肩から一個体が潰れたような状態の土師器壺（94）と土師器壺の下半分が正位で出土している。粘土探掘坑と考える。

34号土坑（SK34、第104・113・118図、図版69・101・102）

南地区中央やや西よりに位置する不整形土坑。長さ3.68m、幅3.32m、深さ0.52mを測る。底面は円凸が激しく、埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土の単層で、断面観察からも分離は困難であったが、複数の土坑が重複しているものと思われる。粘土探掘坑と考える。遺物は縄文土器、須恵器、土師器壺（89・90）、打製石斧（132・133）がある。133は大型の撥形のもので石鉢の可能性がある。

36号土坑（SK36、第104・113図、図版69・79）

南地区中央やや西よりに位置する楕円形土坑。長軸1.64m、短軸1.06m、深さ0.66mを測る。SK37と重複しており、SK37→SK36の順で掘削したと考えられる粘土探掘坑である。埋土は灰白色粘土をブロック状に含む黒色粘土で、中位から上位にかけて土師器壺（91～93）、木製品が出土する。土師器壺（93）はSK37の埋土出土の破片と接合しており、両者に時間的な差はないものと思われる。また、木製品は遺存状態が悪く固化していないが、先端の尖った棒状のもので掘り棒の可能性がある。

37号土坑（SK37、第104・113図、図版69）

南地区中央やや西よりに位置する楕円形土坑。SK36に切られており、残存部短軸1.13m、深さ0.42mを測る。埋土は黒褐色粘土で、底面はほぼ平坦である。粘土探掘坑と考える。

38号土坑（SK38、第105・106・113・117図、図版69・99）

南地区中央部に位置する。長軸2.46m、短軸1.93m、深さ0.58mを測る楕円形土坑である。SK40・SK42を切っている。埋土は灰白色粘土混じりの黒褐色粘土で、南側が一段深くなる。北側の段上からスギの板材（127）、南側の段下から土師器壺（95）が出土している。粘土探掘坑と考える。

39号土坑（SK39、第105・106図）

南地区中央部に位置する不整形土坑で、長さ1.57m、幅1.30m、深さ0.42mを測る。SK40を切っている。埋土は灰白色粘土をブロック状に含む黒色粘土で、北側は直線的に掘り下げるが、南側は緩や

かな傾斜になっている。粘土探掘坑と考える。

40号土坑（S K40, 第105・106・114図）

南地区中央部に位置する不整形土坑。長さ3.88m, 幅1.62m, 深さ0.30mを測る。S K38・S K39・S K41と重複しており, S K41→S K40→S K39の順で掘り広げたと思われる。底面は西側でやや凹凸になるが, ほぼ平坦で, 埋土は灰白色粘土をブロック状に含む黒褐色粘土である。埋土下位から土師器壺（105）が出土している。

41号土坑（S K41, 第105・106・113図, 図版69・77）

南地区中央部に位置する。長さ2.07m, 深さ0.23mを測る不整形土坑で, S K40に切られている。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土で, 底面から若干浮いた状態で土師器壺（96）が出土している。粘土探掘坑と考える。

42号土坑（S K42, 第105・106・114図）

南地区中央部に位置する不整形土坑。長さ2.24m, 幅1.83m, 深さ0.50mを測る。S K38・S K50と重複している。底面はほぼ平坦だが, 北側で若干凹凸になる。埋土は灰色粘土混じりの黒褐色粘土である。粘土探掘坑と考える。遺物は土師器壺（97）がある。

44号土坑（S K44, 第105・106・114図, 図版80）

南地区中央部に位置する不整形土坑で, 長さ4.30m, 深さ0.47mを測る。S K45・S K50に切られおり, S K44→S K45→S K50→S K42→S K38の順で掘り広げた粘土探掘坑と考えられる。S K44は北から南に向かって階段状に掘り下げており, 下段部分では底面に黒色粘土がブロック状に混じる灰黄色粘土が堆積している。この灰黄色粘土は探掘した粘土を溜め置いたもの可能性もあるが, 黒褐色粘土の混入が多いことから, S K45等を掘り広げる際に掻き出した排土と思われる。遺物は土師器壺（99）があり, 99はS K45出土の破片と接合している。

45号土坑（S K45, 第105・106・114図, 図版80）

南地区中央部に位置する不整形土坑。長さ1.80m, 深さ0.46mを測る。S K44を切り, S K50に切られている。底面はほぼ平坦で, 埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土である。粘土探掘坑と考える。遺物は土師器壺（98・99）がある。

49号土坑（S K49, 第107図）

南地区中央部に位置する不整形土坑。長さ3.64m, 幅2.00m, 深さ0.40mを測る。S K51・S K52と重複しているが, S K51との新旧関係は不明である。S K49は複数の土坑が切り合っているが, 断面観察からも分離することが出来なかった。S K49・S K51→S K52と掘り広げた粘土探掘坑と考える。埋土は灰白色粘土がブロック状に混じる黒色粘土である。遺物は土師器壺がある。

50号土坑（S K50, 第105・106図）

南地区中央部に位置する円形土坑で, 長さ2.24m, 幅2.04m, 深さ0.62mを測る。S K42に切られ, S K44・S K45を切る粘土探掘坑である。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土, 黒色粘土がブロック状に混じる灰黄色粘土で, 下位の灰黄色粘土はS K44下層と同様な排土の可能性がある。

51号土坑（S K51, 第107・114図）

南地区中央部に位置する不整形土坑。S K49と重複しており, 残存部長1.74m, 深さ0.24mを測る粘土探掘坑。S K49との新旧関係は不明である。埋土は灰白色粘土・灰色粘土がブロック状に混じる黒色粘土である。遺物は土師器壺（100）がある。

52号土坑（SK52, 第107・114図）

南地区中央部に位置する。長さ2.40m, 幅2.24m, 深さ0.47mを測る不整形土坑である。SK49・SK51→SK52と掘り広げたと考えられる粘土探掘坑である。底面は平坦で、直線的に掘り下げている。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土、黒褐色粘土混じりの灰白色粘土で、下位の灰白色粘土は採掘した粘土を溜め置いたものがそのまま検出された可能性があり、SK52は掘削後は粘土土坑として利用されたと思われる。底面に置かれたように板材と土師器壺（101）が出土している。

53号土坑（SK53, 第104図）

南地区中央部に位置する円形土坑。長さ1.56m, 幅1.35m, 深さ0.46mを測る。埋土は灰白色粘土がブロック状に混じる黒色粘土で、底面に黒色粘土がブロック状に混じる灰白色粘土が塊で置かれたような状態で検出されており、粘土を溜め置いた粘土土坑と考えられる。

54号土坑（SK54, 第104・114・118図, 図版61）

南地区中央やや北よりに位置する不整形土坑。長さ1.52m, 幅0.58mを測る粘土探掘坑である。SK55に切られており、SD65の肩部を切る。埋土は灰白色粘土がブロック状に混じる黒色粘土、黒色粘土混じりの暗灰黄色粘土で、二層とも混入が多く、SK55を掘り広げた際の堆土の可能性がある。遺物は埋土中位から土師器壺（102）が一個体そのまま潰れたような状態で出土している。

55号土坑（SK55, 第104・114・118図, 図版61）

南地区中央やや北よりに位置する。長さ2.28m, 幅1.90m, 深さ0.61mを測る不整形土坑で、底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土である。SK54→SK55の順で掘り広げたと考えられる粘土探掘坑で、北側に向かってさらに掘り広げたと思われる窪みがSD65内に伸びている。底面から若干浮いた状態で土師器壺（103）が出土している。また、SK54との境目付近から打製石斧の素材と考えられる剥片（134）が出土している。

56号土坑（SK56, 第104図）

南地区中央やや北よりに位置する円形土坑。径1.03m, 深さ0.49mを測る。底面はほぼ平坦で、直線的に掘り下げる。埋土は灰白色粘土がブロック状に混じる黒色粘土の単層である。

58号土坑（SK58, 第106図）

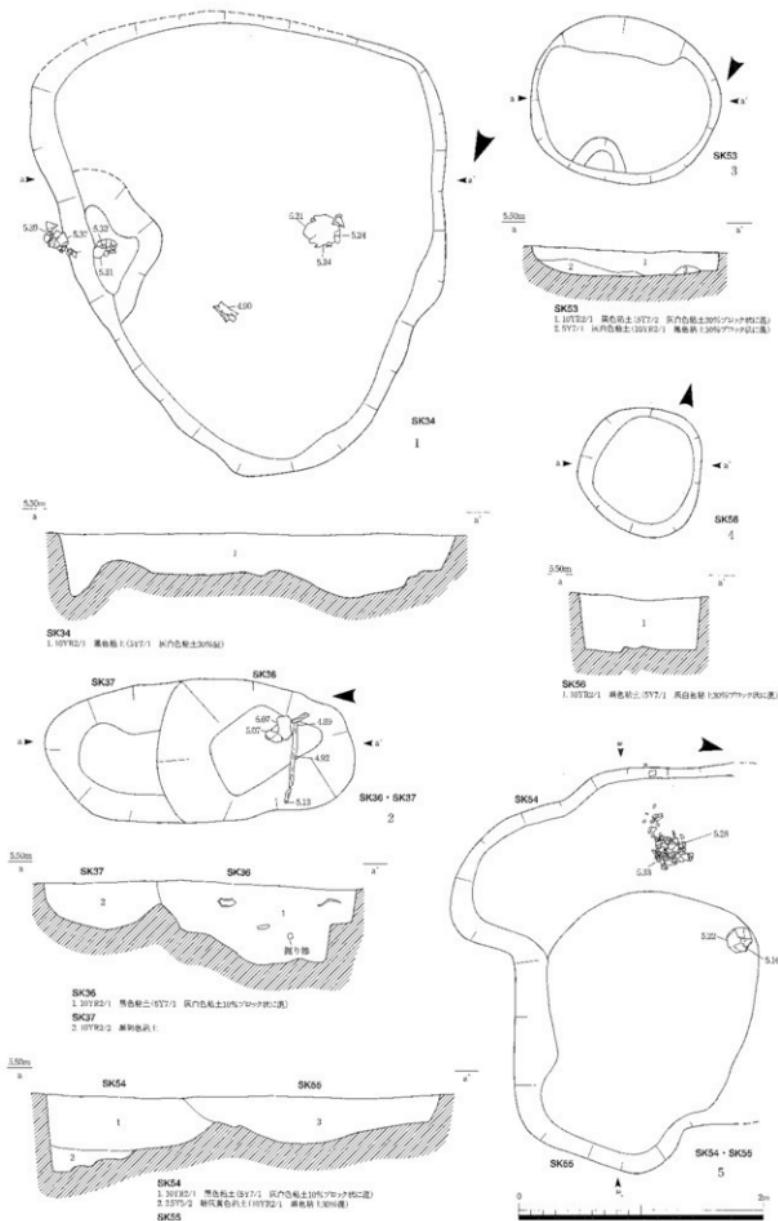
南地区中央やや南よりに位置する方形土坑で、長さ1.97m, 幅1.69m, 深さ0.18mを測る。底面はほぼ平坦で中央部と南側角がやや窪んでいる。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土の単層である。SK58と同様に掘り込みが浅く、方形を呈する土坑で、底面中央部またはコーナー付近が窪むものにSK46・SK48・SK59があり、これらはいずれもSD65の南東側に弧状に並んでいる。掘り込みが浅いことや底面の様相が異なることから、粘土探掘坑とは性格を異にすると思われ、水築を行った土坑の可能性がある。

59号土坑（SK59, 第106図）

南地区東側に位置する方形土坑。長さ1.83m, 幅1.40m, 深さ0.10mを測る。底面中央部及び北西角が窪み、壁下に溝状の窪みが巡る。埋土は黒色粘土の単層で、底面に灰白色粘土塊が置かれたような状態で検出されている。これらのことから、採掘した粘土を均質化させるために水築を行ったと推測される。

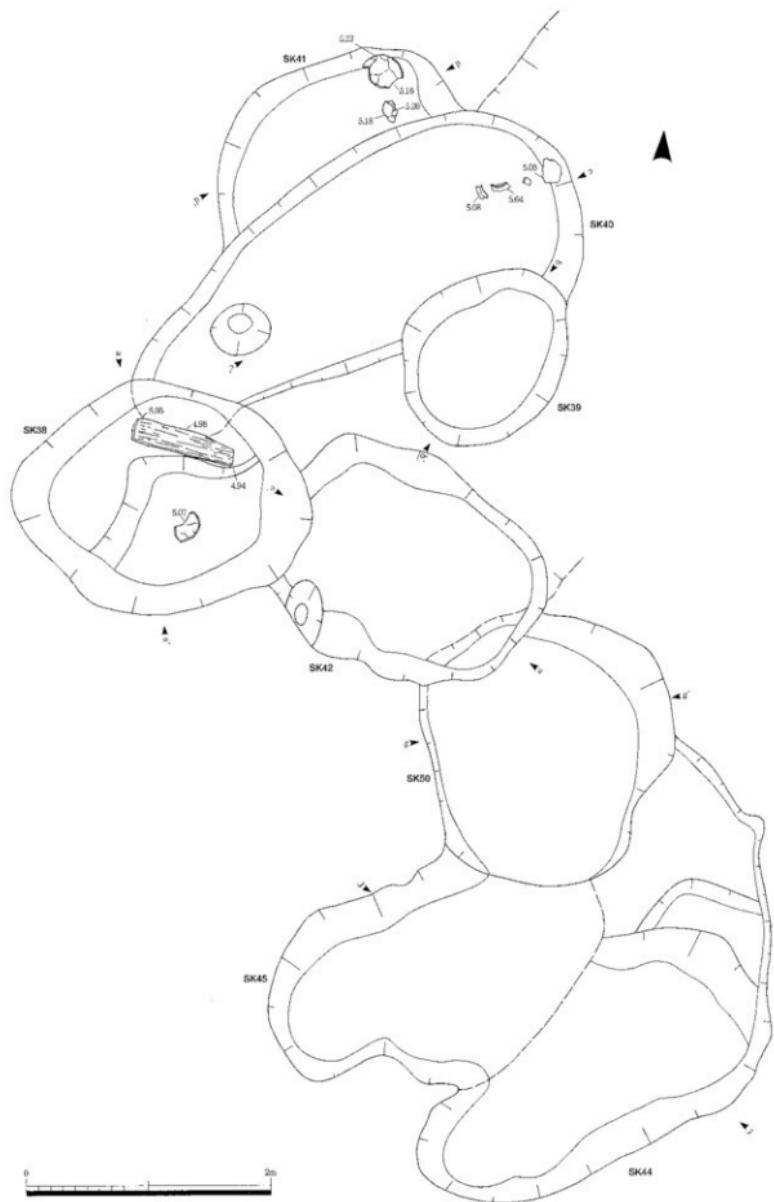
60号土坑（SK60, 第106図, 図版67）

南地区北東角に位置する方形土坑で、長さ1.69m, 幅1.40m, 深さ0.20mを測る。底面は北東角に向かって緩く傾斜しており、北東角には10~20cm台の扁平な碟が集積されている。性格は不明であるが、



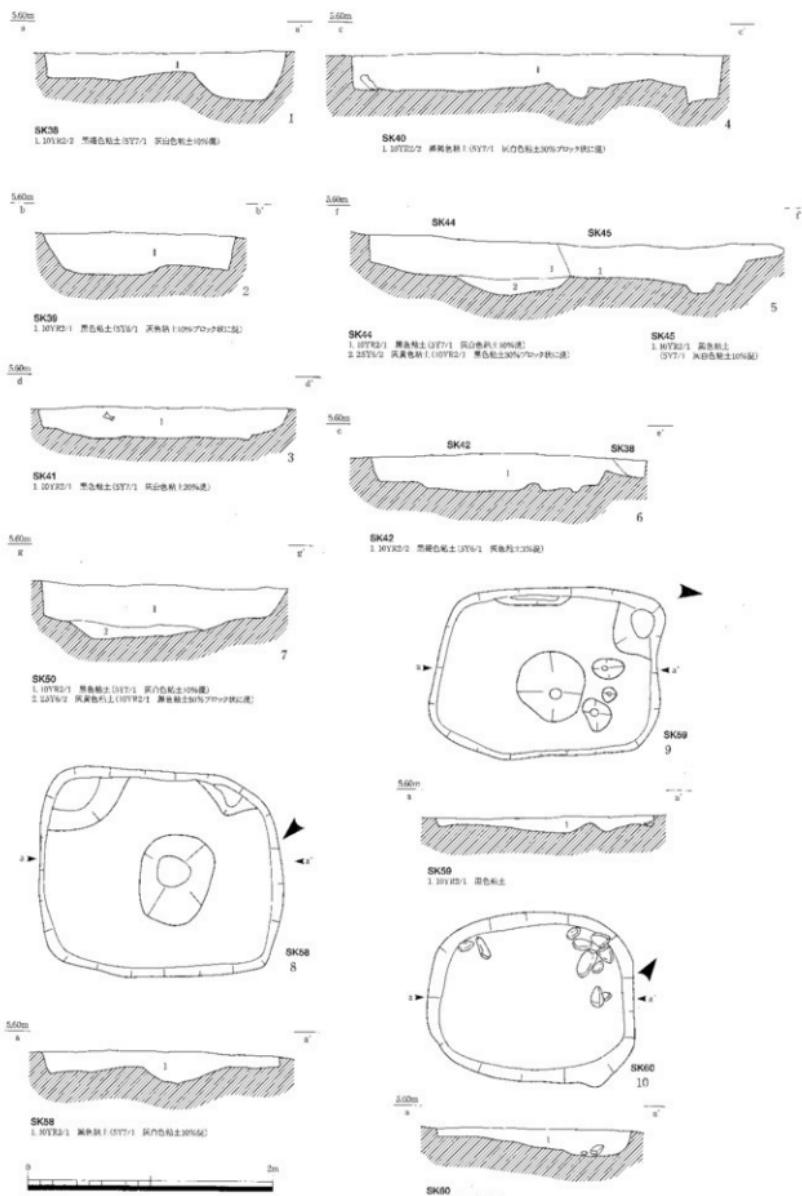
第104図 遺構実測図

1. SK34
2. SK36・SK37
3. SK53
4. SK56
5. SK34・SK55



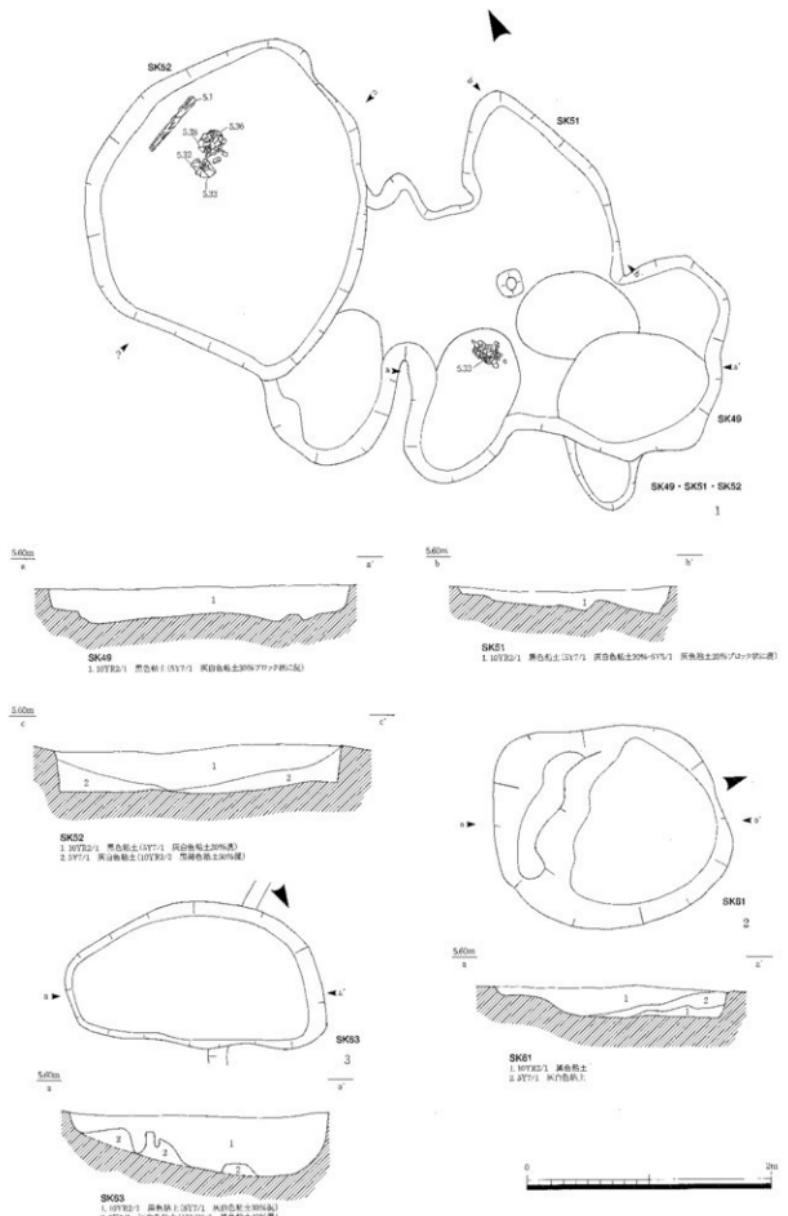
第105図 造構実測図

SK38・SK39・SK40・SK41・SK42・SK44・SK45・SK50



第106図 遺構実測図

1. SK38 2. SK39 3. SK41 4. SK40 5. SK44・SK45 6. SK42 7. SK50 8. SK58 9. SK59 10. SK60



第107図 造構実測図

1. SK49・SK51・SK52 2. SK61 3. SK63

S K58・S K59と同様な水縫等に囲む土坑の可能性が考えられる。

61号土坑（S K61, 第107図）

南地区北東角に位置する不整形土坑。長さ1.93m, 幅1.64m, 深さ0.31mを測る。南側は緩やかな階段状となり、北側は直線的に掘り下げる。埋土は黒色粘土で、上位から下位にかけて灰白色粘土が帶状に堆積しており、S K2と同様な粘土土坑と考えられる。

63号土坑（S K63, 第107・114図）

南地区北東角に位置する楕円形土坑で、長軸2.10m, 幅1.22m, 深さ0.46mを測る。S D65の肩部にあり、底面は北側に緩く傾斜する。埋土は灰白色混じりの黒色粘土で、底面に黒色粘土混じりの灰白色粘土塊が置かれたような状態で検出されている。粘土土坑と考える。遺物は土師器壺の口縁（104）がある。

105号土坑（S K105, 第108・115図, 図版68・76）

北地区南側中央で、旧河道（S X160）左岸に位置する円形土坑。長さ2.68m, 幅2.28m, 深さ0.53mを測る。底面はほぼ平坦で、中央がやや窪んでいる。埋土は明オリーブ灰色粘土混じりの黒色粘土で、中位から底部を下にそのまま潰れたような状態の土師器壺（107）が出土している。粘土探柵坑と考える。

111号土坑（S K111, 第108図）

北地区南側中央、S X160左岸に位置する長方形の土坑で、長さ3.18m, 幅1.74m, 深さ0.40mを測る。底面は平坦で、直線的に掘り下げる。埋土は黒色粘土、灰黄色粘土混じりの黒色粘土、黒褐色粘土で、3層が一気に堆積した後、窪み状の所に1・2層が堆積したものと思われ、完全に埋まりきらない状態で一定期間オーブンな状態であったと思われる。

112号土坑（S K112, 第108・114図）

北地区南側中央、S X160左岸に位置する。長軸1.40m, 短軸0.90m, 深さ0.43mを測る楕円形土坑である。埋土は灰黄色粘土混じりの黒褐色粘土で、中位から底面にかけて土師器壺（106）が出土している。粘土探柵坑と考える。

113号土坑（S K113, 第100図, 図版70・76）

北地区南側中央、S X160左岸に位置する楕円形土坑である。S X160肩部に位置し、S X160内に向かって深く掘り下げている。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土で、底面に伏せて置いた様な状態で土師器壺（68・69）が出土している。粘土探柵坑と考える。

120号土坑（S K120, 第100・108図, 図版79）

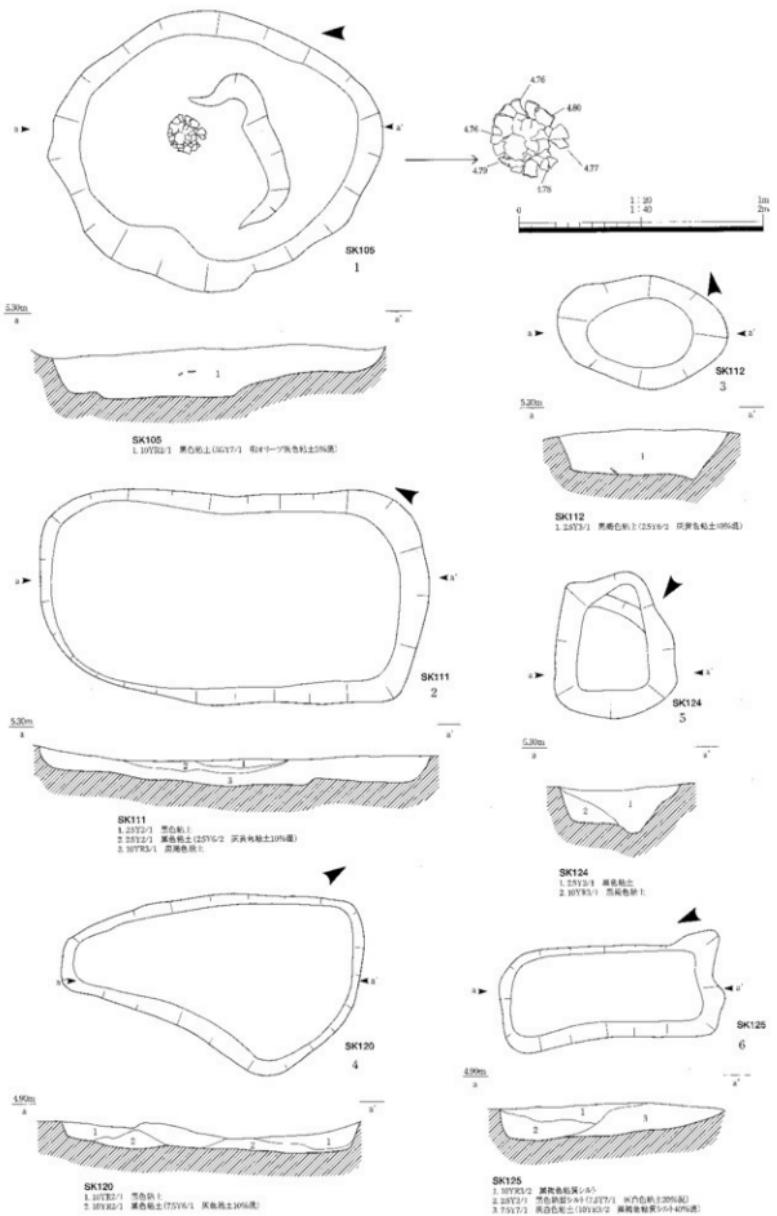
北地区南側中央、S X160内に位置する。長さ2.26m, 幅1.40m, 深さ0.32mを測る不整形土坑である。埋土は黒色粘土、灰色粘土混じりの黒色粘土で、両者がブロック状に堆積しており、人為的に埋め戻されたと思われる。粘土探柵坑と考える。遺物は土師器壺（70）がある。70は口縁部が肥厚した布留系壺である。

123号土坑（S K123, 図版67）

北地区中央南よりのS X160左岸に位置する円形土坑。長さ1.0m, 幅0.9m, 深さ0.46mを測り、埋土は黒褐色粘土の単層である。床面は東側がやや深くなるが概ね平坦である。粘土探柵坑と考える。

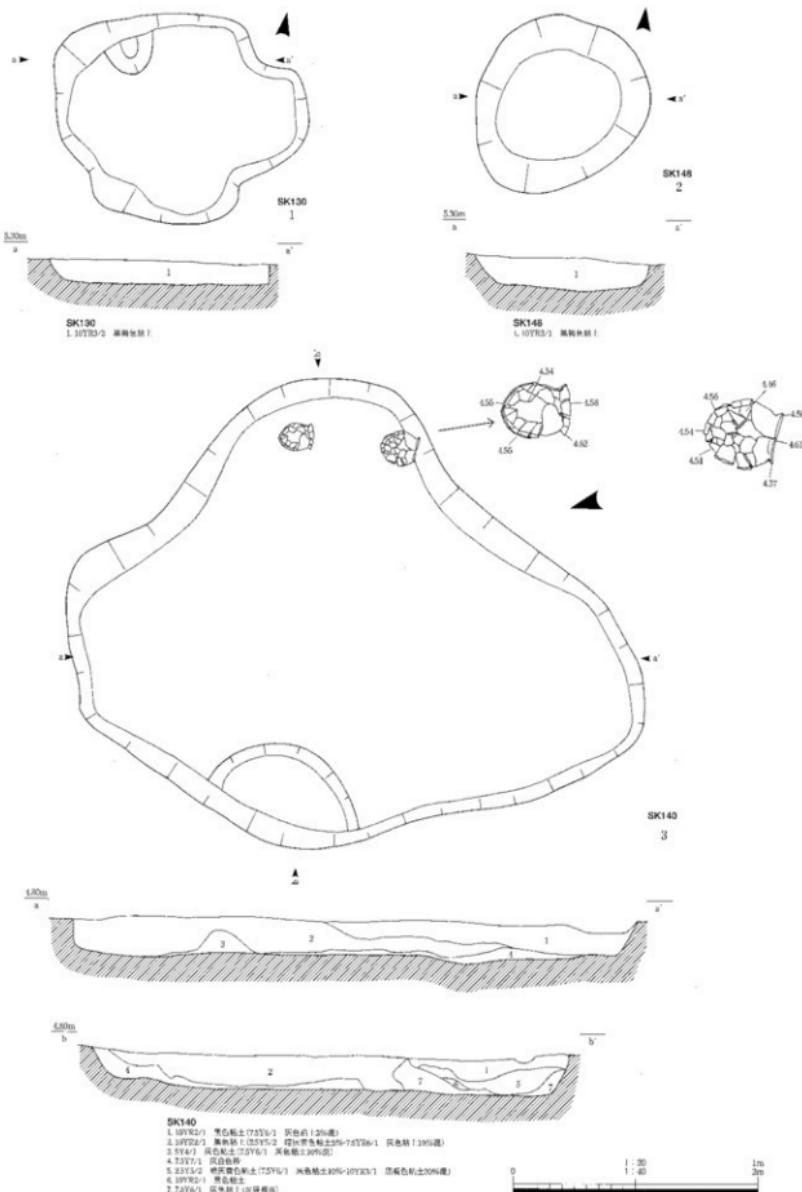
124号土坑（S K124, 第108図, 図版67）

北地区中央南よりのS X160左岸に位置する不整形土坑。長さ1.16m, 幅0.98m, 深さ0.45mを測る。埋土は黒色粘土、灰色粘土混じりの黒褐色粘土で、南側に階段状の段を持つ。粘土探柵坑と考える。



第108図 遺構実測図

1. SK105 2. SK111 3. SK112 4. SK120 5. SK124 6. SK125



第109図 遺構実測図

1. SK130 2. SK148 3. SK140

遺物は土師器甕がある。

125号土坑（SK125, 第100・108図, 図版79）

北地区南東角, SX160内に位置する長方形土坑。長さ1.85m, 幅0.76m, 深さ0.30mを測る。埋土は黒褐色粘質シルト, 灰白色粘土混じりの黒色粘質シルト, 黑褐色粘質シルト混じりの灰白色粘土で, 灰白色粘土は溜め置かれた粘土と思われ, 粘土土坑と考えられる。遺物は灰白色粘土中から土師器甕(71・72)が出土している。

130号土坑（SK130, 第109図）

北地区中央や南よりのSX160左岸に位置する。長さ2.10m, 幅1.74m, 深さ0.30mを測る不整形土坑。埋土は黒褐色粘土の単層で, 底面は平坦である。粘土採掘坑と考えられる。

140号土坑（SK140, 第99・109図, 図版75・76）

北地区南東角, SX160内に位置する不整形土坑。複数の土坑が重複していると思われるが, 分離は困難であったのでSK140に一括している。長さ4.60m, 幅3.60m, 深さ0.48mを測る。埋土は暗灰黄色粘土・灰色粘土混じりの黒色粘土が主体で, 灰色粘土等がブロック状に堆積しており, 人為的に埋め戻されたと思われる。粘土採掘坑と考えるが, 底面から灰色粘土塊が置かれたような状態で検出されており, 粘土土坑としても利用されていたと思われる。また, 底面直上に灰白色砂が堆積しており, 水築を行った可能性も考えられる。東側に張り出した部分の底面からやや浮いた位置から, 土師器甕(65・66)がそのまま潰れたような状態で出土している。

142号土坑（SK142, 第110・115図, 図版77）

北地区中央南よりのSX160左岸に位置する不整形土坑。複数の土坑が重複しており, 長さ3.88m, 幅1.52m, 深さ0.57mを測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とし, 東側の一段深くなる部分はブロック状の堆積をなすことから, 人為的に埋め戻されたと思われる。底面付近には灰黄褐色粘質シルト, その直上に黄灰色粘土が帯状に堆積しており, 水築等を行った可能性が考えられ, SK2と同様な粘土土坑と思われる。遺物は埋土中位から土師器甕(108)が潰れたような状態で出土している。

144号土坑（SX144, 第110・115図）

北地区中央南よりのSX160左岸に位置する。複数の土坑が重複しており, 長さ3.76m, 幅1.14m, 深さ0.47mを測る。不整形の北西側を円形の南東側が切っており, 西から東へ掘り広げたと思われる。埋土は西側は黒褐色粘土の単層で, 東側は黒褐色粘土を主体とし中位に黄灰色粘土が帯状に堆積する。SX144では西から東へ掘り広げた後, 東側はSK2のような粘土土坑として利用していたと考える。遺物は西側の平坦な底面上から土師器甕(109)が出土している。

148号土坑（SK148, 第109図, 図版67）

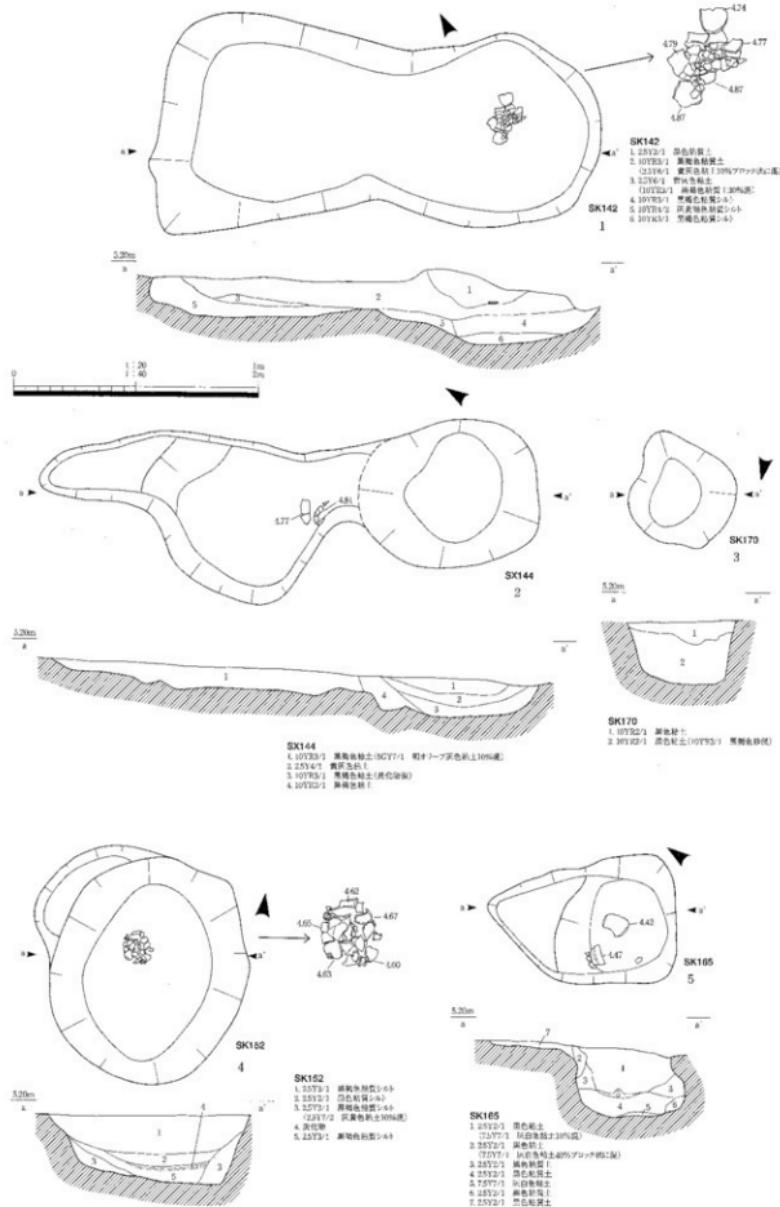
北地区中央部, SX160左岸に位置する円形土坑。長さ1.44m, 幅1.42m, 深さ0.49mを測る。埋土は黒褐色粘土の単層である。粘土採掘坑と考える。遺物は土師器甕が出土している。

152号土坑（SK152, 第98・110図, 図版67・69・78）

北地区中央部, SX160左岸に位置する円形土坑。長さ1.84m, 幅1.66m, 深さ0.61mを測る。直線的に掘り下げているが, 北西側に階段状の段がある。埋土は黒褐色粘質シルトを主体とするレンズ状堆積で, 2層と4層の間に炭化物が薄い層状に堆積している。粘土採掘坑と考えられる。遺物は底面から土師器甕(54)が一個体そのまま潰れたような状態で出土している。

161号土坑（SX161, 第94・100図, 図版68・81）

北地区中央東側, SX160内に位置する不整形土坑。複数の土坑が重複しており, 長さ2.80m, 幅



第110図 遺構実測図

1. SK142 2. SX144 3. SK170 4. SK152 5. SK165

2.44m、深さ0.48mを測る。埋土は灰色粘土混じりの黒色粘土が主体で、ブロック状の堆積をしており、人為的に埋め戻されたと考える。底面には灰色粘土塊が置かれたような状態で検出されているが、埋め戻されたと仮定すると、探掘時の排土あるいは廃棄された粘土と考えられ、掘削時にある程度の選別を行っていたと想定される。粘土探掘坑と考える。遺物は埋土中位から底面にかけて土師器壺(73~76)が出土している。

162号土坑 (SK162, 第118図, 図版101・102)

北地区中央部、SX160左岸に位置する不整形土坑。SK163を切っており、SK163→SK162の順で掘り広げられたと思われる粘土探掘坑である。埋土は黒色粘質土で、底面に黒色粘質土混じりの灰黄色粘土塊が検出されており、粘土土坑と考えられる。遺物は打製石斧(135)があり、SK34出土の打製石斧(133)と同様な石錘の可能性がある。

165号土坑 (SK165, 第110・115図, 図版68・70・81)

北地区中央部、SX160左岸に位置する不整形土坑で、長さ1.54m、幅1.00m、深さ0.64mを測る。北側は階段状に一段浅く、南側はオーバーハングして下方に入り込んでいる。埋土は黒色粘質土を主体とし、壁際にブロック土が堆積していることから壁が崩落したものと思われる。また、底面と埋土中位に灰白色粘土が層状に堆積しており、ある程度埋まつた後にSK2のような粘土土坑として利用されたと思われる。遺物は北側の段下から土師器壺(110)が出土している。

167号土坑 (SK167, 第111図)

北地区中央部、SX160左岸に位置する不整形土坑。複数の土坑が重複しており、長さ3.72m、幅2.48m、深さ0.67mを測る。埋土は黄灰色粘土混じりの黒褐色粘土が主体で、ブロック状に堆積しており、人為的に埋め戻されたと思われる。粘土探掘坑と考える。遺物は埋土中位から土師器壺が出土している。

170号土坑 (SK170, 第110・115図, 図版68)

北地区中央部、SX160左岸に位置する不整形土坑で、長さ1.02m、幅0.88m、深さ0.56mを測る。底面は平坦で、直線的に掘り下げている。埋土は黒色粘土、黒褐色砂混じりの黒色粘土で、粘土探掘坑と考える。遺物は土師器壺(111)がある。

182号土坑 (SK182, 第111図)

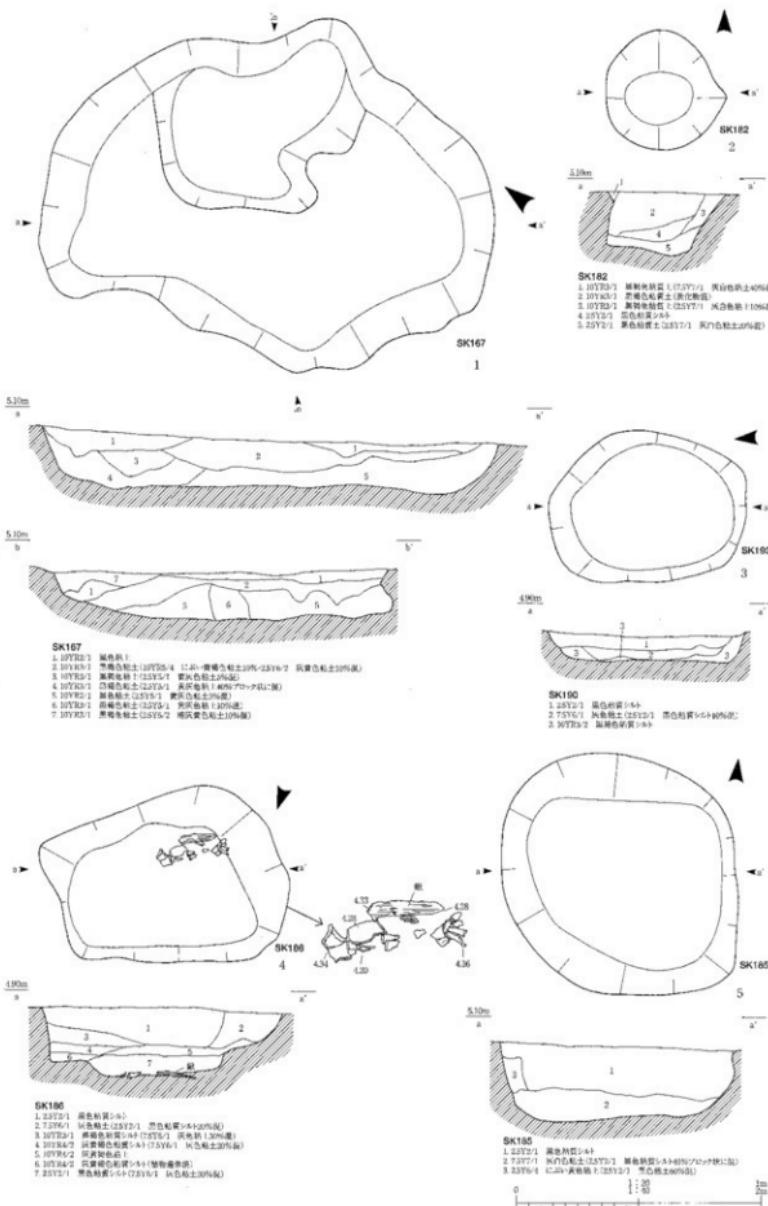
北地区中央部、SX160左岸に位置する円形土坑。長さ1.00m、幅0.96m、深さ0.51mを測る。埋土は灰白色粘土混じりの黒褐色粘質土が主体で、西側はややオーバーハング気味に下方に入り込んでいる。粘土探掘坑と考える。遺物は土師器壺が出土している。

185号土坑 (SK185, 第111図)

北地区中央やや東よりのSX160左岸、SX160に緩やかに傾斜する斜面に位置する円形土坑。径1.92m、深さ0.68mを測る。埋土は黒色粘質シルト、黒色粘質シルトがブロック状に混じる灰白色粘土で、下位の灰白色粘土は溜め置かれた粘土がそのまま検出されたと思われ、粘土土坑と考える。遺物は土師器壺がある。

186号土坑 (SK186, 第111・115・117図, 図版99)

北地区中央やや東よりのSX160左岸、SK185の東側に位置している。長さ2.04m、幅1.36m、深さ0.59mを測る不整形土坑である。埋土は黒色粘質シルト、灰黄褐色粘土、灰色粘土混じりの黒色粘質土で、中位に灰黄褐色粘土が帶状に堆積しており、SK2のような粘土土坑と思われる。底面中央が窪んでおり、ここから土師器壺(112・113)と木製品(128)が出土している。128は鍬と考えられ



第111図 遺構実測図

1. SK167 2. SK182 3. SK190 4. SK186 5. SK185

るもので、刃先は薄く削り出されており、樹種はクスギ節である。

190号土坑（SK190、第111図）

北地区中央東側のSX160左岸に位置する円形土坑。長さ1.64m、幅1.26m、深さ0.31mを測る。底面は平坦で、埋土は黒色粘質シルトを主体とし、中位に黒色粘質シルト混じりの灰色粘土が帯状に堆積する。SK2と同様な粘土土坑と思われる。

203号土坑（SK203、第99図）

北地区南東角、SX160内に位置する。IV層上面でのプラン検出が困難で、SX160をある程度掘り下げた段階で、円形の穴として残った底部付近を確認した。規模は長さ1.60m、幅1.42m、深さ0.11mを測る。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土で、底面はほぼ平坦である。遺物は底面から若干浮いた状態で土師器甕（67）が出土している。粘土採掘坑と考える。

204号土坑（SK204、第100図）

北地区東側のSX160内に位置する。SK203と同様にプラン検出が困難で、底部付近のみを確認した。規模は長さ1.66m、幅1.60m、深さ0.26mを測る。埋土は灰白色粘土混じりの黒色粘土である。遺物は底面から上師器甕（77）が一個体そのまま潰れたような状態で出土している。粘土採掘坑と考える。

293号土坑（SK293）

北地区中央東側、SX160左岸に位置する不整形土坑。長さ2.20m、幅0.70m、深さ0.33mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトを主体とし、中位に灰白色粘質シルトが帯状に堆積しており、SK2のような粘土土坑と思われる。

包含層出土遺物

上師器（第115図）

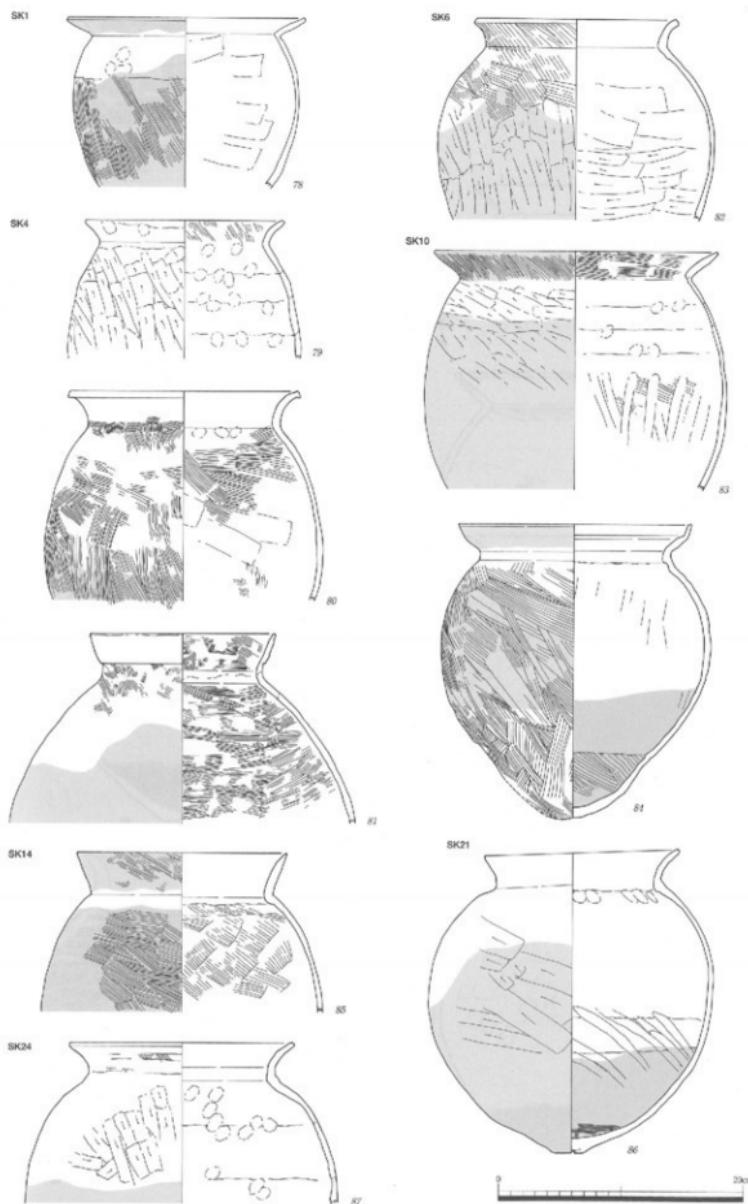
包含層出土遺物は南地区及び、北地区のX260以南については当該時期の遺物がみられるが、量的には少なく、遺構出土遺物との接合関係はない。これに対し遺構出土遺物は完形または半完形で出土しており、遺構間での接合も若干みられる。遺構出土も含め出土遺物の大半は甕・壺で、他の器種については古代のSK296出土として扱っている高坏（179）が古墳時代のものである可能性があり、唯一である。出土分布については遺構の分布と一致しており、X270以北については出土が認められない。また、南側に隣接する黒河尺目遺跡においても当該時期の遺物は確認されておらず、古墳時代の遺物は粘土採掘に伴うものに限られる。

包含層出土の遺物で、実測可能な形に復原できたのは図示した114～116である。

注1 植垣尚美他 2002 「黒河・中老田遺跡発掘調査報告」上巻地方道小杉越中継臨時道路交付企事業（B）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小杉町教育委員会

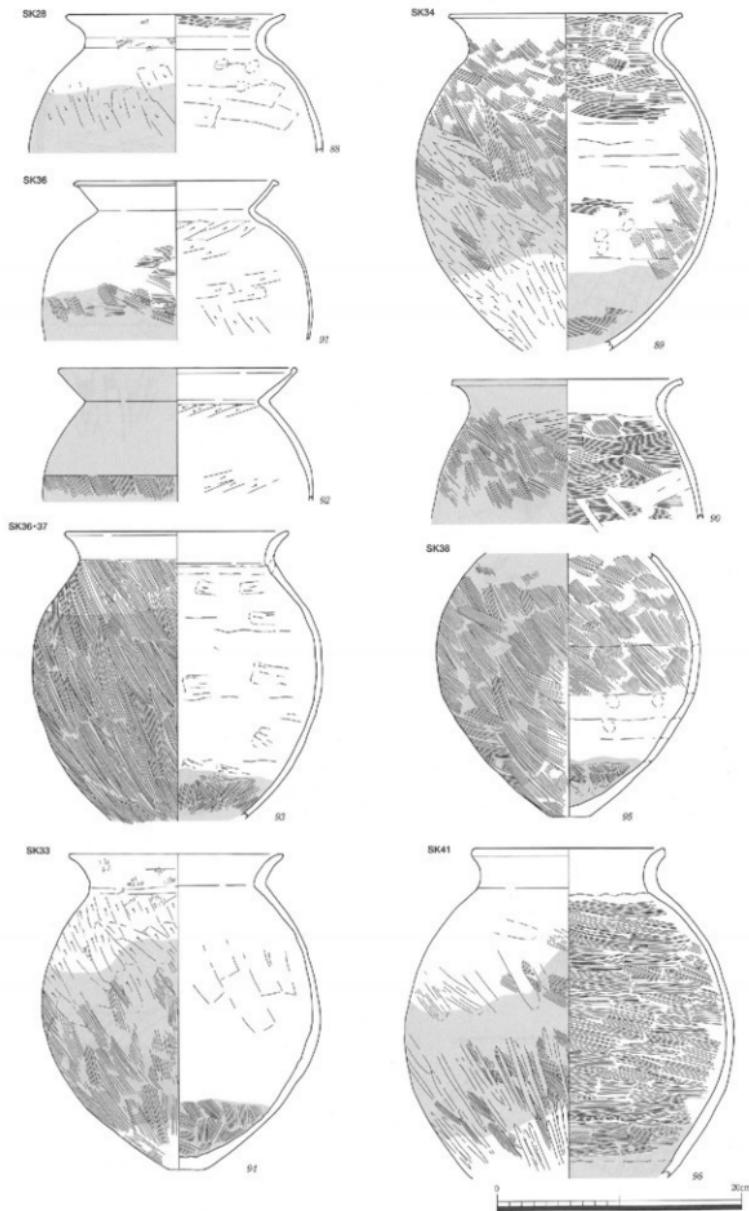
注2 多摩ニュータウンKa14遺跡で粘土採掘跡・粘土土坑の特徴について検討している。採取粘土（白色粘土）が詰め置かれたような状態で堆積していること、白色粘土が分層されること、土坑内の粘土が均質であること等から粘土の均質化と水薬を行ったものと理解されている。

齊藤 邦他 1982 「多摩ニュータウン遺跡－昭和56年度－（第1分冊）」東京都埋蔵文化財センター調査報告第2集
(財)東京都埋蔵文化財センター



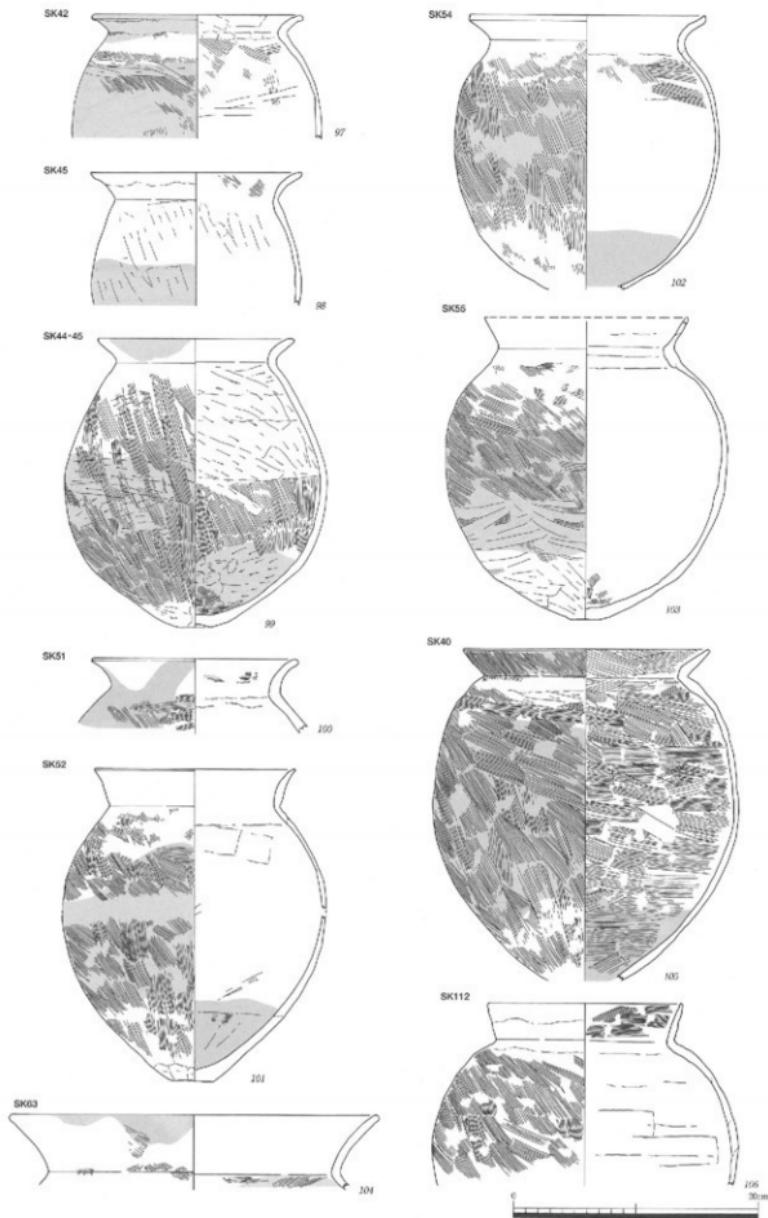
第111図 遺物実測図（1/4）

SK1(78) SK4(79~81) SK6(82) SK10(83·84) SK14(85) SK21(86) SK24(87)



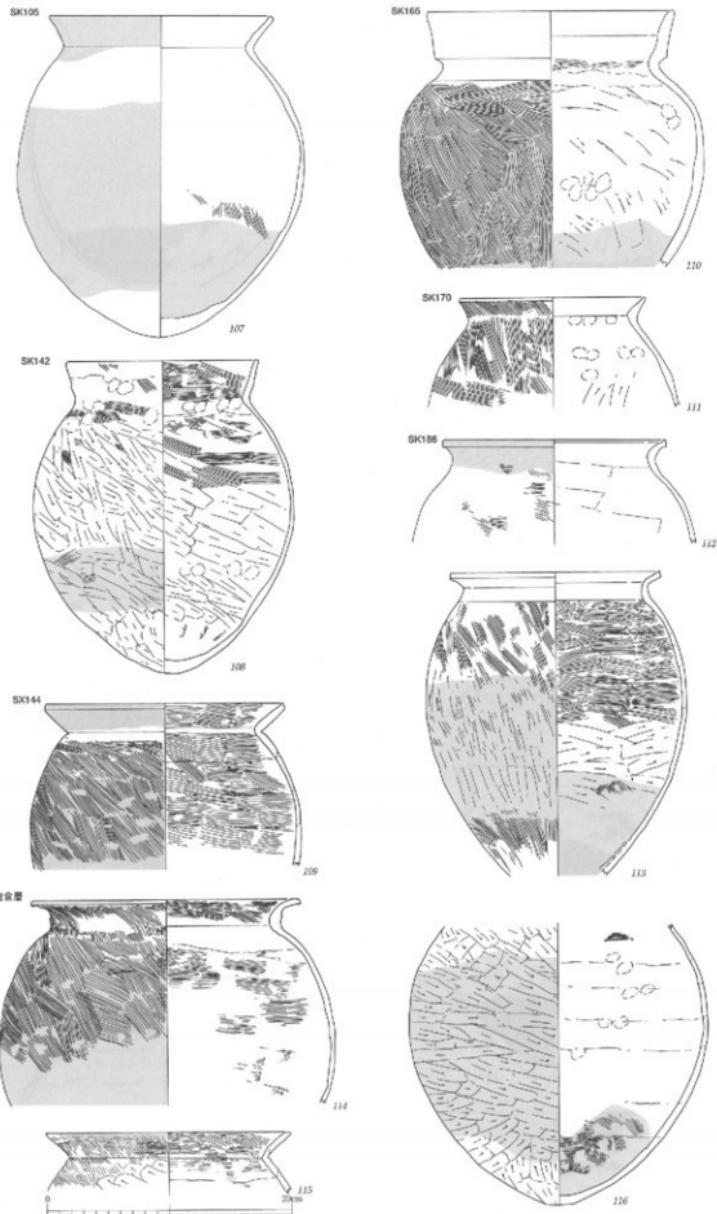
第113図 遺物実測図 (1/4)

SK28(88) SK33(94) SK34(89・90) SK36(91・92) SK36・SK37(93) SK38(95) SK41(96)



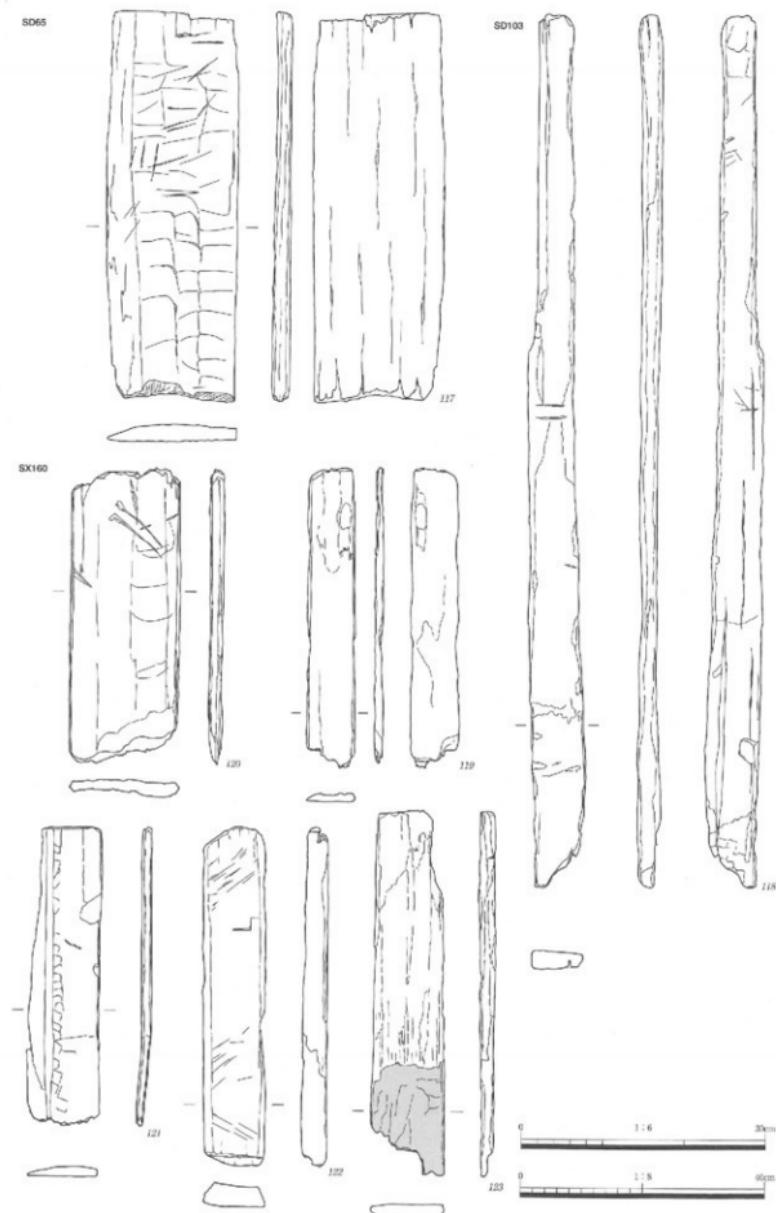
第114図 遺物実測図 (1/4)

SK40(105) SK42(97) SK45(98) SK44・SK45(99) SK51(100) SK52(101) SK54(102) SK55(103) SK63(104)
SK112(106)



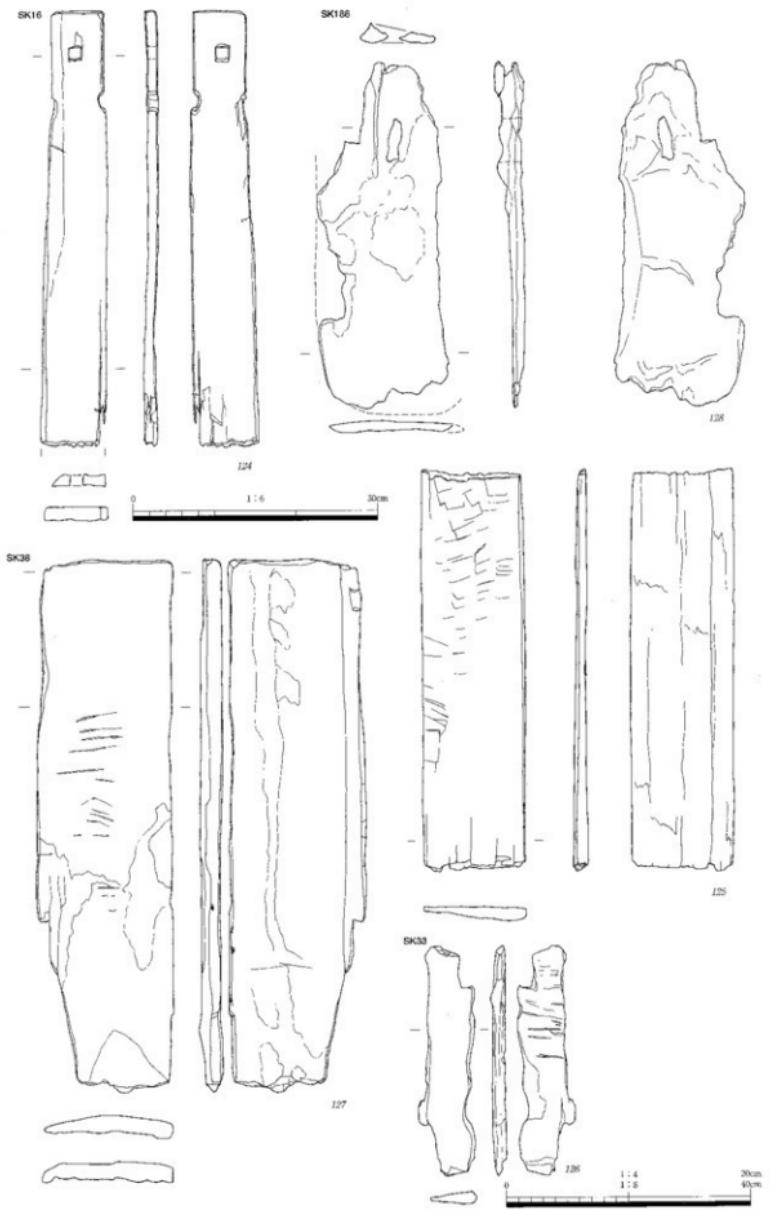
第115図 遺物実測図 (1/4)

SK105(107) SK142(108) SX144(109) SK165(110) SK170(111) SK186(112・113) 包含層



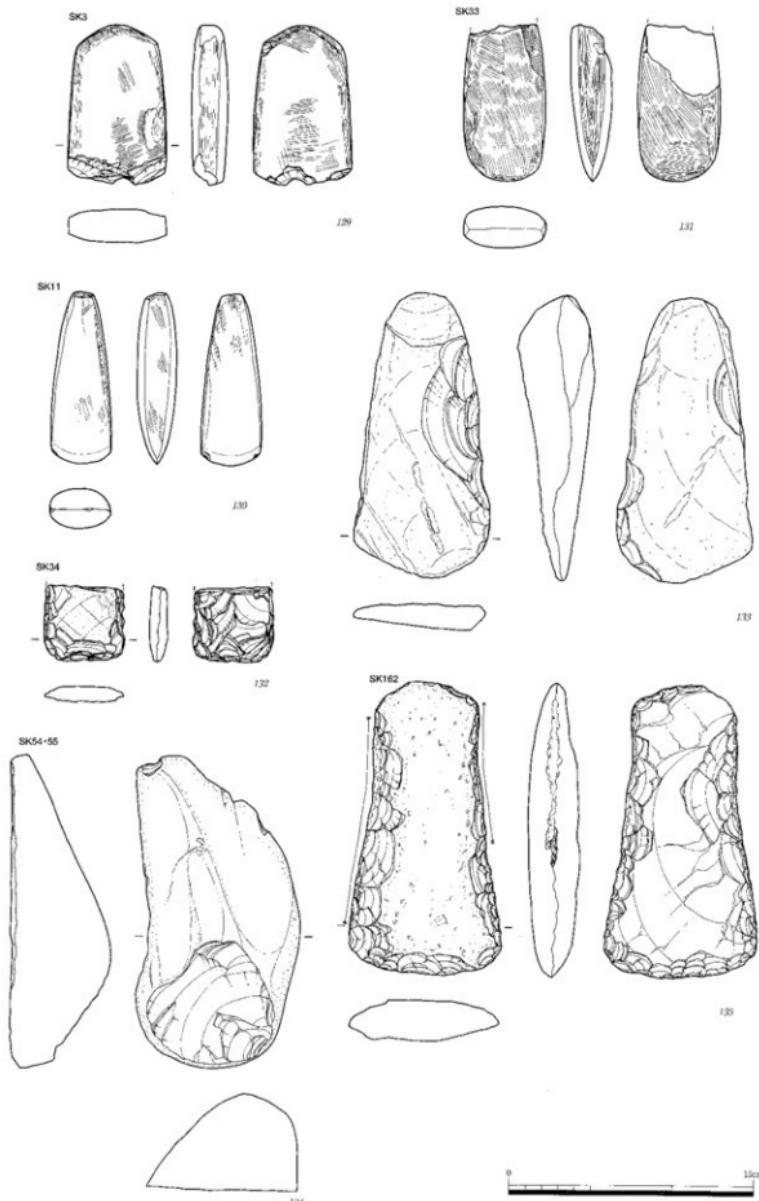
第116図 遺物実測図 (120・123 1/6, 117~119・121・122 1/8)

SD65(117) SD103(118・119) SX160(120~123)



第117図 遺物実測図 (128 1/4, 124 1/6, 125~127 1/8)

SK16(124・125) SK33(126) SK38(127) SK186(128)



第118図 遺物実測図 (1/3)

SK3(129) SK11(130) SK33(131) SK34(132・133) SK54・55(134) SK162(135)

B 古代

古代の遺構は溝1条・井戸1基・土坑54基がある。北地区の西半分から北にかけて分布しており、旧河道（S X160）左岸の自然堤防上に立地する。柱根の残る土坑が検出されているが、建物としてのプランを確認することはできおらず、集落の縁辺にあたると想定される。古代においても粘土採掘坑と思しき土坑があり、ここから須恵器制作に関わったと思われる叩き板が出土している。このことからも作業場的な性格の強い遺跡と考えられる。遺物は8世紀後半～9世紀前半を主体とする須恵器がまとまって出土しており、遺跡の時期も概ねこの時期と考えられる。

溝

131号溝（S D131、第119・120図、図版88）

北地区西側に位置し、蛇行しながら北流する溝。最大幅1.6m、深さ0.30～0.46mを測る。遺物には縄文土器から近世陶磁器まで多様なものがあるが、主体は須恵器（136～141）である。また、須恵器を多量に出土したSK193を切っていることから、古代以降の溝と考えられる。

井戸

304号井戸（S E304、第121・122図、図版72・83・88）

北地区中央部に位置する素掘り井戸。径1.30m、深さ0.78mを測る。S X168が埋まつた後に掘り込まれている。断面掘鉢状を呈し、埋土は黒色粘土、にぶい黄色粘土混じりの黒褐色粘土である。遺物は埋土中位から完形の須恵器杯（163～165）と高杯（166）が投げ入れられたような状態で出土しており、井戸祭祀の可能性も考えられる。163は平坦な底部でやや新しい様相を持つが、概ね8世紀第3四半期のものである。164の底部外面にはヘラ記号が刻まれる。166は内外面赤彩の高杯で、器形や調整は須恵器制作の技法によるものである。

土坑

104号土坑（S K104、第119図）

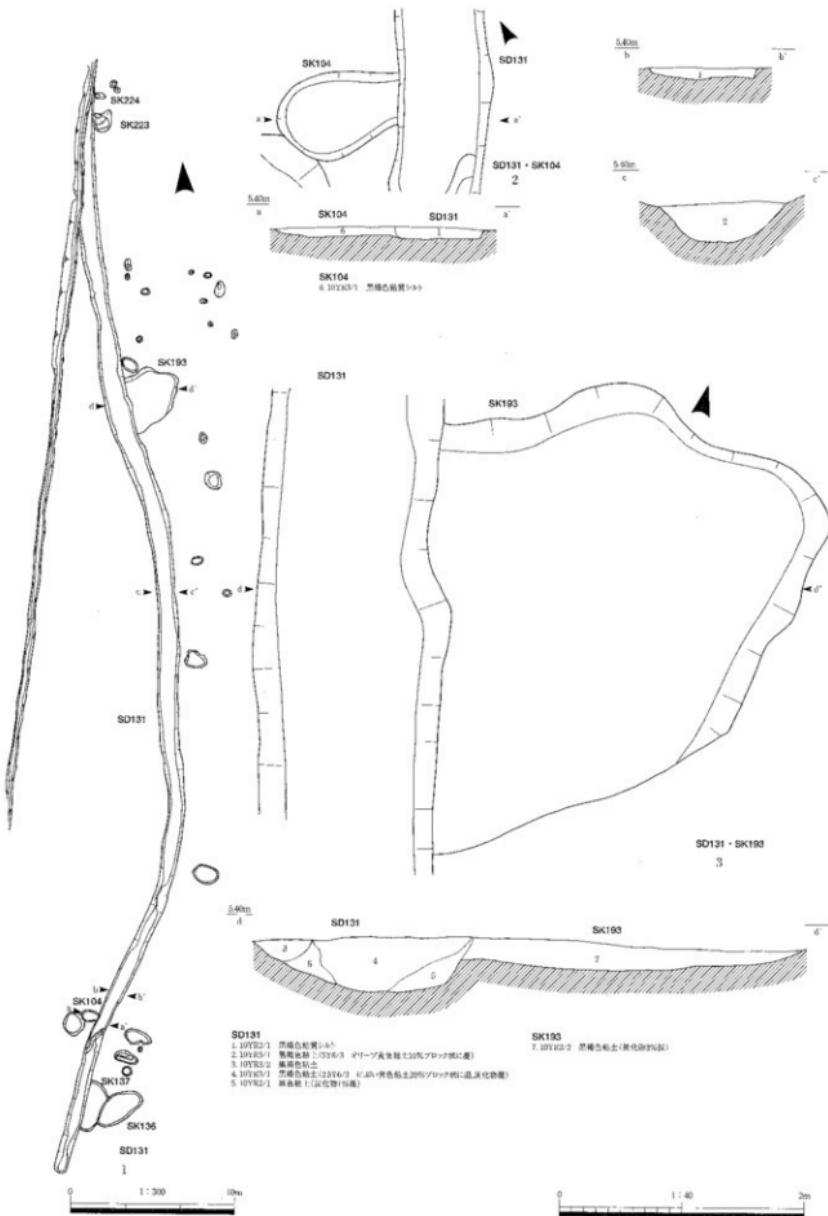
北地区南よりに位置する。S D131に切られる梢円形土坑で、幅0.58m、深さ0.16mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、浅い皿状に堆積する。遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

168号土坑（S X168、第121・122図、図版90・93）

北地区中央部に位置する不整形土坑。長さ3.04m、幅2.64m、深さ0.39mを測る。S X168は粘土採掘坑と考えられ、複数の上坑が重複している。埋土は黒色粘土、にぶい黄色粘土がブロック状に混じる黒褐色粘土がブロック状に堆積しており、人為的に埋め戻されたと思われ、埋め戻された後に北端にS E304が掘り込まれている。遺物は埋土中から土師器鍋（167）、土師器高杯（168）が出土している。168は内外面赤彩で、内面に放射状及び螺旋状暗文が施され、8世紀前半のものである。

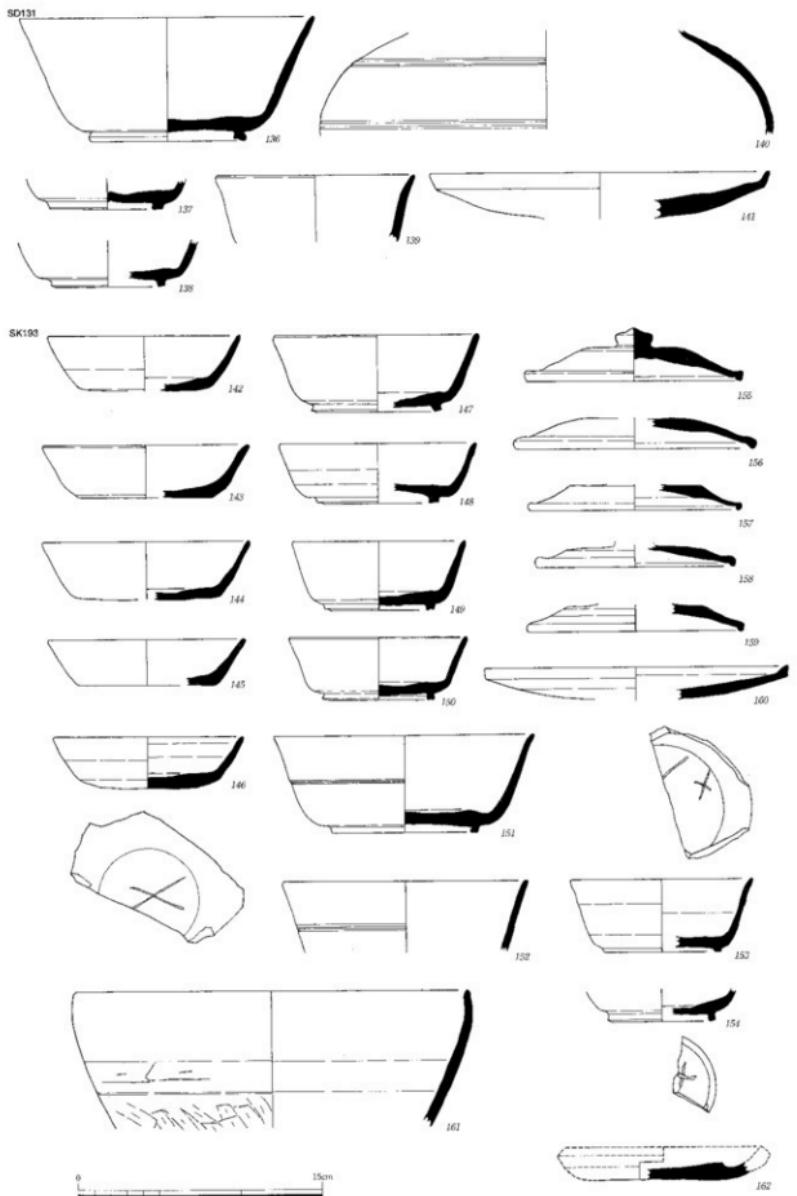
180号土坑（S K180、第121～123図、図版68・72・84・88・90・93・98・99）

北地区中央東よりに位置する不整形土坑。長さ3.36m、幅1.88m、深さ0.69mを測る。S K180は粘土採掘坑として掘られた後、再び掘り込まれ、一気に埋められている。南側の埋土4層部分は再度掘り込まれた箇所である。4層は黒褐色粘質シルトの単層で、遺物は須恵器（169～176）と土師器（177）、叩き板（181）、掘り棒（182）と考えられる木製品が出土しており、いずれも4層中からである。177は内外面赤彩の高杯または皿（盤？）の破片で内面に螺旋状暗文がみられる。181の叩き板は扁平な匙形の木製品で、身部分の両面に木目と直交する0.4～0.6mm幅の平行線を刻む。樹種はクリである。叩き板の出土例は少なく、刻線のあるものは全国でも5例しかなく、両面に刻線のあるものは初例となる²¹。181は182の掘り棒と考える先端の尖った棒状製品と共に、169・176の須恵器と出土し

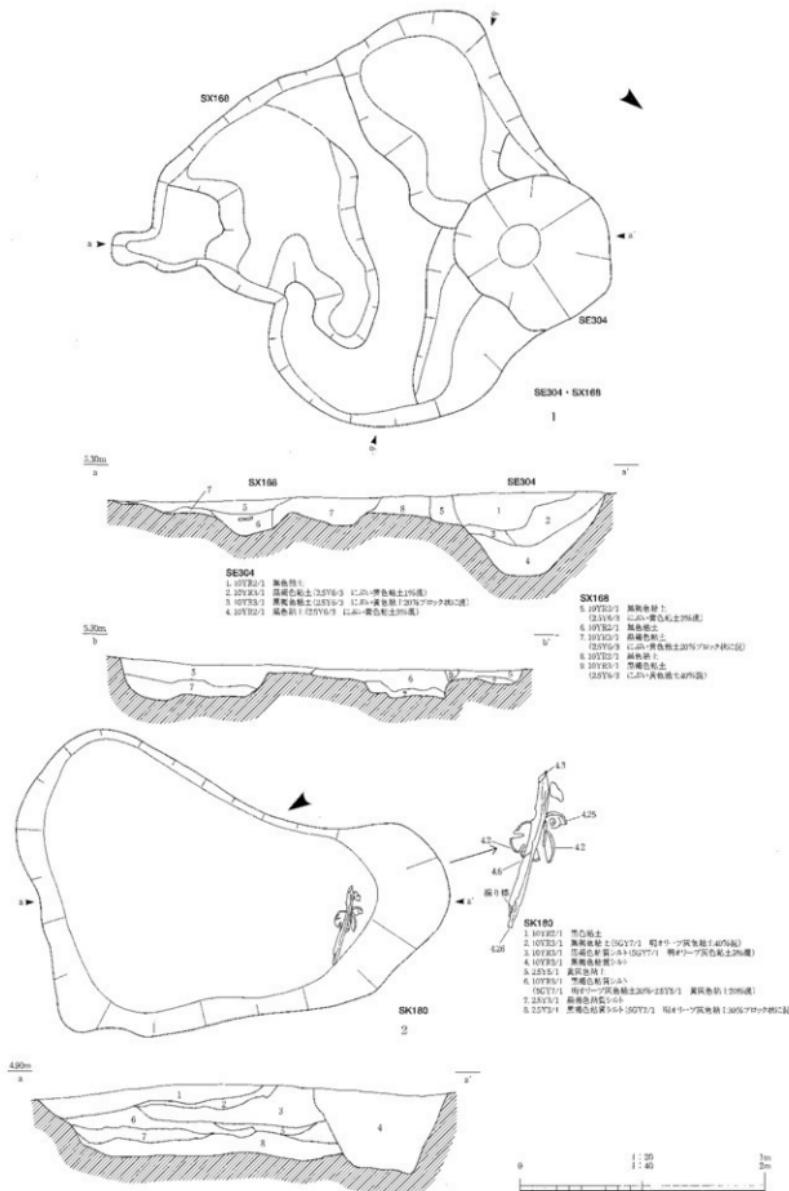


第119図 遺構実測図

1. SD131 2. SD131・SK104 3. SD131・SK193

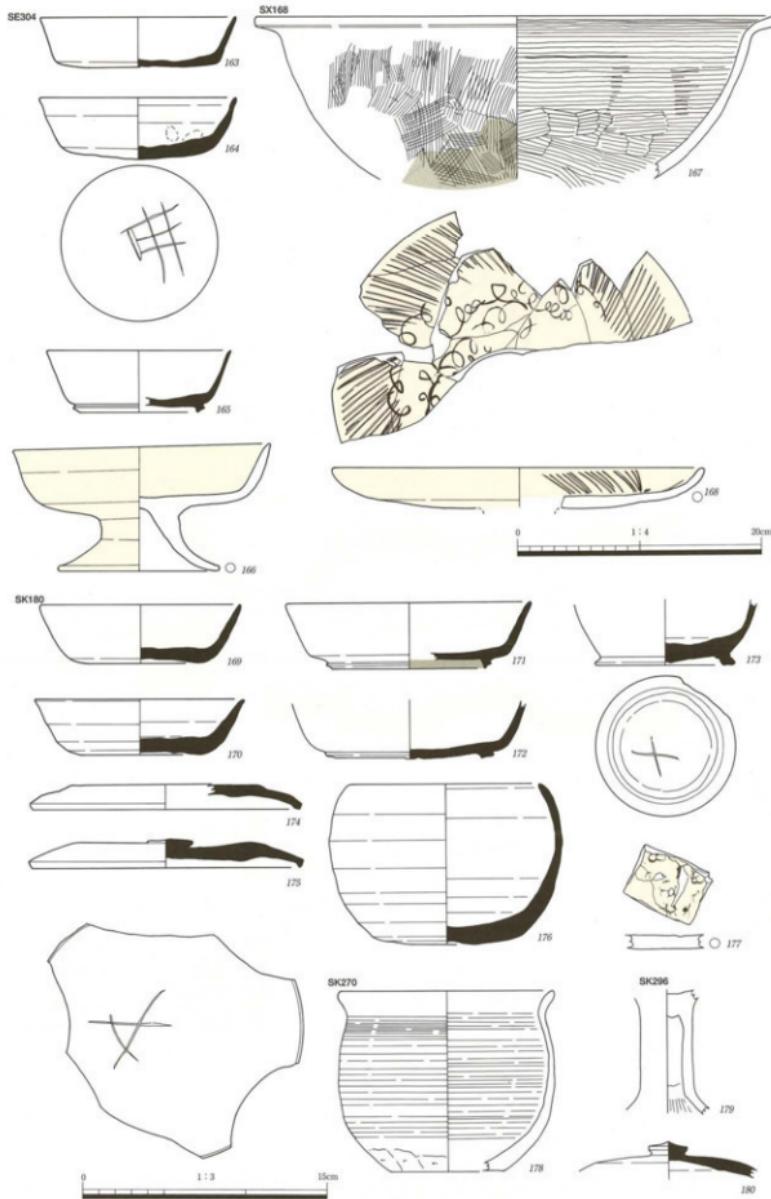


第120図 遺物実測図 (1/3)
SD131(136~141) SK193(142~162)



第121図 造構実測図

1. SE304・SX168 2. SK180



第122図 遺物実測図 (163~166・168~180 1/3, 167 1/4)

SE304(163~166) SX168(167・168) SK180(169~177) SK270(178) SK296 (179・180)



第123図 遺物実測図 (184 1/3, 181·182 1/4, 183 1/6)
SK180(181·182) SK298(183) SK193(184)

ており、須恵器の年代は8世紀後半～9世紀前半とみられ、須恵器制作に係わるものと思われる。

193号土坑（SK193、第119・120・123図、図版62・84・85・88・89）

北地区中央西側に位置する。S D131に切られており、長さ3.50m、深さ0.23mを測る浅い皿状の土坑である。埋土は炭化物混じりの黒褐色粘土で、壇上中から大量の須恵器が出土している。遺物は須恵器以外に土師器、円面鏡、鉄滓（184）、縄文土器があるが、142～161の須恵器が主体である。146・153・154には底部または見込みに「×」状のヘラ記号がある。162は無脚円面鏡の一部と思われ、群馬県上渕名遺跡に類似がある¹²。陸部はよく使い込まれてツルツルに摩耗している。出土須恵器の概ねの時期は8世紀後半～9世紀前半とみられ、SK193も同時期に営まれたと考える。

212号土坑（SK212、第124図）

北地区中央部に位置する円形土坑。長さ0.38m、幅0.28m、深さ0.14mを測る。埋土は炭化物混じりの黒褐色粘土で、底面中央が凹字状に窪んでおり、柱痕の可能性がある。

215号土坑（SK215、第124図）

北地区中央部に位置する不整形土坑。長さ4.04m、幅1.58m、深さ0.71mを測る。東側に階段状の段を持ち、底面はほぼ平坦である。埋土は黒色粘質シルトの単層である。

220号土坑（SK220、第124図）

北地区中央より位置する円形土坑。SK309に切られているが、長さ0.56m、深さ0.23mを測る。埋土は黒色粘土で、柱根が検出され、柱穴になる可能性がある。

224号土坑（SK224、第124図）

北地区北より西側に位置する楕円形土坑。長軸0.69m、短軸0.34m、深さ0.32mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、中位に黄灰色粘土が帯状に堆積する。柱穴になる可能性がある。

227号土坑（SK227、第124図）

北地区北より西側に位置する楕円形土坑。長軸0.80m、短軸0.42m、深さ0.23mを測る。埋土は炭化物混じりの黒褐色粘土で、北側が一段深くなる。柱穴になる可能性もある。遺物は土師器がある。

239号土坑（SK239、第124図）

北地区北より西側に位置する円形土坑。径0.50m、深さ0.24mを測り、埋土は炭化物混じりの黒色粘土である。柱穴になる可能性がある。遺物は土師器甕または鍋の胸部破片がある。

240号土坑（SK240、第124図）

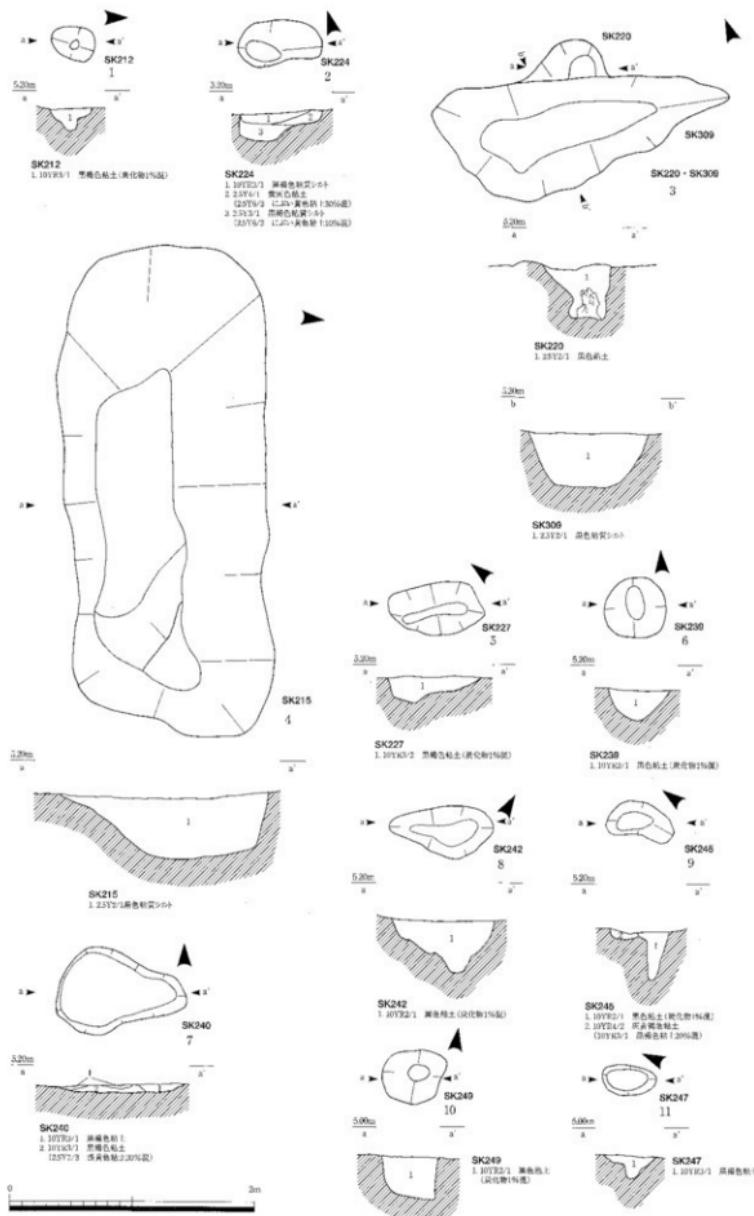
北地区北より西側に位置する不整形土坑。長さ1.06m、幅0.60m、深さ0.07mを測る。埋土は黒褐色粘土、浅黄色粘土混じりの黒褐色粘土で、浅い皿状の堆積をしている。遺物は土師器、須恵器の小片がある。

241号土坑（SK241、第125・127図、図版88）

北地区北より西側に位置する不整形土坑で、調査区外に伸びている。長さ2.96m、深さ0.40mを測る。北側が階段状に一段深くなっている、埋土は黄灰色粘土またはにぶい黄色粘土がブロック状に混じる黒褐色粘質シルトである。遺物は須恵器甕（185）が出土している。185はやや丸味を持つ底部で、8世紀中頃のものと思われる。

242号土坑（SK242、第124図）

北地区北より中央に位置する不整形土坑。長さ0.86m、幅0.43m、深さ0.24mを測る。埋土は炭化物混じりの黒色粘土で、底面中央が凹字状に窪んでおり、柱穴になる可能性がある。遺物は土師器、須恵器、珠洲がある。



第124図 造構実測図

1. SK212 2. SK224 3. SK220 · SK309 4. SK215 5. SK227 6. SK239 7. SK240 8. SK242 9. SK245
10. SK249 11. SK247

245号土坑（S K245, 第124図）

北地区北より中央に位置する不整形土坑で、長さ0.56m、幅0.26m、深さ0.38mを測る。埋土は炭化物混じりの黒色粘土、黒褐色粘土混じりの灰黄褐色粘土で、黒色粘土は柱痕と考えられ、柱穴になる可能性がある。

247号土坑（S K247, 第124図）

北地区北より東側に位置する楕円形土坑。長軸0.46m、短軸0.23m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘土の単層で、断面は漏斗状を呈する。柱穴になる可能性がある。

249号土坑（S K249, 第124図）

北地区北より東側に位置する円形土坑。径0.48m、深さ0.30mを測り、埋土は炭化物混じりの黒色粘土の単層である。

254号土坑（S K254）

北地区中央部に位置する不整形土坑で、長さ1.94m、幅1.54m、深さ0.28mを測る。埋土は灰黄褐色粘土の単層で、底面は平坦で浅い皿状に堆積している。S K288・S K308に切られており、S K289を切っている。遺物は土師器、須恵器の小片がある。

260号土坑（S K260, 第125図）

北地区北より中央に位置する円形土坑で、径0.18m、深さ0.07mを測る。埋土は黒色粘質シルトである。埋土中から砾石が出土している。

261号土坑（S K261, 第125図）

北地区北より東側に位置する楕円形土坑。長軸0.55m、短軸0.35m、深さ0.27mを測る。埋土は褐灰色粘質シルト、黒色粘質シルト、黄褐色粘土で、北側が深く南側は浅くなっている。

262号土坑（S K262, 第125図）

北地区北より東側に位置する円形土坑で、径0.30m、深さ0.32mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、東側が一段深くなっている柱痕と思われ、柱穴になると考えられる。

263号土坑（S K263, 第125図）

北地区北より東側に位置する楕円形土坑。長軸0.62m、短軸0.49m、深さ0.19mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘土混じりの黒褐色粘質シルトである。北側が一段深くなっている。

264号土坑（S K264, 第125・127図、図版72・83）

北地区北より東側に位置する不整形土坑。長さ0.88m、幅0.82m、深さ0.79mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトの単層で、検出面から0.20m程掘り下げた位置から完形の須恵器杯（186）や木製品、20cm台の蝶等が出土している。遺物は須恵器（186～188）、土師器、木製品があり、ある程度埋まった後に投げ込まれたような状態である。素掘りの井戸の可能性がある。186は身の浅い扁平な器形で、概ね8世紀第1四半期に収まると考えられる。

270号土坑（S K270, 第122・125図、図版93）

北地区北側に位置する楕円形土坑。長軸0.91m、短軸0.48m、深さ0.20mを測る。埋土は灰黄色粘土混じりの黒褐色粘質シルトで、南側が一段深くなる。遺物は土師器壺（178）がある。178は回転台を用いて成形された小型壺で、底部外面を手持ちヘラ削りしており、8世紀代のものと思われる。

271号土坑（S K271, 第125図）

北地区北側に位置する円形土坑。長さ0.40m、幅0.35m、深さ0.36mを測る。埋土は黒色粘質シルトの単層で、東側が一段深くなっている柱痕と思われ、柱穴になると考えられる。

275号土坑（SK275, 第125図）

北地区北側に位置する不整形土坑。長さ0.62m, 幅0.44m, 深さ0.36mを測る。埋土はにぶい黄色粘土混じりの灰黄褐色粘質シルトで、北側が一段深くなり、柱痕と思われ、柱穴の可能性がある。

276号土坑（SK276, 第126図）

北地区北側に位置する楕円形土坑。長軸0.64m, 短軸0.47m, 深さ0.17mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、北側が一段深くなっている、柱痕の可能性があり、柱穴になると考えられる。

280号土坑（SK280, 第126図）

北地区北側に位置する楕円形土坑。長軸0.50m, 短軸0.25m, 深さ0.13mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトの単層で、東側下部がややオーバーハング気味に下方に入り込む。

282号土坑（SK282, 第125図）

北地区北側に位置する不整形土坑。長さ2.72m, 幅1.28m, 深さ0.57mを測る。埋土は褐灰色粘質シルト、黒褐色粘質シルト、にぶい黄色粘質シルトで、北側が一段深くなる。遺物は土師器がある。

287号土坑（SK287, 第126図）

北地区中央東側に位置する楕円形土坑。長軸1.40m, 短軸0.46m, 深さ0.33mを測る。埋土は黒色粘質シルト、黒褐色シルト混じりのにぶい黄色粘質シルトで、1層は柱痕と思われ、柱穴になるとを考える。

295号土坑（SK295, 図版68）

北地区北端に位置する不整形土坑。長さ0.70m, 幅0.42m, 深さ0.23mを測る。埋土はにぶい黄色粘土混じりの黒褐色年賀シルトの単層である。南側が深く、北側は緩やかな傾斜になっている。

296号土坑（SK296, 第122・126図, 図版68・91）

北地区中央やや北よりに位置する不整形土坑。長さ2.10m, 幅1.60m, 深さ0.23mを測る。埋土は炭化物混じりの黒色粘質シルト、明オリーブ色粘土がブロック状に混じる黒色粘質シルトで、埋土中から土師器高杯（179）・須恵器杯蓋（180）が出土している。粘土探掘坑と思われる。179は高杯の脚で、屈曲して開く裾がつくタイプと思われ、杯部との接合部は絞り込むように成形されており、古墳時代の遺物の可能性が高い。しかしながら、180の須恵器杯蓋の方が下位から出土しており、SK296の埋土はブロック状の堆積で人為的に埋め戻されたと思われることから、SK296の時期は古代と考えたい。

298号土坑（SK298, 第123・126図, 図版70・99）

北地区北より東側に位置する円形土坑で、SK299を切る。長さ0.44m, 幅0.36m, 深さ0.30mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、南側で柱根が検出されている。柱根（183）は、直径20cmのクリ材で、底部は平坦に削られ、腐敗防止のため焼かれている。柱穴になると考える。

300号土坑（SK300, 第126図）

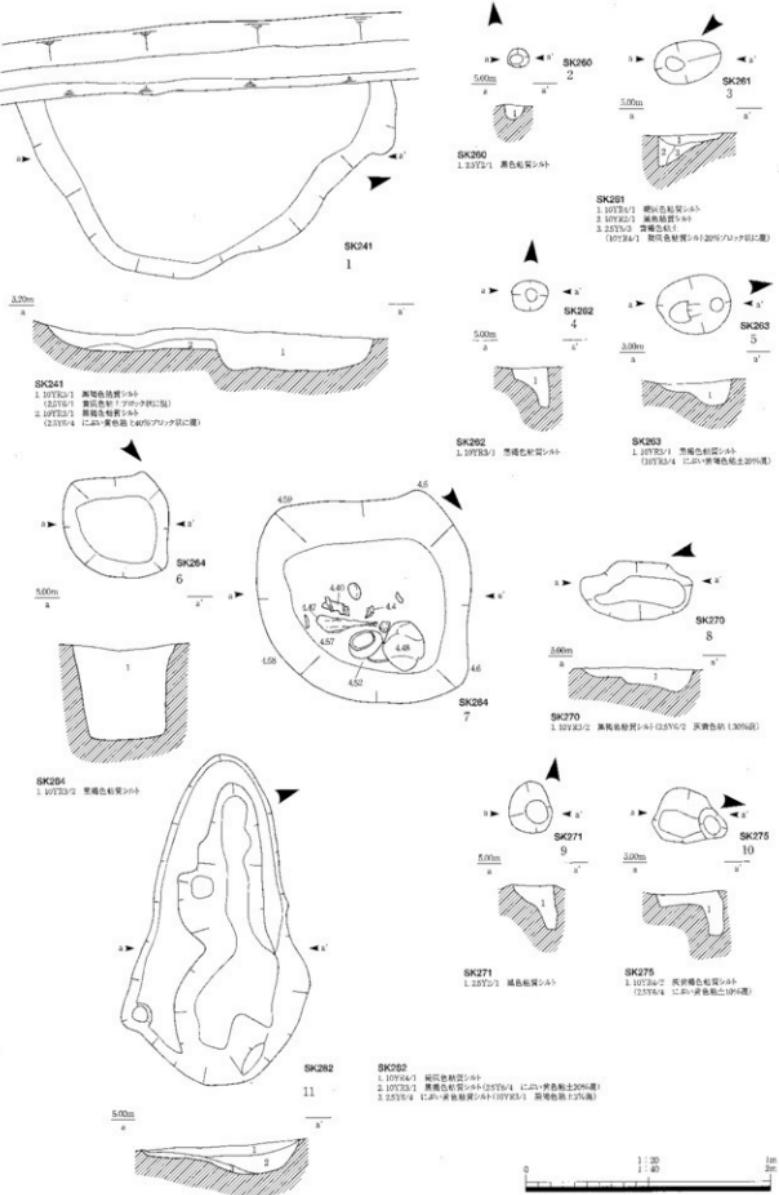
北地区やや北より東側に位置する円形土坑。長さ0.30m, 幅0.26m, 深さ0.15mを測る。埋土は黒色粘質シルトの単層である。

301号土坑（SK301, 第126図）

北地区やや北より東側に位置する楕円形土坑。長軸0.50m, 短軸0.35m, 深さ0.36mを測る。埋土は黒色粘質シルトで、東側が一段深くなっている、柱痕の可能性があり、柱穴になると思われる。

302号土坑（SK302, 第126図）

北地区やや北より東側に位置する楕円形土坑。長軸0.50m, 短軸0.31m, 深さ0.12mを測る。埋土は



第125図 遺構実測図

1. SK241 2. SK260 3. SK261 4. SK262 5. SK263 6. SK264 7. SK264遺物出土状況 8. SK270
9. SK271 10. SK275 11. SK282

黒色粘質シルトの単層である。SK302は柱穴の可能性があるSK298、SK301と直線上に並ぶことから、柱穴となる可能性が高く、この周辺に掘立柱建物があったと想定できる。

303号土坑 (SK303, 第126図)

北地区やや北より東側に位置する円形土坑。径0.28m、深さ0.12mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトの単層である。

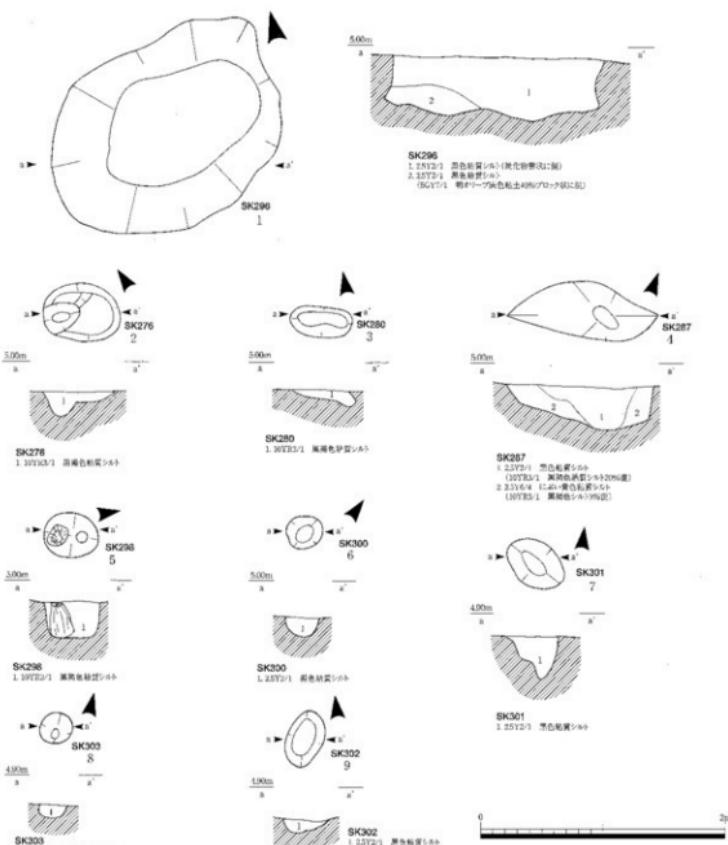
306号土坑 (SK306, 第127図、図版88)

北地区やや北により位置する不整形土坑。長さ1.62m、幅0.82m、深さ0.58mを測る。埋土は黒褐色粘質シルトで、北側が階段状に一段深くなる。埋土中から189・190の須恵器が出土している。

包含層出土遺物

須恵器 (第127~129図、図版83~89)

須恵器の出土量は多く、食器具に限っては須恵器：土師器は9:1となる。X260以北～X290以南



第126図 遺構実測図

1. SK296
2. SK276
3. SK280
4. SK287
5. SK298
6. SK300
7. SK301
8. SK303
9. SK302

については特に出土量が多く、北に行くに従い遺物量が減り、破片も小片になる傾向がある。また、須恵器には生焼け（焼成不良）で、胎土が白黄色、赤褐色のものが一定量みられる。時期は若干古い様相のものを含むが、8世紀後半～9世紀代が主体となり、一部10世紀代のものがみられる。

杯（191～234）、杯蓋（235～274）、鉢（275～280）、壺・甕（281～289）がある。230は杯Bの高台部分のみで、高台裏に茶褐色の漆と思われる付着物がある。231は底部糸切り調整の皿で10世紀代のものか。232～235は墨書きがあり、232は杯底部外面に「弟主」とあり、人名と思われる^{注1}。233は体部に横方向に「大□」とあり、二文字目は「和」、「飯」とも読めるが、判読できない。234は杯体部に横方向、235は杯蓋頂部に「黒川」とあり、「くろかわ」の地名は現在は黒河と書くが、黒川とも記したとされ、地名と思われる。文献では律宗関係史料の明徳2年（1391）9月28日書改の「西大寺諸国末寺帳」（西大寺文書）に、黒河に真言律宗寺院が所在したことが記されており、鎌倉時代～南北朝前後には黒河の記述がみられる^{注2}。234・235は8世紀後半のもので、「くろかわ」は文字資料としては500年近く遡るものとなる。また、黒河尺目遺跡でも「黒川」、「弟主」かと思われる墨書き上器が出土している^{注3}。233は「×」状のヘラ記号のある杯蓋である。268は壺蓋、269・274は環状つまみの杯蓋と思われるが、269は上下逆になり浅い皿になる可能性もある。273は内面に墨痕がみられ、転用硯と思われる杯蓋である。279・280は瓶の可能性のある把手付の鉢で、把手部分に沈線が施され、下位はケズリ調整である。285は算盤正状の胴部を持つ長頸瓶で、8世紀後半のもの。286～289は甕で、289は内面放射状當て具を使用しており、9世紀代のもの。

土師器（第130図、図版90～92・94）

土師器の出土量は少なく、甕・鍋等の煮沸具を中心で、椀・皿類はごく僅かである。時期は8世紀代、10世紀～11世紀、12世紀～13世紀、14世紀代と時期幅があるが、8世紀代、10世紀～11世紀代のものが主体となる。

盤（290）、高杯（291～294）、椀・皿（295～305・308～314）、甕・鍋（306・307・317～323）がある。290は内外面赤彩で、内面に螺旋状暗文が施される盤あるいは皿である。291・293は赤彩された高杯で、8世紀代のもの。309は口縁端部が外反する皿で、内面は丁寧にミガキが施される。310・311は内面黒色処理された椀で、10世紀後半頃のもの。314は糸切りされた柱状高台で、12世紀後半代のもの。307は小型甕の底部で、底部は回転糸切り痕が残る。323は鍋で、8世紀代のもの。

灰釉陶器（第130図、図版85・97）

315・316があり、釉を浸し掛けによって口縁内外面に施釉する椀で、10世紀後半～11世紀のものか。

土製品（第130図、図版63・93）

土錘（325・326）、不明土製品（324）がある。325・326はいずれも樽型で、外面に成形時にいたと思われる指押さえの痕が残る。324は寸胴の土錘状の外見に上及び側面からの穿孔があり、L字状に孔が貫通しており、不明土製品とした。成形は指ナデによって行われ、かすかな棱を持つ。

注1 上田尚美 2001 「土器制作の道具－黒河中老田遺跡出土資料の紹介－」『富山考古学研究 第4号』

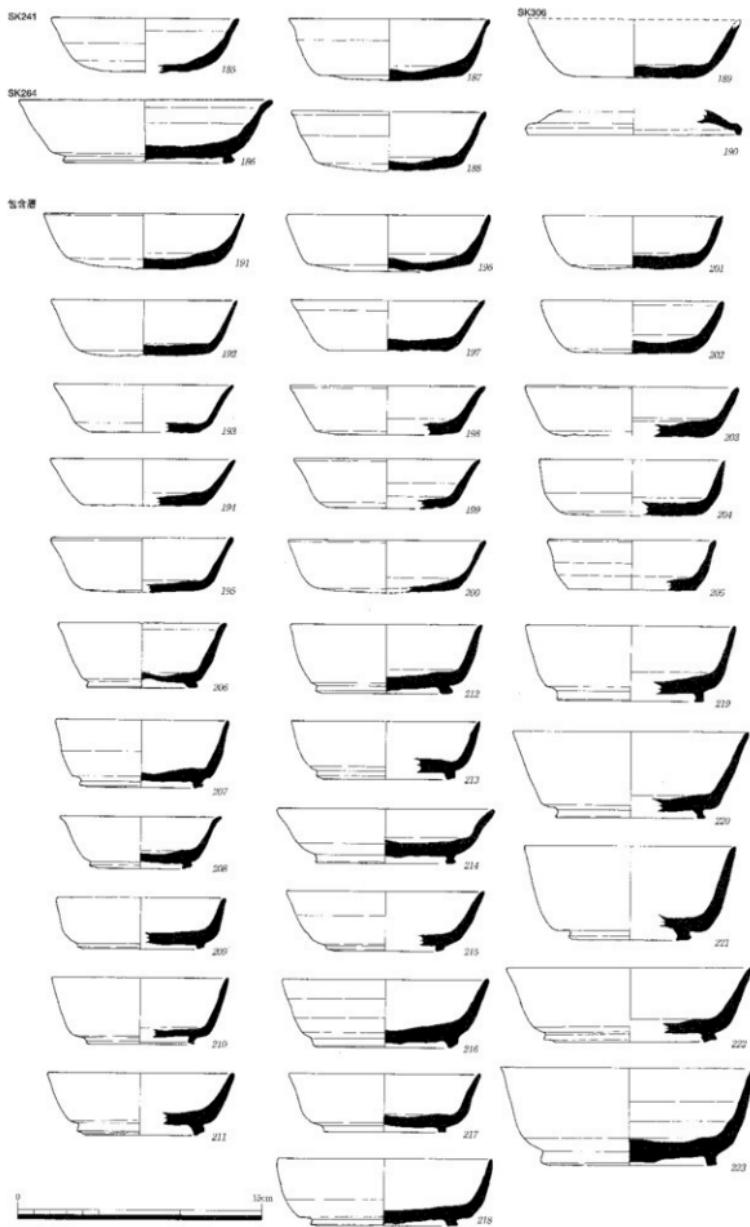
（財）富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所

注2 吉田恵二 1985 「日本古代陶磁の特質と系譜」『國學院大學考古學資料館紀要 第1輯』國學院大學考古學資料館
堺町教育委員会 1975 「明神遺跡発掘調査報告書 貴上御名山古土瓦、鏡調査報告」

注3 平川 南氏にご教授いただいた。

注4 植藏 勝 1997 『小杉町史 通史編』小杉町役場

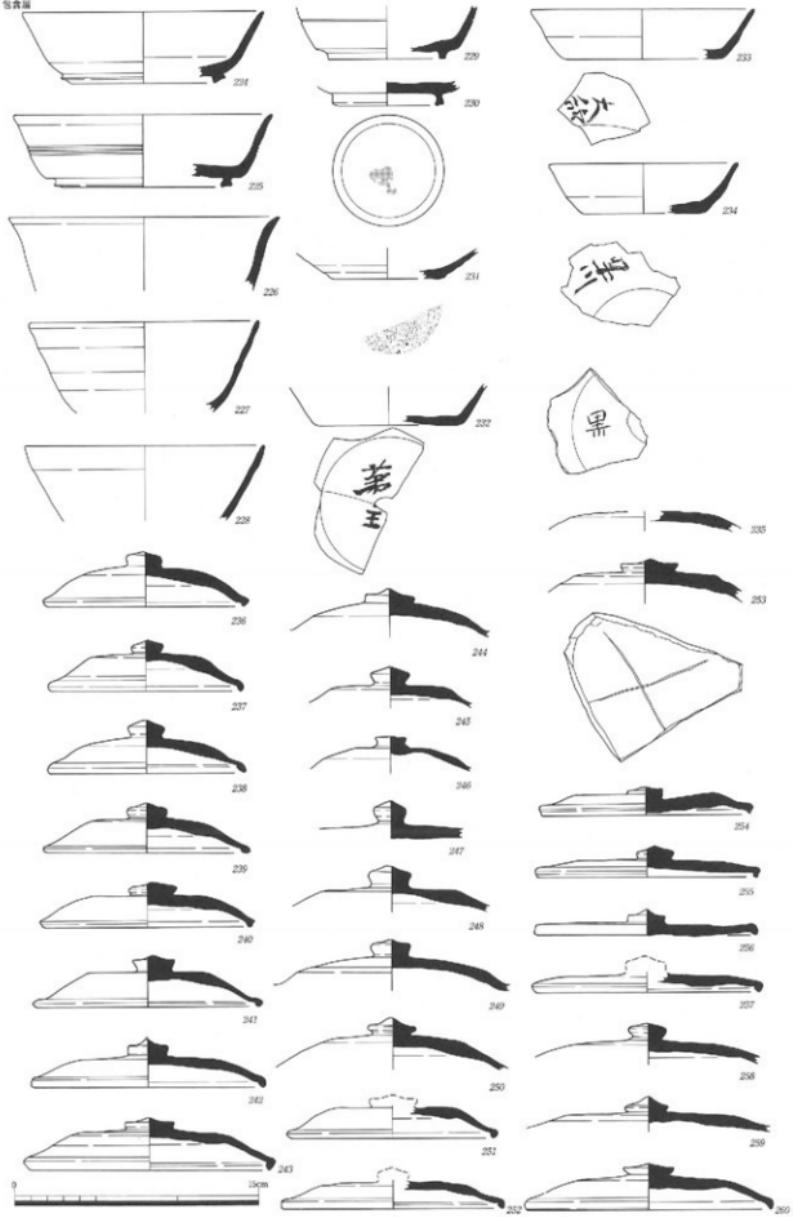
注5 稲垣尚美他 2002 「黒河尺目遺跡発掘調査報告」小杉町教育委員会



第127図 遺物実測図 (1/3)

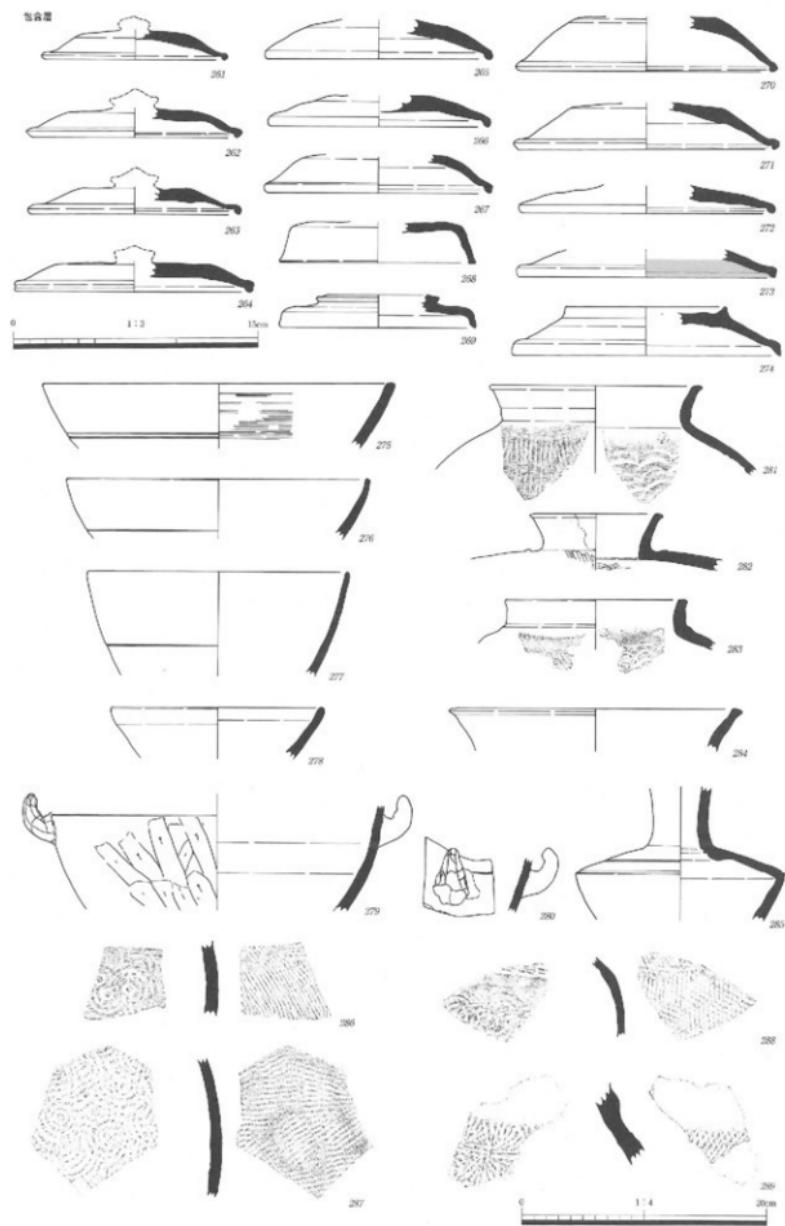
SK241(185) SK264(186~188) SK306(189·190) 包含層(191~223)

包含層

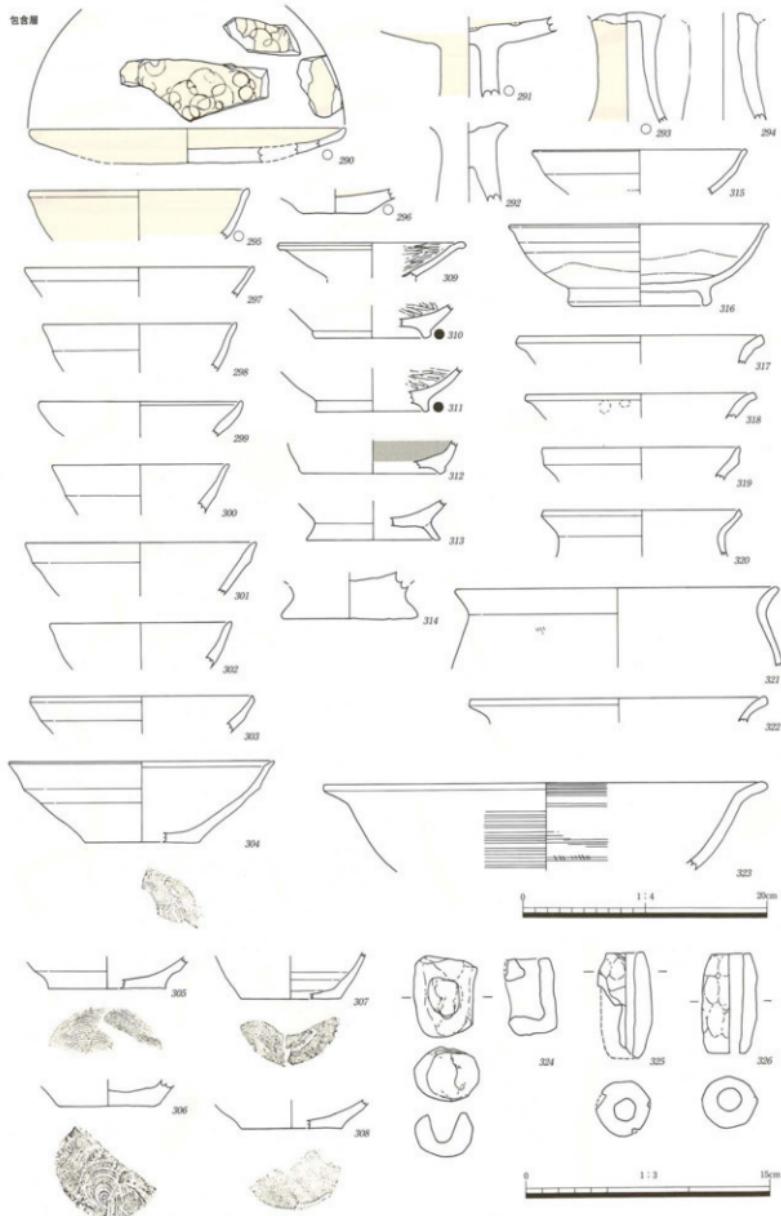


第128図 遺物実測図 (1/3)

包含層



第129図 遺物実測図 (261~274 1/3, 275~289 1/4)
包含層



第130図 遺物実測図 (290~316・324~326 1/3, 317~323 1/4)
包含層

C 包含層出土遺物

縄文上器、土師器、青磁、白磁、石器、鉄滓などがある。これらの多くは遺構に伴わず、調査区周辺に当該時期の遺跡の存在が想定される。ここでは各々、まとめて記述する。

縄文土器^①（第131図、図版95・96）

黒河中老田遺跡においては縄文時代の明確な遺構はなく、出土量も少ない。時期は327～336・357は中期前葉、337～349は中期中葉、350～355は中期後葉、356は後期前葉のものと思われ、中期中葉が主体となると思われる。334は深鉢の底部で、スダレ状圧痕がある。341・343は半隆起線施文で、末端が渦を巻く斜行する隆帯を中心に、半隆起線ではなく器面を飾るのを特徴とする中期中葉のものである。350は波状口縁の深鉢で、口縁部に2条の平行沈線を巡らせ、その間に綫方向の短線を引いた串田新II式のものである。353・354も串田新II式のもので、葉脈状文を施している。356は口縁部に波状沈線を巡らせた気屋式のもの。358は土偶の脚部で、側面左側に黒斑があり、脚部の内側で生焼け状になった部分と思われることから、右脚部と考える。円錐形の上面には剥離面と、深さ1.4cmほどの孔があり、ここに棒状のものをさして接合する木芯接合法^②を用いていたと思われる。八尾町長山遺跡にみられるような有脚土偶（I群）^③で、中期前葉のものと思われる。

石器（第132～134図、図版58～60・101～104）

打製石斧（359～366）、磨製石斧（367～382）、石錘（386～389）、疊核石器（383）、両極剥片（384）、多孔石（385）がある。磨製石斧は刃部が折れた後に敲いて成形し直し、刃部の再生を試みたと思われるもの（375）や、刃部の研ぎ直しが顕著なもの（380～382）等、使い込まれているものがみられる。石器の大半は周辺の縄文時代の遺跡からの流れ込みと思われるが、打製石斧のうち、362・364～366は遺構出土の133・135と同様な石鍬と思われ、古墳時代に属す可能性がある。これら石鍬と思われる打製石斧は、円錐を敲いて素材とし、刃部はそのままで、側刃だけ敲いて成形している。裏面に刃こぼれはみられるが、摩耗痕などの使用痕は顕著でない^④。制作技術は縄文時代の打製石斧とさほど変わらないが、古墳時代のものと考えられるものは撥型で、黒河尺目遺跡の縄文時代の遺構出土のものより相対的に大型である。粘土採掘に使用した掘削具の可能性が考えられる。

土師器（第135図、図版94）

いわゆる中世土師皿で出土量は少なく、小片が多い。390は底部に糸切り痕が残る皿で、12世紀前半のものとみられ、若干古い様相を呈する。391～399は13世紀～14世紀と思われ、391～395の口径8.0cm～9.8cmの小型のものと、396～399の口径13.0cm～16.1cmの大型の2タイプがみられる。

白磁・青磁（第135図、図版97）

白磁碗（400～402）、青磁皿、椀（403～405）がある。いずれも12世紀～13世紀の頃のものと思われる。402は太宰府分類^⑤のV類とされるものと思われる。403は体部下方に段を持つ白磁皿。404・405は龍泉窯系の青磁碗で、内面に片切彫りで蓮華文を施し、外表面は無文である。太宰府分類1類2に相当すると思われる。

木製品（第135図、図版98）

北地区の西側、I層（表土）から出土している。406は表裏両面とも黒色漆塗りの折敷で、樹種はヒノキ亞科。407は雲形？の部材で、中央部に孔があいており、樹種はスギである。時期は不明。

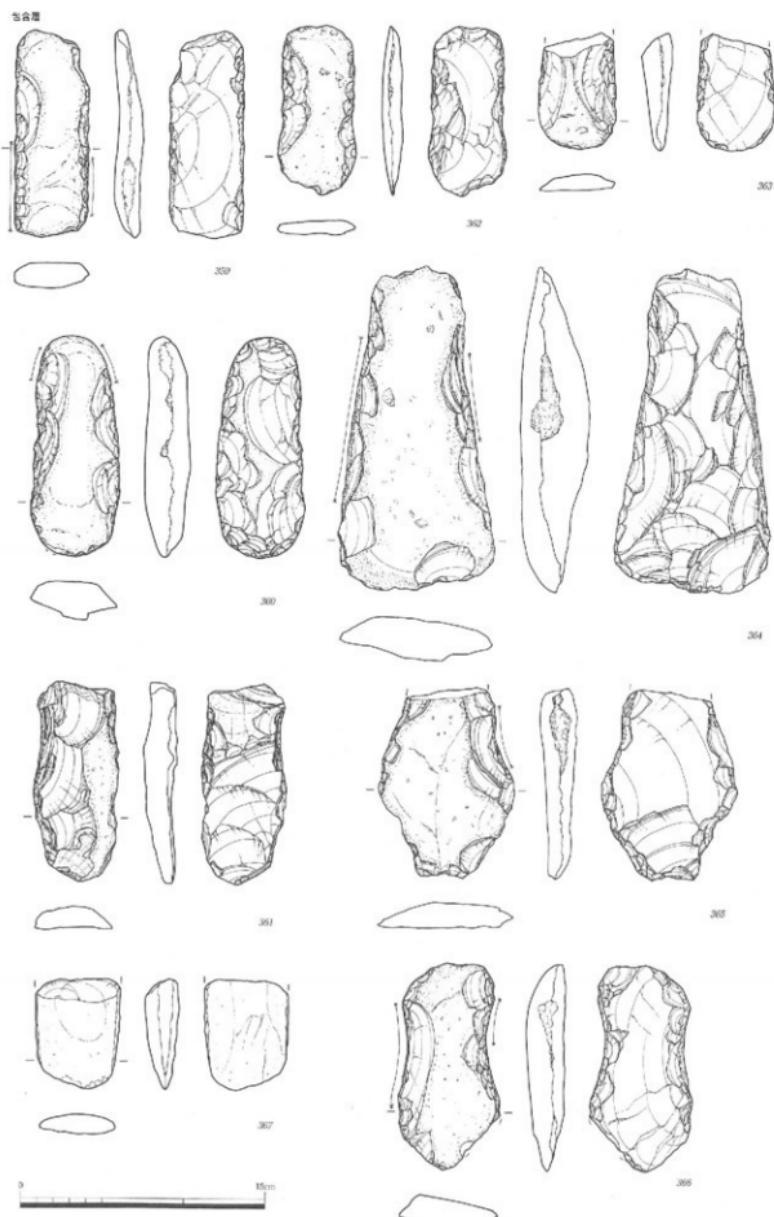
石製品（第135図、図版61）

砥石（408）がある。石材は凝灰岩である。時期は不明。



第131図 遺物実測図 (358 1/2, 327~357 1/3)

包含層

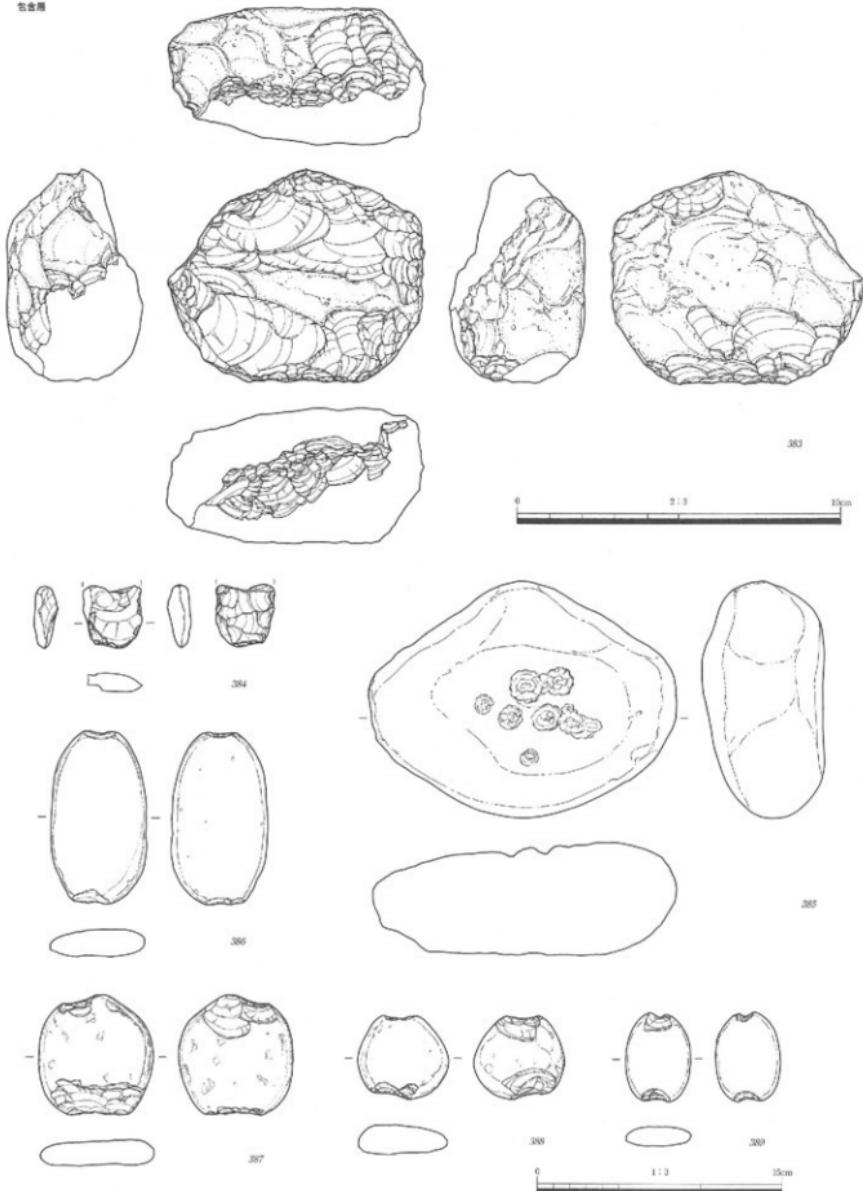


第132図 遺物実測図 (1/3)
包含層

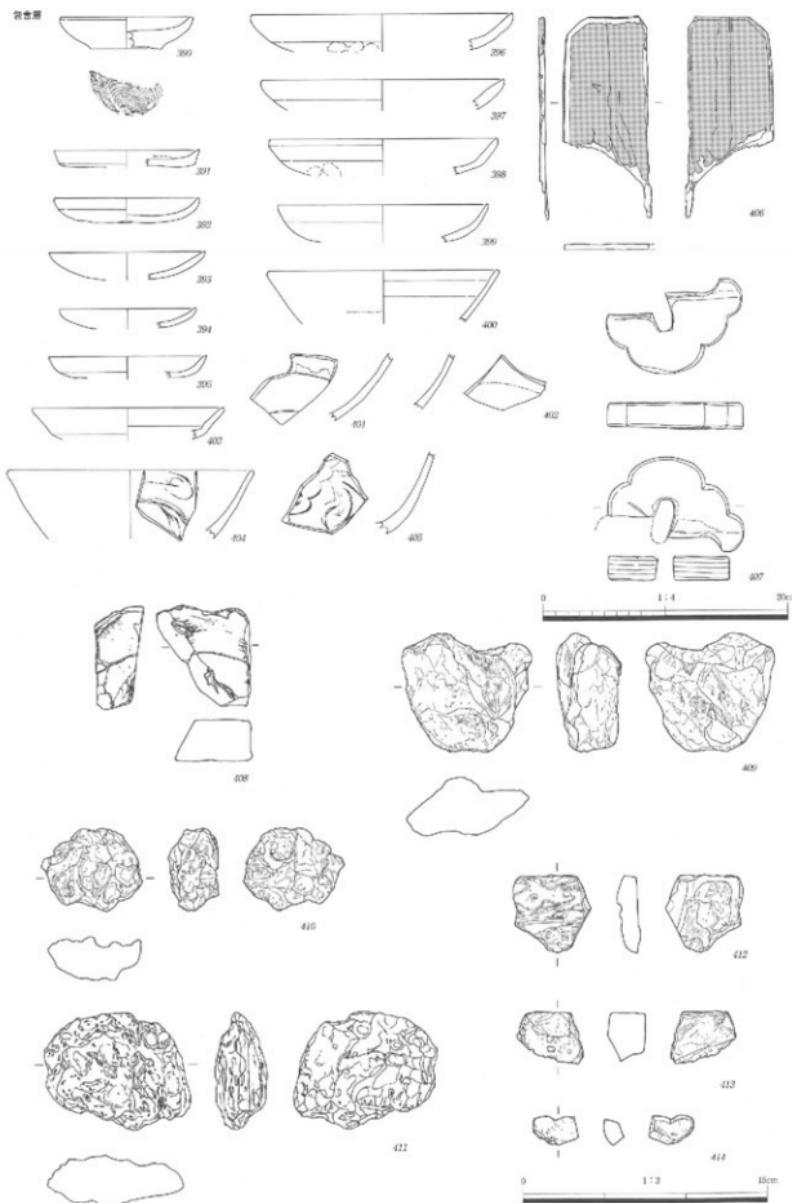


第133図 遺物実測図 (1/3)
包含層

包含層



第134図 遺物実測図 (383・384 2/3, 384~389 1/3)
包含層



第135図 遺物実測図 (390~405・408~414 1/3, 406・407 1/4)
包含層

金属製品（第135図、図版62・63）

鉄滓・椀形滓があり、北地区北半で多く出土している。鉄滓としたものには鉢滓・流动滓等も含み一括して鉄滓としている。409~411は椀形滓、412~414は鉄滓である。遺跡のある射水丘陵一帯では多くの製鉄関連遺跡の存在が知られており、これらの遺物は周辺遺跡からの流れ込みと思われる。

注1 龍文土器の器種分類・時期等については横井重洋氏から御教示いただいた。

注2 小野正文 1984 「土偶の分割複制作法資料研究（1）－東京都神谷原遺跡の土偶－」

『平安丘陵考古学研究会会報 丘陵 第1号』甲斐丘陵考古学研究会

注3 神似孝造他 1985 「長山遺跡発掘調査報告」八尾町教育委員会

注4 自然科学的分析 「V 黒河中老田遺跡・黒河尻日遺跡から出土した打製石斧の低俗平使用痕分析」に詳しい。

池谷勝典・馬場伸一郎 2003 「弥生時代飯田盆地における打製石器の用途について」『第6回例会発表要旨集 生業』中部弥生時代研究会

注5 横田賢次郎・森田 雄 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館

3まとめ

A 遺構

今回の調査では古墳時代・古代の二時期があり、溝4条・井戸1基・土坑169基が確認されている。古墳時代の遺構の大半は粘土探柵坑で、生活痕跡は認められず、「作業場」的な遺跡である。粘土探柵坑は南地区南西角から北地区東半の約90mの間、標高5.4m~4.2mにかけて検出されている。IV層の灰白色粘土を採取しており、探柵坑の底面は平坦である。重複しながら連続して掘り込まれるものと、単独のものがあり、旧河道内及び肩部に帶状に連なって分布している。前者は河道内、後者は河道肩に多くみられる。旧河道は縄文時代中期以降に埋没したと考えられる河道で、S D65・S D102・S D103・S X160をその痕跡として想定している。S D65以南、S X160以北については浅い落ち込み状となって終わっているが、等高線からは帶状に連なる土坑群をたどるラインを流路と推定復原した。粘土探柵坑としたものには、粘土を溜め置き（仮置き？）したもの、粘土の均質化のため水簸を行っていたと思われるもの等を含んでいる。このうち、水簸を行っていたと思われる土坑には方形で浅い皿状のものがあり、南地区に多くみられる。埋土は人為的に埋め戻しながら掘り広げたと考えられるものが多く、灰白色粘土（IV層）がブロック状または霜降り状に混入している層が確認できる。連続する探柵坑は4~5基を1単位として、浅いところから深いところへ掘り進めている。

粘土の探柵方法は、戸東遺跡³¹で、「第1段階 緩慢の掘削の後、底部の粘土の採掘。第2段階 壁部分の粘土の採掘。第3段階 採掘壙の拡張及び旧壙の埋め戻し。第4段階 拡張部分の採掘。」の4段階が示されている。黒河中老田遺跡の探柵坑群は、基本的にこの4段階と同じ手順で採掘されていると思われ、比較的の短期間に営まれたものと考える。調査区の南西約2kmの小杉流通業務団地内の遺跡群でみつかっている粘土探柵坑群でも、同様の手順で採掘されていたと考えられている³²。

遺物は埋土中位~下位にかけて、完形または半完形の土器や板材が出土するものが多く、廃棄されたというよりは置き去られたような状態である。器種は甕・壺に限られ、他の器種は全くみられない。このような出土状況は、調査区の南約500mに位置する小杉町塚越A遺跡³³の弥生時代の粘土探柵坑でもみられ、粘土探柵における共通した「慣習」のようなものがあったと思われる³⁴。

古代の遺構は、北地区の西半に分布し、旧河道左岸の自然堤防上に立地している。柱穴と思われる土坑が検出されているが、建物のプランは確認できず、調査区は集落の縁辺に位置すると考えられる。

古代においても粘土採掘を行っていたと考えられる土坑が3基確認されているが、いずれも単独で存在している。標高は5.0m～4.8mを測り、古墳時代のS X160（旧河道）以北の浅い落ち込み状になつた部分に位置している。埋土は古墳時代の粘土採掘坑と同様に人為的に埋め戻されたものと考えられ、8世紀後半～9世紀前半にかけての土師器、須恵器の他、SK180からは掘り棒や須恵器制作に使用したと思われる叩き板が出土している。にぶい黄色粘土（IV層）を採取しているが、X267付近を境にⅣ層は粘土から粘質シルトに変化している。古代の粘土採掘坑はちょうどこの土質の変換点付近に立地しており、古墳時代とは別種の粘土を必要としたか、あるいは良質な粘土を求めて採掘場を移動させたと想定される。



第136図 黒河中老田遺跡 時期別造構分布図 (1:1000)

B 遺物

古墳時代の粘土探掘坑からは完形・半完形の状態で土器や板材が出土しており、これらの土器の位置付けを行いたい。出土土器について、全体的な特徴を示すと以下のようになる。

- ①器種は壺・壺に限られ、9割以上が壺である。
- ②ほぼ全てに日常的に使用されていたと思われる煤・コゲの付着がみられる。
- ③完形が多く、半分や大型の破片で出土する。
- ④出土位置は探掘坑の埋土中位～下位にかけてである。

土器の多くは粘土探掘坑内からの出土である。探掘坑の埋土は人為的に埋め戻されたと思われるものが多くあり、一度掘った坑を再度掘るといった重複例ではなく、土器はパックされたような状態である。これらの土器は粘土探掘に伴い壺が選択され、意図的に埋められたものと考えられる。

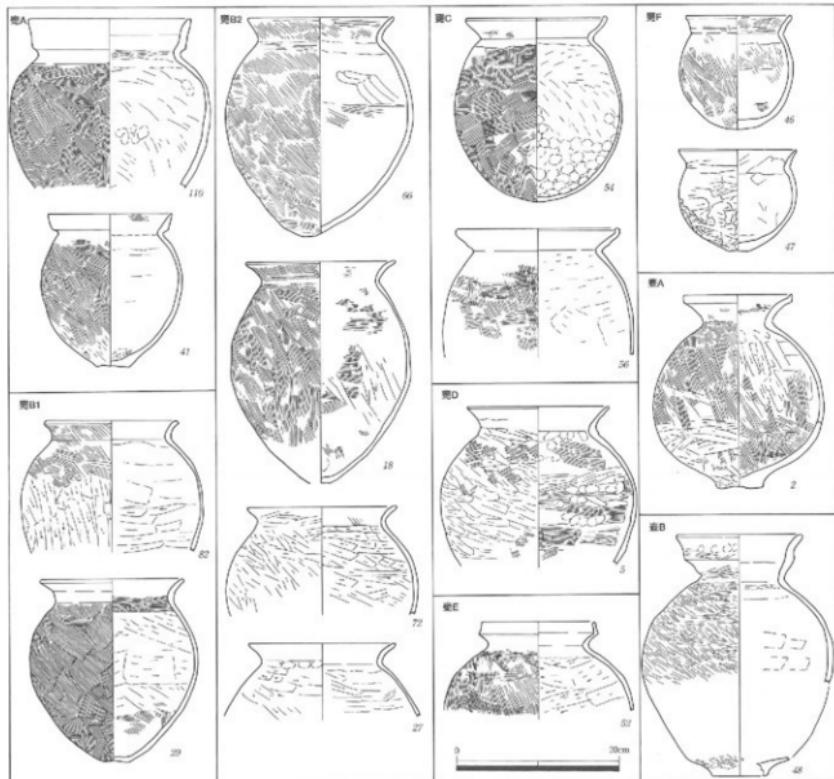
土器の口径は15cm～20cm台がほとんどで、17cm～18.5cm台ものは43%をしめており、法量においても意図的な選択が行われていると想定できる。粘土探掘坑と考えられ、壺の出土率の高い遺跡は、弥生時代後期～庄内式期・布留式期に他地域において確認されており、共通した慣習・思考・行動パターンが存在した可能性が指摘されている⁵⁵。

接合・復原して図示した土器のうち、壺は96.6%をしめており、完形・半完形のものは43%となる。口縁形態を主とした分類は次のようになる。

- (1) 壺 A：有段口縁壺 口縁部が段をもつもの。受口状も含む。
B 1：くの字口縁壺 口縁端部を面取りするもの、能登形壺とその影響がみられるもの。
B 2：くの字口縁壺 口縁端部を丸く収めるもの。
C：布留系壺 口縁端部を肥厚させたもの⁵⁶。
D：タタキ壺 口縁～肩部にタタキが施されるもの。
E：山陰系壺 内傾する有段口縁をもつもの。または、有段口縁の口縁帯下端がやや突出したもの。山陰の影響が強くみられるもの。
F：小型壺 くの字口縁に、球胴のもの。
- (2) 壺 A：広口壺 口縁部が短く、段を持たず、外反するもの。
B：複合口縁壺 A類の口縁端部をさらに外反・伸張させたもの。

壺Aは口縁帶に複数凹線が施されるもの(40)、口縁帶が直立し、端部をやや鋭く取るもの(39・41)等、若干古い様相を呈するものがある。短い口縁帶に端部押さえ気味の口縁で、胸部最大径が中位にあり、上げ底状の小さな平底をもつもの(37)は近江系の受口状口縁壺の影響を受けていると思われる。壺B 1はいわゆる「能登形壺⁵⁷」といわれる「くの字（面取り主体）、内外ハケ（ハケ的ケズリ）、厚手、接合痕、分割成形痕、平底・尖底」の壺、及びその影響を受けていると思われるもので、22%みられる。倒卵形の胸部に小さな平底を持つものが主体だが、丸底を持つもの(33)もみられる。壺B 2(46%)はくの字口縁壺で端部を丸く収めるものを主体とするが、つまり上げるもの、直立気味のもの、やや中膨らみするもの等、バラエティがあり、さらに細分可能と思われるが、ここではB 2類として括して扱う。胸部は長胴・平底が主体であるが、球胴・丸底をもつもの(103)もあり、肩部が張り出して球形気味になるもの(26・63)が若干みられる。

壺C～Eは畿内・山陰の外來の影響が窺えるものである。壺Cは布留系の壺で、13個体(12%)ある。口縁端部が内面または上方に肥厚し、器壁はうすい、球形胴部・丸底で、調整外面は継ハケの後、肩部に横ハケを施し、内面はケズリで、胴下半から底部にかけて指頭圧痕を残す典型的な布留壺



第137図 古墳時代土器器種分類図 (1/6)

分類	割合(%)	調整a 外ハケ内ハケ	調整b 外ハケ内ハケ	調整c 外ケズ内ハケ	調整d 外ケズ内ハケ 不明 その他	調整e 不明	底部1 平底	底部2 丸底	鉢回No
甕A	有段口縁	12(12%)	5	6		1	3	3	12, 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 81, 84
甕B1	くの字口縁 (口縁丸縁)	22(22%)	10	9	2		1	4	1, 9, 25, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 49, 50, 51, 65, 78, 80, 90, 102, 103, 109, 112, 113, 114
甕B2	くの字口縁 (口縁丸縁)	46(46%)	6	20	15	3	2	9	6, 1, 4, 11, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 36, 61, 62, 63, 64, 66, 68, 69, 72, 74, 77, 79, 83, 85, 86, 87, 88, 89, 93, 94, 96, 97, 98, 99, 100, 101, 103, 104, 106, 107, 108, 111, 115
甕C	布質系	13(12%)		13					7, 8, 33, 54, 55, 56, 57, 58, 60, 70, 71, 91, 92
甕D	タタキ型	3(3%)					3		5, 6, 82
甕E	山腹系	3(3%)		3					52, 73, 110
甕F	小型	2	1		1		1	1	46, 47
不明(底のみ)		11	5	2	4		7	2	3, 13, 14, 15, 16, 17, 67, 75, 76, 95, 116
甕A	広口	2							2, 39
甕B	複合口縁	2							10, 48

※相数の%は、口縁形態がわからぬもの100個体を対象とした時の%である。

第13表 土器分類一覧

(7・8・54) が比較的まとまってみられる。器壁がやや厚く、長胴化した胴部を有するもの (55) はやや新しい様相を呈する。壺Dはタタキ窓で、3個体 (3%) あり、肩部のみにタタキが施されるもの (5・6) と、口縁から肩部にかけてタタキが施されるもの (82) があり、いずれもタタキの後にケズリを行っている。壺Eは山陰の影響が窺えるもので、有段口縁を持ち、口縁形態から2類に大別できる。1類は内傾する短い口縁帶で、胴部外面は継または斜めのハケで、肩部に横ハケを施す (52・73)。肩部にヘラ状工具による線状の刺突を施すもの (52) がある。2類は口縁帯下端がやや突出し、端部は押さえ気味で、口縁帯内面に二段ナデを施す (110)。壺Eは福井・石川の北陸南西部では、布留式並行の時期には組成に取り入れられているのが確認されている⁶⁸。

壺Aは広口壺で、2個体ある。胴部最大径がやや下位にあり下彫れ気味の球形の胴部を持ち、口縁部は面取りされて、端部は上方につまみ上げられているもの (2) と、胴部最大径が中位にあり、口縁部は外反して延び、端部は丸く收めるもの (59) がある。壺Bは複合口縁壺で、短く直立する頸部に大きく外反して開く口縁部がつく。2個体あり、倒卵形の胴部に丸底のもの (10) と、平底のもの (48) がある。調整は外面ミガキに、内面ヘラ状工具によるナデで、10は外面と口縁部内面に赤彩が施される。壺は4個体のみで、壺に比べていずれも丁寧な調整が行われている。

器種が壺・壺に限られ、土器組成を把握するに至っていないが、①くの字口縁壺B 2が46%と高率で、壺全体に占める割合が高い。②有段口縁壺 (13%) が残る。③布留系壺 (12%) が一定量みられる。④胴部は倒卵形で小さな平底のものが主体となり、球形胴部、丸底はみられるが出土量は少ない、という様相を呈する。布留系壺については県内では受容する遺跡としない遺跡があり、地域差または遺跡の格の違いによる可能性が指摘されている⁶⁹。前者には大門町二口油免遺跡⁷⁰、立山町利木横枕遺跡⁷¹、後者には婦中町南部I遺跡⁷²、鍛治町遺跡⁷³があり、黒河中老田遺跡はこれらの中とほぼ同時期と考える。県内の弥生時代終末期から古墳時代前期前半を対象とする編年⁷⁴は第14表のように様々な研究成果が提示されている。黒河中老田遺跡は土器組成的には不十分ではあるが、県西部(奥西地域)の編年を提示された岡本氏の案⁷⁵によれば、4期・5期に位置付けられると考える。くの字口縁壺を主体とするが、有段口縁壺が残ることや、くの字口縁の端部を丸く收めるものが多いこと、布留系壺がみられること等から、主体となるのは4期・5期を包括したものと考える。しかしながら、有段口縁壺には撫凹線文を施すものや、口縁帯が直立気味に立ち上がるるもの等に古い様相がみられる。また、布留系壺の中に口縁がやや直立気味で長く延び、端部上方に面を持つ肥厚の甘いもので、長胴化した胴部を持つものがあり、布留式ににくだると思われる新しい様相を呈するものもある。若干の時期幅を有すると思われるが、造構の状態からは比較的短期間の間に営まれたと考えられ、大きな差にはならない範疇のものと考える。

(金三津道子)

時期区分	谷内尾 (1983)	田嶋 (1986)	楠 (1996)	上野 (1972)	久々 (1999)	高橋 (2000)	田中・中谷 (2003)	人野 (2003)	岡本 (2003)	黒河中老田 遺跡
法仏II						後期 IV 古 後期 IV 新		3		
月影I	3群	4	1		1	庄内並行I古 2 庄内並行I新	II	I		1
月影II	4群	4	2		3	庄内並行II古 4 庄内並行II新	4	II-1 II-2 II-3 II-4	2	
5群	5	1	3		5	庄内並行III古 6 庄内並行III新	III	5	III	3
6群	6	2	4		7	布留並行I古	IV	6	IV	4
7群	7	3	5		8	布留並行I新		7	V	5
8群	8	4	6			布留並行II		8		6
9群										

第14表 県内土器編年の並行関係

- 注1 岩 真信他 1983 「戸田東遺跡」群馬県考古資料者会
- 注2 齊藤 降也 1985 「小杉流通業務団地内遺跡群 第7次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
齊藤 降也 1986 「小杉流通業務団地内遺跡群 第8次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- 注3 越前慶祐他 1992 「古沢バイパス関連遺跡発掘調査報告 中老田C遺跡・堺越A遺跡」富山県埋蔵文化財センター
- 注4 荒木幸治 2001 「古墳時代初期における軒下採掘坑とそれに伴う具体的活動」兵庫県朝来郡和山町熊江前石遺跡の調査-」
「兵庫県埋蔵文化財調査紀要 第刊号」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 注5 注4に同じ。
京都府上中遺跡、鳥取県福岡遺跡などで粘土採掘坑の類例がみられる。
- 増田孝彦 1986 「『上中遺跡第3次発掘調査概要』京都府遺跡調査概要第20期 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 西川 慶也 1992 「推定遺跡」鳥取県教育文化財団調査報告書27 (財)鳥取県教育文化財団
- 注6 布留堂・布留櫛向甕と、それらの影響を受けていると思われるものを一括した。ここでは布留系甕としておく。
- 注7 安 英樹 2003 「能登甕と千種甕」『庄内式土器研究』27 庄内式土器研究会
- 注8 山崎明人 1986 「N考察 湧町遺跡出土土器の編年考察」「湧町遺跡I」石川県立埋蔵文化財調査センター
吉本元邦・赤澤信明 1995 「第5章 調査の成果」「長良寺遺跡」福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 注9 注14の田中・中谷論文において、布留系甕の内と遺跡の格とが結びつく可能性が指摘されている。
- 注10 尾野寺克実・中井英策 1998 「二口油免遺跡発掘調査概報-庄川右岸改修開道住宅団地事業に係る調査-」
大門町埋蔵文化財調査報告13 大門町教育委員会
- 注11 三浦秀典・川中先生 2001 「利川横枕遺跡-主要地方差富山立山魚津線地方特定道路事業に伴う調査報告書-」
立山町文化財調査報告書第31号 立山町教育委員会
- 注12 堀内大介 1998 「富山照母中町 南部I道路発掘調査報告」婦中町教育委員会
- 注13 大野英子他 2003 「富山市婦中町 武治町遺跡発掘調査報告」婦中町教育委員会
- 注14 多数の編年研究がある。近年の研究は以下のようなものがある。
上野 章 1973 「弥生時代 貰、古式土器」『富山県史』考古編 富山県教育委員会
久々忠義 1999 「古墳出現期の土器について」「富山平野の出現期古墳」富山考古学会
高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相-弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付け-」
『庄内式土器研究』22 庄内式土器研究会
- 田中幸生・中谷正和 2003 「越中に於ける古墳出現前後の地域別編年-彫形土器を中心として-」
「富山大学考古学研究室論集 桶次樓一・秋山達午先生古稀記念」六一書房
- 大野英子 2003 「越中中央部における古墳出現期の土器様相-千坊山遺跡群を中心として-」「庄内式土器研究」26
庄内式土器研究会
- 注15 囲本淳一郎 2003 「越中西部地域における古墳出現期の土器様相」「庄内式土器研究」26 庄内式土器研究会

第15表 黑河中老田遺跡溝一覧

遺跡番号	重 量 (m)	出 土 遺 物	時 期	備 考	辨 別 番 号	同 版 番 号
	幅 深 さ 深さ					
SD65	7.70	0.66	陶文土器、土師器、板村	古墳	SD103に繋ぐ SD103に合流	90 91
SD102	2.62	0.30	土師器	古墳	SD65に繋ぐ	91
SD103	4.60	0.54	土師器、板村	古代灰燼	SD131>SK104・137	70
SD131	1.60	0.39	編文土器、土師器、須恵器、伊瓦皿、帝高、不明陶器、青 板石器、剝片、珪端、施中板瓦	古墳	193・223	119
SX160	10.40	0.66	陶文土器、土師器、須恵器、板村	古墳	旧河道、複数の土坑が重複したものの跡跡	91 71, 72

第16表 黒河中老田遺跡井戸一覧

遺跡番号	平面形	規 格 (m)	出 土 遺 物	備 考	辨 別 番 号	同 版 番 号
		長 さ 幅 深 さ 深 さ				
SE304	円	1.30	1.30	須恵器、土師器	SE304>SX168	121 72

第17表 黒河中老田遺跡古墳時代土坑一覧 (1)

遺跡番号	平面形	規 格 (m)	出 土 遺 物	備 考	辨 別 番 号	同 版 番 号
		長 さ 幅 深 さ 深 さ				
SK1	不整	2.48	土師器、縄文土器	101		
SK2	円	2.10	1.18	土師器、縄文土器	101	
SK3	不整	1.96	1.66	土師器、縄文土器	SK3>SK4	101
SK4	不整	2.04	0.57	土師器、縄文土器	SK4<SK3	101
SK5	椭丸	2.15	1.68	土師器、縄文土器		
SK6	椭円	1.60	1.38	0.49	土師器、縄文土器	101
SK7	円	2.53	2.30	0.59	土師器、縄文土器	
SK8	円	1.31	1.05	0.47	土師器、縄文土器	
SK9	不整	1.74	1.60	0.36	縄文土器	101
SK10	椭円	1.96	1.40	0.46	土師器、縄文土器	102
SK11	長方	3.48	1.68	0.45	土師器、須恵器、縄文土器、施錫石斧、台石	
SK12	不整	1.90	1.42	0.47	土師器、縄文土器	SK12<SK14
SK13	椭円	1.06	0.70	0.29		SK13>SK14
SK14	椭円	1.70	1.08	0.34	土師器、縄文土器	SK14>SK12・13
SK15	円	1.26	1.24	0.33	土師器、縄文土器	
SK16	椭丸	2.07	1.56	0.33	板村、土師器、縄文土器	102 69
SK17	椭円	1.22	0.94	0.43		67
SK18	円	0.58	0.52	0.11		
SK19	不整	2.42		0.55	土師器、縄文土器	
SK21	不整	2.30	1.64	0.55	土師器	102 69
SK22	椭円	1.62	1.05	0.35		SK22<SK23 SK22>SK24
SK23	長方	2.60	1.38	0.54	土師器、縄文土器	SK23>SK22
SK24	不整	2.04	0.68	0.38	土師器、縄文土器	SK24>SK22・28・30
SK26	円	1.70	1.44	0.43	土師器、縄文土器	SK26>SK27
SK27	小壺	1.66		0.49		SK27>SK26・28・30
SK28	不整	2.06	1.32	0.60	土師器	SK28>SK24・27・30
SK30	不整	1.72	1.25	0.58		SK30>SK24・27 SK30>SK28
SK32	椭円	1.67	0.56	0.37	土師器、縄文土器	
SK33	不整	2.60	2.40	0.67	土師器、板村、縄文土器、施錫石斧	103
SK34	不整	3.68	3.32	0.59	土師器、須恵器、板村	104 69
SK35	円	1.88	1.78	0.37	土師器、縄文土器	
SK36	椭円	1.64	1.06	0.66	土師器、縄文土器	SK36>SK37
SK37	椭円	1.13		0.42	土師器	SK37>SK36
SK38	椭円	2.46	1.93	0.58	土師器、板村、縄文土器	SK38>SK40・42
SK39	不整	1.57	1.30	0.42		SK39>SK40
SK40	不整	3.88	1.62	0.30	土師器、縄文土器	SK40>SK48・39 SK40>SK41
SK41	不整	2.07		0.23	土師器	SK41<SK40
SK42	不整	2.24	1.83	0.50	土師器、縄文土器	SK42<SK43 SK42>SK50
SK43	不整	1.56		0.33		105,106
SK44	不整	4.30		0.47	土師器、須恵器、縄文土器	SK44<SK45・50
SK45	不整	1.80		0.46	土師器	SK45>SK44 SK45<SK50
SK46	椭丸	1.88	1.78	0.14	縄文土器	
SK47	椭円	1.20	0.89	0.35		
SK48	円	1.30	1.02	0.17		
SK49	不整	3.64	2.00	0.49	土師器、縄文土器	SK49>SK32
SK50	円	2.24	2.94	0.62	土師器、縄文土器	SK50>SK42 SK50>SK44・45
SK51	不整	1.74		0.24	土師器、縄文土器	
SK52	不整	2.40	2.24	0.47	土師器、板村、縄文土器、剝片	SK52>SK49
SK53	円	1.56	1.35	0.56	縄文土器	
SK54	小壺	1.52		0.58	土師器	SK54<SK55 SK54>SD65
SK55	不整	2.28	1.90	0.61	土師器、縄文土器、剝片	SK53>SK54・SD65
SK56	円	1.03	1.03	0.59		104
SK57	椭丸	1.67	1.41	0.35	土師器	
SK58	円	1.97	1.69	0.18	土師器	105
SK59	円	1.83	1.40	0.16	土師器、縄文土器	105
SK60	円	1.69	1.40	0.20	土師器、縄文土器	106 67
SK61	不整	1.95	1.64	0.31		107
SK62	椭円	1.14	0.69	0.23	土師器	

第17表 黑河中老田遺跡古墳時代土坑一覽（2）

遺構番号	平面形	度・幅(m)			出土遺物	備考	攝同番号	圖版番号
		長さ	幅	深さ				
SK63	横円	2.16	1.22	0.16	上鈴器	SK63>SD66	107	
SK64	不整	1.98		0.37				
SK101	円	3.36	3.30	0.43				
SK105	円	2.68	2.28	0.53	上鈴器		108	68
SK106	隅丸	1.68	1.44	0.42				
SK107	方	2.13	1.60	0.47				
SK108	不整	2.74	1.68	0.47				
SK109	隅丸	1.49	1.30	0.37	埴文土器		108	
SK111	長方	3.18	1.74	0.40			108	
SK112	楕円	1.40	0.90	0.43	上鈴器		108	
SK113	扇形	2.60	1.54	0.35	土鈴器	SK113<SK121	70	
SK115	小型	1.58	1.36	0.27				
SK118	不整	1.60	1.00	0.28	埴文土器	SK118<SK119		
SK119	不整	1.24	1.14	0.21		SK119<SK118		
SK120	不整	2.26	1.40	0.32	十鈴器, 嵌文土器		108	
SK122	不整	1.54	1.10	0.28				
SK123	円	1.00	0.90	0.46			67	
SK124	不整	1.16	0.98	0.45	十鈴器		108	67
SK125	不整	1.85	0.76	0.39	上鈴器		108	
SK126	不整	2.00	1.30	0.17				
SK127	不整	1.46	0.98	0.19				
SK129	不整	2.30	1.32	0.53				67
SK130	不整	2.10	1.74	0.30			109	
SK132	不整	1.68	0.90	0.15				
SK134	不整	1.44	0.67	0.23				
SK136	不整	3.04	1.56	0.20				
SK137	長方	3.10		0.22		SK136>SK137		
SK138	円	1.38	1.28	0.23		SK137>SK136・SD131		
SK140	小型	4.60	3.60	0.48	十鈴器	SK138<SK104		
SK142	不整	3.88	1.52	0.57	上鈴器		110	
SK143	不整	3.96	3.21	0.44	埴文十鈴, 土鈴器			
SK144	不整	3.76	1.14	0.47	十鈴器		110	
SK145	不整	1.72	1.50	0.56				
SK146	円	3.26	1.80	0.45				
SK147	小型	1.67	1.36	0.47				
SK148	不整	1.44	1.42	0.49	上鈴器		109	67
SK152	円	1.66	1.84	0.61	土鈴器		110	67,69
SK153	不整	1.70	1.60	0.39				
SK156	楕円	1.87	1.80	0.35				
SK161	不整	2.89	2.44	0.48	十鈴器		94	68
SK162	不整	1.66	1.40	0.54	打鍊石等	SK162>SK163		
SK163	不整	2.29	1.12	0.62	不明土器	SK163<SK162		
SK164	小型	1.58	1.04	0.53				
SK165	不整	1.54	1.00	0.64	上鈴器		110	68,70
SK166	不整	2.06	1.07	0.31				
SK167	小型	3.72	2.48	0.67	埴文土器, 上鈴器		111	
SK169	不整	2.18	0.80	0.34				
SK170	不整	1.92	0.88	0.56	土鈴器		110	68
SK181	小型	0.90	0.46	0.34				
SK182	円	1.00	0.96	0.51	上鈴器		111	
SK183	不整	1.32	0.98	0.32				
SK185	円	1.92	1.92	0.68	土鈴器		111	
SK186	不整	2.04	1.36	0.59	上鈴器, 鋼?		111	
SK187	小型	4.10		0.33				
SK189	不整	3.28	2.54	0.48	上鈴器		111	
SK190	円	1.64	1.26	0.31				
SK191	不整	1.90	0.80	0.60	土鈴器			
SK202	円	2.54	1.90	0.33				
SK203	円	1.60	1.42	0.11	土鈴器			
SK204	楕円	1.66	1.60	0.26	土鈴器			
SK206	不整	3.00		0.34				
SK293	小型	2.20	0.70	0.33				

第18表 黑河中老田遺跡古代土坑一覽

遺構番号	平面形	規 條(m)			出土遺物	備 考	絵図番号	圖版番号
		長さ	幅	深さ				
SK104	椭円	0.58		0.16		SK104<SD131	119	
SK110	円	0.26	0.24	0.10				
SK114	円	0.50	0.50	0.24				
SK116	椭円	0.60	0.30	0.21				
SK117	椭円	0.30	0.26	0.21		SK116<SK117, SK116>SK160		
SK121	椭円	0.69	0.40	0.15		SK117>SK116		
SK133	椭円	0.34	0.20	0.09		SK121>SK113		
SK135	円	0.60	0.36	0.14				
SK168	不整	3.04	2.64	0.39	土師器	SK168<SE304	121	
SK180	不整	3.36	1.88	0.69	縞文土器、塗無器、土師器、叩き板、繩引繩		121	6872
SK193	不整	3.50		0.23	土師器、須恵器、円筒鏡、蓋石、鉄漆	SK193<SD131	119	
SK212	円	0.38	0.28	0.14				
SK215	不整	4.04	1.58	0.71				
SK216	椭円	0.44	0.36	0.14				
SK220	円	0.56		0.23	柱柾	SK220<SK309	124	
SK224	椭円	0.69	0.34	0.32				
SK225	円	0.42	0.42	0.12	土師器			
SK227	椭円	0.80	0.42	0.23	土師器			
SK234	円	0.48	0.33	0.36				
SK235	不整	0.37	0.20	0.17	土師器			
SK236	不整	3.78	1.00	0.26				
SK237	円	0.36	0.36	0.42				
SK239	円	0.50	0.50	0.24	縞文土器、土師器			
SK240	不整	1.06	0.60	0.07	土師器、須恵器			
SK241	不整	2.96		0.40	土師器、須恵器、珠渦			
SK242	不整	0.86	0.43	0.24	土師器			
SK245	不整	0.56	0.26	0.38				
SK247	椭円	0.46	0.23	0.15				
SK249	円	0.48	0.48	0.30				
SK254	小甕	1.94	1.54	0.28	縞文土器、土師器、須恵器	SK254<SK308-288, SK254>SK289		
SK260	円	0.18	0.18	0.07	砾石		126	
SK261	椭円	0.55	0.35	0.27				
SK262	円	0.30	0.30	0.32				
SK263	椭円	0.62	0.49	0.19				
SK264	不整	0.88	0.82	0.79	土師器、須恵器、板材	升戸か?	125	72
SK268	椭円	0.30	0.24	0.15				
SK270	椭円	0.91	0.48	0.20	土師器			
SK271	円	0.40	0.35	0.36				
SK275	不整	0.62	0.44	0.36				
SK276	椭円	0.64	0.47	0.17				
SK280	椭円	0.50	0.25	0.13				
SK282	不整	2.72	1.28	0.57	土師器			
SK284	不整	0.38	0.28	0.11				
SK285	不整	0.38	0.23	0.09				
SK287	椭円	1.40	0.46	0.33				
SK289	不整	2.74	1.00	0.23		SK289>SK254		
SK292	円	0.36	0.25	0.24				
SK294	不整	2.82		0.17				
SK295	不整	0.70	0.42	0.25				
SK296	小甕	2.16	1.60	0.69	土師器、須恵器			68
SK296	円	0.44	0.36	0.30	柱柾	SK298>SK299	126	68
SK299	不整	1.96	1.00	0.26		SK290>SP298		29
SK300	円	0.30	0.26	0.15				
SK301	椭円	0.50	0.35	0.36				
SK302	椭円	0.50	0.31	0.12				
SK303	円	0.28	0.28	0.12				
SK306	不整	1.62	0.82	0.58	須恵器			
SK309	不整	2.42	0.96	0.45		SK309>SK220	124	

第19表 黒河中老田遺跡古墳時代土器一覧（1）

所蔵機関	分類	名	形態	特徴	基盤	口縁	縁部	内口縁	底面	質	参考
奈良市立考古博物館	高標巣	92 J SD06	土瓶	丁字縁・直唇	直唇	内口縁	外口縁	内口縁	直唇	手彫	古墳前
		70 SD06		上縁	26.5	34.0	28.3	4.9	内口縁	手彫	○ ○
		2 SD06	土瓶	尖端	12.9	23.9	21.0	5.7	内口縁	手彫	古墳前
		3 SD06		土瓶	素	12.9	24.0	21.0	5.7	内口縁	試掘出土と複合
		4 SD06	X229Y196	土瓶	2	(59.4)	331	58	内口縁	手彫	古墳前
		5 SD06	X265Y97	土瓶	英	172	(92)	241	直	手彫	古墳前
		6 SD06	X265Y98	土瓶	丸	22.1	(18.4)	29.5	内口縁	手彫	古墳前
		7 SD06	KUH31ST	土瓶	丸	17.4	26.5	20.1	内口縁	手彫	古墳前
		8 SD06	X265Y187	土瓶	素	15.8	21.6	19.7	内口縁	手彫	古墳前
		9 SD06	X265Y192	土瓶	英	18.0	(9.1)	直	内口縁	手彫	古墳前
		10 SD06	X265Y193	土瓶	直	13.7	26.0	22.9	直	手彫	古墳前
		11 SD06	X265Y99	土瓶	丸	15.6	(14.8)	19.8	内口縁	手彫	古墳前
		12 SD06		土瓶	素	16.2	(7.5)	21.4	直	手彫	古墳前
		13 SD06	X265Y105	土瓶	英	12.9	(26.5)	23.1	内口縁	手彫	古墳前
		14 SD06	X265Y102	土瓶	英	12.5	5.0	直	内口縁	手彫	古墳前
		15 SD06	XNO26541T	土瓶	英	22.6	22.2	24	直	手彫	古墳前
		16 SD06	XNO26541T	土瓶	英	(33.1)	24.3	内口縁	手彫	古墳前	
		17 SD06	X265Y103	土瓶	英	(32.4)	24.1	3.4	直	手彫	古墳前
		18 SD06	X265Y104~105	土瓶	英	20.1	27.4	22.1	2.7	内口縁	手彫
		19 SD06	XNO26541T	土瓶	英	18.1	4.8	4.9	内口縁	手彫	古墳前
		20 SD06	XNO26541T	土瓶	英	22.6	15.4	18.6	内口縁	手彫	古墳前
		21 SD06	X265Y101	土瓶	英	21.3	21.4	26.7	内口縁	手彫	古墳前
		22 SD06	X265Y102	土瓶	英	23.4	(9.1)	24.0	内口縁	手彫	古墳前
		23 SD06	X265Y102	土瓶	英	21.2	(15.4)	24.2	内口縁	手彫	古墳前
		24 SD06	X265Y100	土瓶	英	18.2	(9.8)	20.5	内口縁	手彫	古墳前
		25 SD06	X265Y105	土瓶	英	15.3	25.8	20.2	直	手彫	古墳前
		26 SD06	X265Y102	土瓶	英	16.6	(15.1)	22.7	直	手彫	古墳前
		27 SD06	X265Y106	土瓶	英	16.6	(15.1)	22.7	直	手彫	古墳前
		28 SD06	X265Y107	土瓶	英	16.6	(15.1)	22.7	直	手彫	古墳前
		29 SD06	X265Y108	土瓶	英	21.6	24.2	21.1	直	手彫	古墳前
		30 SD06	X265Y109	土瓶	英	17.5	22.5	20.8	3.3	内口縁	手彫
		31 SD06	X265Y110	土瓶	英	17.6	(23.1)	21.2	内口縁	手彫	古墳前

第19表 黒河中老田遺跡古墳時代土器一覧（2）

番号	地名	遺物	性別	年号	口径	深幅	底面	底径	高さ	外側裏	内側下	出側上	内側下	外側上	内側下	外側上
99	37	SX160	土器	美玉B1b	18.6	(1.8)	入式	圓底	ナメ	ハテ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
32	73	SX160	土器	美玉B1c	16.7	29.2	25.0	2.8	相	ナメ、混合裏	ナメ、ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
33	73	SX160	土器	美玉B1c	17.0	25.2	23.3	3.3	相	ナメ、混合裏	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
34	73	SX160	土器	美玉B1c	16.0	(1.5)	1.6	21.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
35	73	SX160	土器	美玉B1c	15.2	(0.4)	1.6	19.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
36	73	SX160	土器	美玉B1c	17.0	(0.4)	2.8	2.8	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
37	73	SX160	土器	美玉B1c	15.6	25.0	23.3	2.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
38	73	SX160	土器	美玉B1c	17.6	24.5	23.4	2.7	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
39	73	SX160	土器	美玉B1c	17.6	25.1	23.5	3.2	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
40	73	SX160	土器	美玉B1c	15.0	(1.2)	2.0	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
41	73	SX160	土器	美玉B1c	15.3	19.0	17.5	4.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
42	74	SX160	土器	美玉B1c	16.4	(2.0)	20.9	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
43	74	SX160	土器	美玉B1c	13.3	16.3	14.0	3.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
44	74	SX160	土器	美玉B1c	16.6	(0.6)	1.6	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
45	74	SX160	土器	美玉B1c	16.8	(0.1)	1.6	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
46	82	SX160	土器	美玉B1c	12.9	14.1	14.0	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
47	82	SX160	土器	美玉B1c	14.4	12.5	14.4	2.3	相	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
48	82	SX160	土器	美玉B1c	15.4	(0.6)	23.6	6.8	相	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
49	81	SX160	土器	美玉B1c	20.0	(10.4)	1.6	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
50	81	SX160	土器	美玉B1c	17.8	(17.5)	23.4	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
51	81	SX160	土器	美玉B1c	10.6	(0.9)	1.6	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
52	81	SX160	土器	美玉B1c	14.0	(1.1)	22.4	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
53	81	SX160	土器	美玉B1c	18.0	(5.5)	1.6	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
54	81	SX160	土器	美玉B1c	22.7	27.9	2.4	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
55	81	SX160	土器	美玉B1c	17.8	(0.4)	21.8	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
56	78	SX160	土器	美玉B1c	20.9	(5.8)	23.5	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
57	79	SX160	土器	美玉B1c	16.9	(1.0)	22.0	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
58	79	SX160	土器	美玉B1c	13.5	(0.4)	20.4	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
59	59	SX160	土器	美玉B1c	16.8	(0.6)	22.9	6.0	相	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ
60	59	SX160	土器	美玉B1c	17.0	(0.2)	21.6	1.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ

黒河中老田遺跡古墳時代土器一覧（3）

登録番号	地番	地番番号	性別	形態	直徑 (mm)	口径 (mm)	底径 (mm)	厚さ (mm)	色調 (原色)	外觀 (原)	外觀下	内上部	内下部	外 内	肩理	参考
90 64 SK160	X250/Y97	土師 磁	E62	直筒	182 (13.8)	182 (22.9)	182	2.7	朱色、薄黄色	ナゲ、外觀	ナゲ	ナゲ、外觀上、音響、音響	ナゲ	内側下	○	A160
62 SK160	X260/Y105	土師 磁	E62	直筒	190 (16.7)	24.7	24.7	1.9	朱色、薄黄色	ハゲ、ナゲナゲ	ハゲ	ハラチナゲ、輪合板	ハラチナゲ	内側下	○	古須
63 SK160	X257/Y105	土師 磁	E62	直筒	180 (15.4)	21.6	21.6	1.9	朱色、薄黄色	ナゲ、ナゲナゲ	ナゲ	ハラチナゲ	ハラチナゲ	内側下	○	古須
64 SK160	X259/Y97	土師 磁	E62	直筒	154 (15.4)	20.5	21.3	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ、ナゲナゲ	ナゲ	ナゲナゲ、輪合板	ナゲナゲ	内側下	○	古須
65 75 SK160	土師 磁	E62	直筒	178	26.9	23.2	1.6	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須	
66 76 SK160	土師 磁	E62	直筒	160 (16.0)	2.9	2.9	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、音響	ナゲ	内側下	○	A160	
67 SK200	土師 磁	E62	直筒	186	28.2	24.5	3.2	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
100 68 76 SK113	土師 磁	E62	直筒	153	24.6	21.9	1.2	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
68 76 SK113	土師 磁	E62	直筒	108 (7.7)	27.7	25.0	1.2	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
70 79 SK160	X254/Y100	土師 磁	E62	直筒	186 (15.4)	20.8	20.8	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須
71 79 SK160	X259/Y103	土師 磁	E62	直筒	186 (15.4)	20.8	20.8	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須
72 SK125	土師 磁	E62	直筒	185 (13.8)	23.7	23.7	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
73 81 SK161	X269/Y107	土師 磁	E62	直筒	114 (15.6)	20.9	20.9	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須
74 SK161	土師 磁	E62	直筒	158 (13.1)	21.1	21.1	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須	
75 SK161	X269/Y107	土師 磁	E62	直筒	166 (16.6)	3.0	3.0	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須
76 SK161	土師 磁	E62	直筒	120 (21.1)	5.9	5.9	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
77 SK204	X240/Y90	土師 磁	E62	直筒	180 (15.6)	26.2	26.2	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須
112 73 SK1	土師 磁	E62	直筒	150 (15.1)	18.9	18.9	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須	
79 SK4	土師 磁	E62	直筒	190 (15.1)	16.9	16.9	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須	
80 SK4	土師 磁	E62	直筒	175 (17.3)	22.8	22.8	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
81 74 SK4	土師 磁	E62	直筒	150 (15.6)	28.2	28.2	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
82 78 SK6	土師 磁	E62	直筒	165 (15.4)	22.6	22.6	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須	
83 SK160	土師 磁	E62	直筒	230 (16.6)	24.7	24.7	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須	
84 73 SK160	土師 磁	E62	直筒	180	24.3	21.9	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	A160	
85 SK164	土師 磁	E62	直筒	170 (13.0)	22.9	22.9	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
86 76 SK214	土師 磁	E62	直筒	158 (13.8)	24.6	22.2	2.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	
87 SK214	X277/Y92	土師 磁	E62	直筒	150 (13.8)	24.6	24.6	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須
113 88 SK161	土師 磁	E62	直筒	176 (13.1)	24.0	24.0	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須	
89 SK161	土師 磁	E62	直筒	170 (27.5)	24.6	24.6	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ、外觀	ナゲ	内側下	○	古須	
90 SK164	土師 磁	E62	直筒	165 (11.9)	22.2	22.2	1.7	朱色、薄黄色	ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	内側下	○	古須	

第19表 黑河中老田遺跡古墳時代土器一覧（4）

測定箇所	測定部位	測定方法	測定結果																
113	91 SK36	表面	素面	113	91 SK36	表面	素面	113	91 SK36	表面	素面	113	91 SK36	表面	素面	113	91 SK36	表面	素面
92	79 SK36	土胎	褐色	92	79 SK36	土胎	褐色	92	79 SK36	土胎	褐色	92	79 SK36	土胎	褐色	92	79 SK36	土胎	褐色
93	SK36-37	土胎	褐色																
94	77 SK33	土胎	褐色	94	77 SK33	土胎	褐色	94	77 SK33	土胎	褐色	94	77 SK33	土胎	褐色	94	77 SK33	土胎	褐色
95	SK38	土胎	褐色																
96	77 SK31	土胎	褐色	96	77 SK31	土胎	褐色	96	77 SK31	土胎	褐色	96	77 SK31	土胎	褐色	96	77 SK31	土胎	褐色
114	97 SK42	土胎	褐色	114	97 SK42	土胎	褐色	114	97 SK42	土胎	褐色	114	97 SK42	土胎	褐色	114	97 SK42	土胎	褐色
98	SK45	土胎	褐色																
99	80 SK44-45	土胎	褐色	99	80 SK44-45	土胎	褐色	99	80 SK44-45	土胎	褐色	99	80 SK44-45	土胎	褐色	99	80 SK44-45	土胎	褐色
100	SK31	土胎	褐色																
101	SK32	土胎	褐色																
102	SK34	土胎	褐色																
103	SK35	土胎	褐色																
104	SK36	土胎	褐色																
105	SK40	土胎	褐色																
106	SK112	土胎	褐色																
115	107 SK06	土胎	褐色	115	107 SK06	土胎	褐色	115	107 SK06	土胎	褐色	115	107 SK06	土胎	褐色	115	107 SK06	土胎	褐色
108	77 SK42	土胎	褐色	108	77 SK42	土胎	褐色	108	77 SK42	土胎	褐色	108	77 SK42	土胎	褐色	108	77 SK42	土胎	褐色
109	SK44	土胎	褐色																
110	81 SK16	土胎	褐色	110	81 SK16	土胎	褐色	110	81 SK16	土胎	褐色	110	81 SK16	土胎	褐色	110	81 SK16	土胎	褐色
111	SK170	土胎	褐色																
112	SK96	土胎	褐色																
113	SK96	土胎	褐色																
114	XZ46Y74 I	土胎	褐色	114	XZ46Y74 I	土胎	褐色	114	XZ46Y74 I	土胎	褐色	114	XZ46Y74 I	土胎	褐色	114	XZ46Y74 I	土胎	褐色
115	XZ33Y89 I	土胎	褐色	115	XZ33Y89 I	土胎	褐色	115	XZ33Y89 I	土胎	褐色	115	XZ33Y89 I	土胎	褐色	115	XZ33Y89 I	土胎	褐色
116	XZ41Y57 I	土胎	褐色	116	XZ41Y57 I	土胎	褐色	116	XZ41Y57 I	土胎	褐色	116	XZ41Y57 I	土胎	褐色	116	XZ41Y57 I	土胎	褐色

注記：帶番号の（ ）付箇所は測定値を引換したものを示す。
盤は表面及び内面に直交する方向に測定しているものを「○」で示す。

第V章 考察

1 黒河尺目遺跡の掘立柱建物について

A はじめに

黒河尺目遺跡の調査は1987年に始まり、過去6回の発掘調査が行われ、成果が報告されている²¹。今回の調査は、これまでの調査の中でも最も遺構数が多く、新たに縄文時代中期の遺構を確認した。また古代～中世では掘立柱建物44棟を確認し、遺跡の内容が次第に明らかになってきた。確認した44棟の掘立柱建物（以下、建物とする）は調査区全体に広がっているが、数カ所において集中する地点がみられ、集落内での規則性が窺える。本稿ではこれらの建物について、時期的な変遷を検討する。さらに、大規模な柱穴と直列配置などによって、検出以来、際立つ存在であった倉庫群について、若干の考察を試みたい。

B 建物群の変遷

時期の設定

44棟の建物は、包含層のほとんどが削平され、全て同一面で検出したため、層位学的な新旧関係は不明である。また、出土状況の確かな遺物が非常に乏しく、遺物から時期を判断することは困難であった。よって建物の時期は、平面プラン、規模、配置のほか、建物以外の構造との組み合わせや方位などをもとに設定したものである。

その根拠として最も重要視したのは建物の方位である。建物は6割以上が南北棟で、北を意識した配置をとると考えられる。また、年代によって地磁気が変化するという従来の指摘²²によれば、古代から中世にかけては、真北が西から東へ移動する時期に相当する（第24表）。これに併せて建物の軸方向が東傾していくと考え、I～VI期を設定した。ただし同時期内で重複するものもあり、さらに小二期の設定が可能である。以下、時期ごとに記述する。

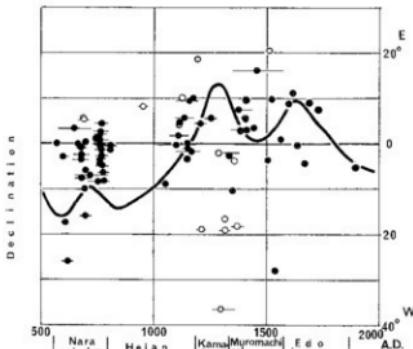
I期（SB 1・2・3・4）

建物の方位が、北から16～21° 東に振る一群で、倉庫と考えられる建物4棟がある。建物は4～5mの間隔で南北にはば直列するが、主軸方向は北を意識していると言え難い。SB 1が2間×3間、それ以外は2間×2間の総柱建物である。

柱穴は一様に規模が大きく、柱根の痕跡を留めるものもある。掘形は最大で径約90cm、最深で約50cmを測る。出土遺物がなく時期判断は難しいが、古代の遺物で主体となる8世紀第3四半期から9世紀第1四半期とみてよいと思われる。

II期（SB 8・10・16・21・29・33・36・38・39・40・42・43）

建物の方位が、北から17～24° 西に振る12棟である。方位、切り合いなどから、さらに細かく3小期に分けることができる。



第24表 古寺伽藍の方位と考古磁気偏角(広岡1976)

1. 黒河尺目遺跡の掘立柱建物について

II - ①期の建物は S B 8・10・16・21・29・33・36・38で、建物の方位が、より西に振る 8 棟である。S B 10・16が側柱建物、その他は総柱建物で、柱穴は径30cm台が中心である。S B 38は調査区外へ続き、3間×2間、面積42m²以上を測る、この小期内では最大とみられる。次に大きいS B 21は3間×2間、31m²で屋内北西には井戸が伴うとみられる。S B 38と比較すると、柱穴は小規模で、全体に貧弱な造りを思わせる。その他の建物は、ほぼ2間×2間、10~20m²程度と小振りである。

II - ②期は S B 40・42で、先行の時期より方位が北に近づく。ともに総柱建物であるが、特にS B 42は4間×4間、84m²を測り、II期では最大である。柱壤形も最大径85cm、最深55cmと比較的規模が大きく、うち7基の柱穴では柱痕跡を確認し、柱根の直径を16~28cmと推定している。S B 40は3間×2間、23m²だが、柱穴の規模はS B 42に引けをとらない規模である。

II - ③期は切り合い等から、S B 39・43の2棟がある。S B 39は丘陵部の際に建てられた3間×1間の側柱建物とみられる。S B 43はS B 42の建て替えと考えられ、規模が縮小している。

II - ①期に属する建物が圧倒的に多いが、3つの小期に大きな時期差はないと考えられ、切り合いのない建物については同時併存していた可能性もある。丘陵端の段に沿って、比較的、大型の建物が並列しており、それらの建物群を中心に、南には小型の建物が間隔を置きながら点在している。建物は丘陵端に集中しているが、これは丘陵段下からの景観を意識した配置と推測する。さらに、これらの段上に並ぶ建物では、頻繁な建て替えがあったとも考えられる。

また、調査区南端のS D 11は丘陵の段に平行し、建物の軸方向とは直交することから、同時期の区画溝と考えられる。これまでの調査において、溝以南では建物の分布が散漫であり¹²⁾、集落を区画するものとみられる。時期は10世紀~11世紀前半を想定しているが、新しい時期が主体とみられる。

III期 (S B 6・7・28・32・37・41)

建物の方位が、北から10~15° 西に振る 6 棟である。分布はII期と重なる部分が多く、前の時期から継続する建物の建て替えとみられるものが多い。この時期にも丘陵端の段上を意識した配置が続き、S B 37・41が並列する。S B 37は総柱建物で3間以上×3間、48m²以上で調査区外へと続く。丘陵部の際に位置するS B 41は3間×1間の側柱建物で、類似するII期のS B 39が建て替えられた可能性がある。屋内北西隅には井戸を伴う。S B 6は6間以上×5間の総柱建物で、全時期を通して最大である。建物内の土坑からは鉄滓や羽口などが多く出土し、鍛冶業との関わりが考えられる。

また、この時期にはS D 330・450が伴う。両溝は繋がらないがほぼ同じ方向で掘られ、区画溝として併存した可能性がある。またS D 11も継続していたとみられる。時期は11世紀末頃から12世紀前半代とみられるが、II期との連続性が強く窺えることから、始まりは若干遅る可能性がある。

IV期 (5・9・11・12・13・17・18・19・20・24・34・44)

建物の方位が、北から2~7° 西に振る一群である。丘陵端への集中がなくなり、丘陵部全体に建物が拡散しているようである。限られた調査区の範囲では集落の全体像まで解らないが、建物の集中箇所がいくつかあり、それぞれが複数棟のセットで存在したと考えると、集落は東西方向にも広がっていると思われる。

S B 17~20の重複から4小期を想定したが、遺構の切り合いがなく、また建物の部分的な確認であるため、新旧関係は明確ではない。また、この時期から建物は立地や方位などによって丘陵端のS B 44・34 (a)、当該期以降、建物が集中する西端のS B 24 (b)、東端に集中するS B 17~20の4棟 (c)、南に広がるS B 5・9・11・12・13 (d) の4群にグループ分けし、それぞれの変遷をみていきたい。

aは先行期に建物が集中していた場所に立地する。調査区東へと続くSB44は4間以上×1間の東西に長い側柱建物である。II期のSB39、III期のSB41と同様の建物とみられる。SB34はII期のSB33と重複するが、棟方向は東西である。ともにIV-①期と考える。

bはこの時期以降、建物が集中し、さらに西に広がると考えられる一群である。SB24は4間×3間、63m²の縦柱建物だが、さらに西に延びる可能性がある。柱穴は規模が大きく、最大径78cm、最深52cmを測り、10基の柱穴で柱痕跡を確認した。柱掘形には円形と楕円形のものが混在しており、建物構造に新しい様相がみられ始める³⁴。IV-①期とみられる。

cはこの時期、建物が集中する。SB17は2間×1間の側柱建物で、柱穴は楕円形である。SB18～20は東に延び、部分的な確認のため不明な点が多い。建物の方位が西から東へと変遷すると考え、SB19、20、18、17にそれぞれIV期-①～④が相当し、順に建て替えられたものと思われる。

dは先行期からのSD450・11に区画された一群である。2小期が考えられ、IV-①期にSB9・11・13、IV-②期にSB5・12を想定した。IV-①期は4間×2間以上のSB11と2間×2間のSB9・13がセットになる。その後、IV-②期ではSB11が3間×2間のSB12に縮小し、SB5を伴うセットへと変遷したと考えられる。

また、これらの建物にはSD669・795が伴うとみられる。SD669は道の側溝、SD795は区画溝と考えられ、丘陵の段に直交した配置が継続する。だが小規模ながらも道を設け、これに則した建物配置が始まって、集落の景観は少しづつ変化したものと思われる。時期は12世紀後半から13世紀前半を想定しており、遺物量から考えて集落の最盛期とみられる。

V期 (SB14・15・35)

建物の方位が真北を向くものである。属する建物は多くないが、前時期との方位差が僅かで、立地が共通することなどから、IV期の延長とみなされる。次第に東西を意識した建物が増え、景観の変化があきらかなものとなる。IV期で分けたグループでは、b、dでの展開になる。

bではSX1344にSB35が付く竪穴状造構があり、倉庫的性格が想定されている³⁵。また、これに切られるSK800は上屋の柱穴が確認できないが、同様の施設であった可能性が高い。両棟とも建物の南東脇に、柱間にして1間分ほどの小さな溝を伴うが、これは出入り口に関する造構の可能性が考えられる。またこの建物の東には、道の側溝を造り替えたとみられるSD751・772があり、この道に面して東西棟が建てられていた状況が想像される。

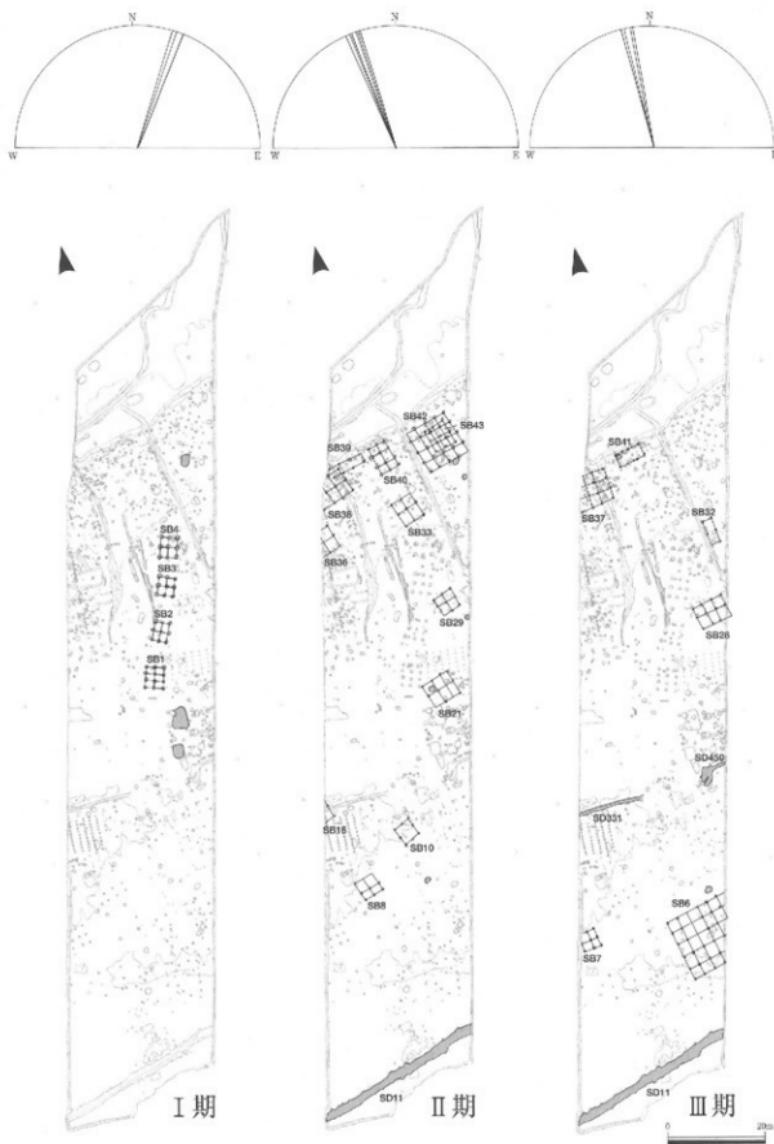
dではSB14・15がある。この2棟は建て替えとみられるが、新旧関係は不明である。これらはSD330を切ると考えられ、従来の区画が崩れたことを現す。また、同方位で建物に切られるSA1がある。これは浅いピットが狭い間隔で直列する造構で、並行する5列を確認したものである。東西の柱筋が揃っていないため建物とは考えにくく、欄列かと考えられるが、類例がなく不明な点が多い。時期はIV期から続くものとみられるが、13世紀中頃を中心とする。

VI期 (SB22・23・25・26・27・30・31)

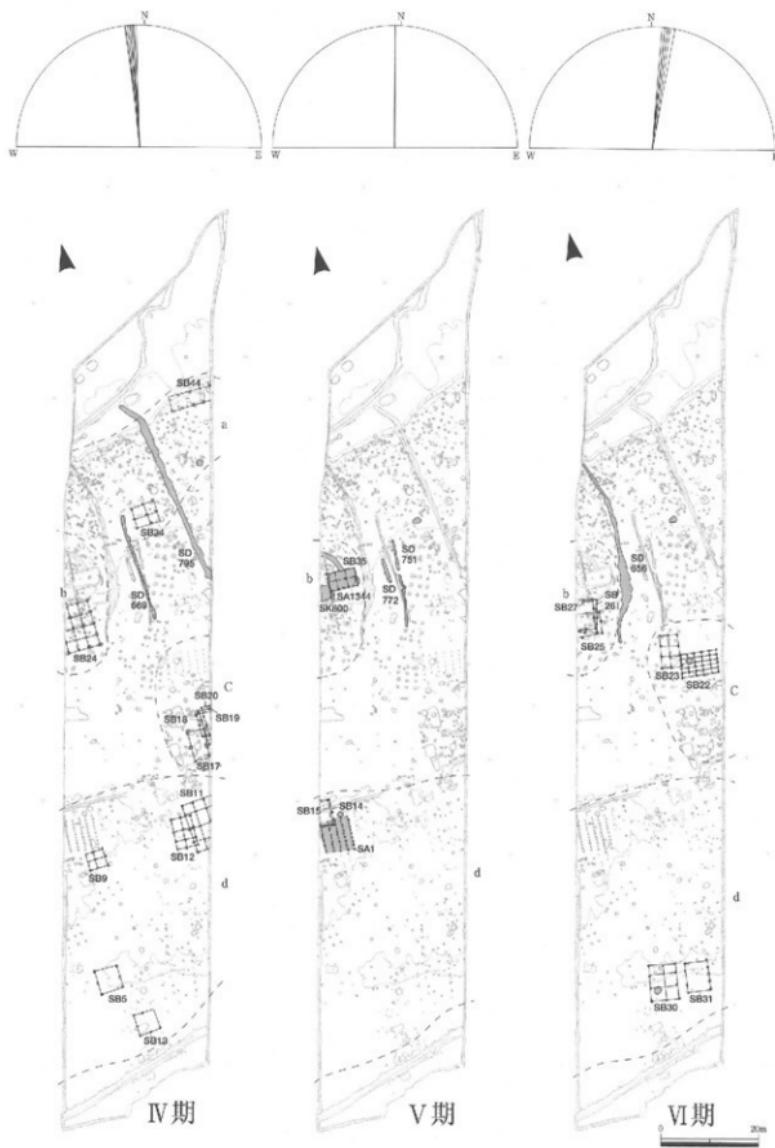
建物の方位が、北から4～10°東に振る一群で、再び南北棟が増えている。重複から3小期が考えられる。以下、b、c、dのグループ別に展開をみていくたい。

bではSB25・26・27が重複している。SB25はV期に倣った東西棟であり、また先行するIV期のSB24とは方位が同じことなどから、VI-①期と考えられる。この建物は2間～×2間の側柱建物であるが、桁方向の柱間は不均等である。続くSB26は4間×2間～の側柱建物で、再び南北棟に戻るが部分確認のため詳細は不明である。VI-②期を充てる。最も新しいSB27は3間×2間～の側柱建

1. 黒河尺目遺跡の掘立柱建物について



第138図 掘立柱建物変遷図 I～III期 (1:1000)



第139図 挖立柱建物変遷図IV～VI期 (1:1000)

1. 黒河尺目遺跡の掘立柱建物について

物で柱穴が精円形であるが、SB26と同様、部分確認に留まる。VI-③期を充てる。

cはIV期に比べ、建物が分散すると考えられ、やや北寄りにSB22・23がある。切り合いからSB23をVI-①期、SB22をVI-②期とする。SB23は3間×2間、24m²の総柱建物で、I期の建物群を切る。SB22は5間×5間、36m²の総柱建物で、桁方向に比べ梁方向で柱間が狭い。

dではSB30・31が並立している。SB30は3間×2間、40m²の総柱建物で、屋内に井戸を伴うとみられる。SB31は4間×1間、28m²の側柱建物だが、桁方向では柱が不揃いで、抜けもある。

この時期にはSD656が区画溝として伴うと考えられる。時期は13世紀後半以降とみられるが、時代が降るに従って遺物が少なくなることから、集落は移動したと推測される。

集落の変遷

各時期ごとに概観したが、ここではまとめとして集落の変遷を考えたい。なお、限られた調査区内からの推論であることを予めお断りしておく。

黒河尺目遺跡で確認されている最も古い遺構は、縄文時代中期の粘土採掘坑とみられるが、以降、古代に至るまでの遺構は確認しておらず、本格的に集落を営み始めたのはI期に前後する時期であろうと思われる。過去の調査でも、8世紀前半代の掘立柱建物や土坑群などが確認されており、共伴する製鉄関連遺物などからは「単なる開墾集落ではなく技術的な要因を兼ね備えた集団の集落」¹²との推測がある。過去の調査区は、今回の調査区から谷を挟んで南に立地しており、時期も若干遡ることから、そのまま同一集落とは考えにくい。しかし、背後の射水丘陵には古代のコンビナートとも称される生産関連遺跡がひしめき、今回の調査でも精錬鍛冶溝などがみつかっていることなどを併せて考えると、生産遺跡と繋がりのある集落が、拡散しながら連続と営まれていた状況が想像される。

その後、集落は途絶え、10~11世紀代に入って再び展開し始める。II~VII期は、ほぼ連続した集落と考えられるが、III~IV期間に画期があるよう見受けられる。建物数はII期とIV期に増加し、出土遺物からはIV~V期が集落のピークかと思われる。

II~III期においては、丘陵段上に並ぶ建物群に力点がおかれていたような印象があり、前述したように、段下からの景観を意識して配置されていたと推測している。

IV期になると、先行期の名残を残しつつも、新たに区画溝や道が設けられ、集落の在り方に少なからず変化が現れているようである。建物は数回の建て替えを行ったものも存在し、立地に規則性が窺える。V期になると東西棟の建物が増え、西側の未調査部分にも広がりが予想される。VII期以降は、大きな変化がなく建物が建て替えられたり、多少の移動がみられる程度であるが、VII期を最後に、この場所での集落展開は終息する。

C 古代倉庫群について

古代の倉庫についての研究は、文献資料をもとに建築構造や規模、収納物および収蔵量、その機能などについて数多くの論考がある。文献にみられる倉庫とは「正倉」であり、いわゆる国家的な支配下にある倉庫を指す。

考古学における実際の倉庫遺構について、官衙と集落との判別を試みた松村恵司氏の論文¹³は、倉の形態が、集落の性格についての判断材料として有効であることを提示したものであり、古代集落の解明に新しい道筋を開いたものである。また山中敏史氏による地方官衙遺跡についての多岐に亘る研究では、官衙遺跡の判定方法や特徴が細かく検討され、その構成要素の一つでもある正倉についても構造や規模のほか、機能について言及している¹⁴。また、古代大型建物に関する研究集会や全国視野での都衙正倉の集成などが進行しており¹⁵、現在は資料の蓄積の一方で、その解明方法が築かれつつ

ある段階と思われる。

また建築学の分野では、富山博氏による正倉建築の研究が詳しく、文献の分析から上部構造の解明などを試みている³¹⁰。

前項でI期としたSB1～4は、4棟がほぼ同時期に存在したと想定している。近年、この倉庫群の規則的な配置や出土遺物などの要因から、当遺跡が官衙的性格をもつとの見解が示されている³¹¹。当地は古来から交通の要衝とされていることもあり、この見解については安易に否定されるものではないと思われる。しかし、地方官衙の認定に至るには、数多くの条件をクリアせねばならず、しかもその条件は地方や時期によって内容が様々であるとも指摘されており³¹²、確定には慎重に論議を重ねる必要があると考える。

今回の調査では、この4棟以外には土坑を数基確認したのみで、集落の主体については未調査と考えられ、不確実な部分が多い。そこで倉庫に目的を絞り、建物構造や集落での在り方など、近隣の遺跡との比較を通して、この倉庫群の意味を考えたい。

県内の遺跡類例（第140・141図、第25表）

古代の倉庫がある遺跡、となると多数の遺跡が存在する。ここでは一部の例外を除き、2間×2間、総柱構造の建物で、一般に高床倉庫と認識される遺構には限定し、県内の類例を掲載した。ただし、柱穴が描かれないものや、小規模なものについては除外している。

当遺跡以外で扱った遺跡は、古代において同じ射水郡内の北高木遺跡、長岡杉林遺跡、婦負郡の任海宮田遺跡、吉倉B遺跡、砺波郡の石名田木舟遺跡、桜町遺跡である。以下、簡単に各遺跡の概要を記述する。

黒河尺目遺跡（第140図）

遺跡は南北に延びており、今回の調査は遺跡の北端にあたる。SB1～4のほか、1987年に調査された³¹³遺跡の南寄りに位置するSB23・24を挙げた。面積はSB23が18m²、SB24はその半分の9m²である。SB24は四隅の柱に限って規模が大きい。

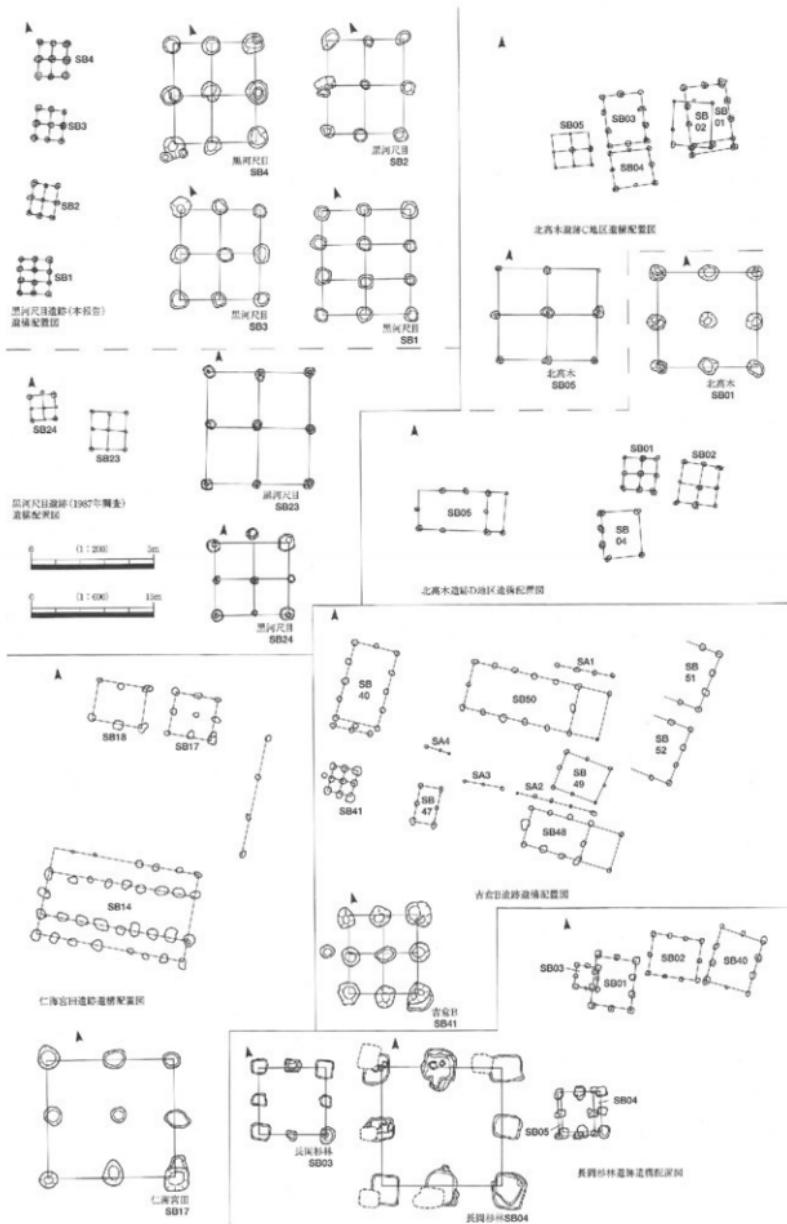
北高木遺跡（第140図）

当遺跡の北西、約6kmに位置する。大島町と新湊市にまたがる縄文～中世の遺跡で、荒畠遺跡が隣接する。沖積地にあり、標高は低く約3mである。古代では建物、土坑、溝が確認され、遺物は10点の木簡、墨書き器、人面墨書き器のほか、多量の木製品が出土した。なかには人形、童巾などの祭祀関連品、また全国的にも出土例の少ない版木状木製品があり、注目を集めた³¹⁴。C地区SB05は隣接する建物群のなかで唯一の総柱建物である。建物群は主軸が似た方位を向くことから、ほぼ同時併存と考えられる。D地区SB01は桁梁の長さが同じ、正方形である。東に隣接するSB02は西に1間分延びるとみられ、除外した。建物配置には特別、規則性のようなものはみられない。

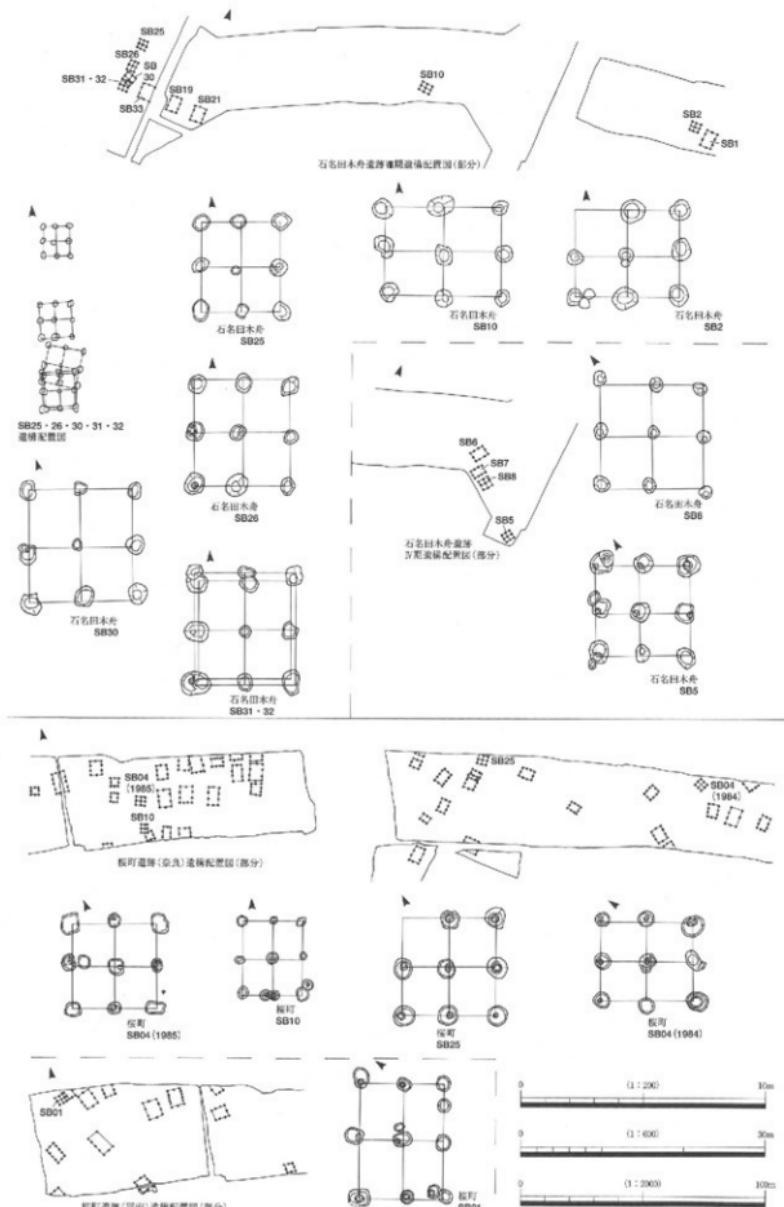
長岡杉林遺跡（第140図）

吳羽山丘陵の北西に位置する。縄文～古代の出土遺物があるが、遺構が伴うのは縄文時代後期、奈良時代（8世紀前葉）、平安時代（9世紀後葉～10世紀中頃）である。この遺跡のSB03・04は側柱建物であるが、ともに正方形のプランをもち柱穴の規模も大きいことから例外的に類例とした。なお図版の遺構配置図は奈良・平安時代を併せたものである。奈良時代に属するSB04の柱穴は、一辺が0.9～1.3mの方形で、最深50cmを測る。SB01・02の他、竪穴住居2棟、鍛冶関連の土坑などが伴う。平安時代に属するSB03は柱穴の規模が大小2種類あり、四隅に大型を用いる。これは黒河尺目遺跡SB24と同様の構造である。SB05・40の他、井戸、溝などを伴う。両時代とも、遺構群のまとまり

1. 黒河尺目遺跡の掘立柱建物について



第140図 県内の遺跡類例(その1) 建物平面図(1:200), 遺構配置図(1:600)



第140図 県内の遺跡類例(その2) 建物平面図(1:200), 遺構配置図(1:600, 1:2000)

1. 黒河尺目遺跡の掘立柱建物について

がそのまま生活単位と考えられている。また、掘立柱建物の分類がなされており、S B 03・04は平面形態から倉庫と考えられている¹⁵⁾。

任海宮田遺跡（第140図）

富山市南部の、神通川と熊野川に挟まれた複合扇状地に位置する南北約1km、東西約900mの広範囲に亘る遺跡である。古代～中世の集落が連続と営まれていたとみられ、これまで膨大な数の堅穴住居や掘立柱建物のほか、土器焼成遺構などが検出されている¹⁶⁾。周辺は古代～中世遺跡の密集地帯で、付近一帯に大規模な開発集落が展開していたと考えられている。遺物では墨書き器が大量に出土しており、なかでも「城長」「平」「式」などの文字が特に多い。本稿では、2001年に調査されたS B 17を類例として挙げた。S B 14は8間×2間の側柱建物の桁側両面に庇が付き、面積188m²を測る大型掘立柱建物で、S B 17・18と構を伴う。S B 17は柱穴の掘形約80cm、深さ約40cmで、底には礫が敷き詰められる。面積は25m²で、今回扱った資料中では最大である。また除外したが、S B 18も同様の構造をもち、類例としてよいものと思われる。

吉倉B遺跡（第140図）

前掲の任海宮田遺跡の南に位置する、同様に古代～中世の集落である。図示した9世紀後葉の集落は規則的な配置で、地方官衙との関連が考えられている。S B 41は柱穴底に砂礫を充填しており、任海宮田遺跡の例と類似する。建物構造からS B 41は高床倉庫とされ、西に隣接するピットを梯子穴と想定している。この建物群はS B 40・48・49・51・52が倉庫、S B 47が納屋のようなもの、S B 50が住居または事務所的な建物であり、農業経営の拠点施設と推測されている¹⁷⁾。

石名田木舟遺跡（第141図）

県西部の小矢部市と福岡町にまたがり、南北約900m、東西約900mに広がると推定される。遺跡は小矢部川と岸渡川に挟まれた河岸段丘上に位置し、古墳時代～近世の遺構がある。遺跡内には木舟城が存在し、過去の調査で城下の町並み遺構や、多様な遺物が調査されている。古代では7世紀後半～9世紀の集落が確認されているが、これら建物群を4集団8ブロックに区分し、その変遷が9期に分類されている¹⁸⁾。本稿では類似遺構が伴うⅣ期とⅧ期を部分的に抽出した。Ⅳ期のS B 5・8はともに桁梁の長さが同じ、正方形である。S B 5の柱穴掘形は一辺約70cmを測り、うち7基の柱穴は段掘されている。Ⅷ期ではS B 25・26・31・32（31と32は同一建物での建て替え）が並び、全体ではL字

遺跡	遺構	柱数(個)	軒高(米)	梁行数(米)	梁行高(米)	面積(m ²)	施方向	方位	柱形式	時代
黒河尺目	S B 4 (本削型)	2×2	4.1	3.4	13.94	南北	N~18°~E	西北	楕柱	1期
	S B 3 (本削型)	2×2	3.8	3.3	12.54	南北	N~21°~E	西北	楕柱	1期
	S B 2 (本削型)	2×2	3.3	3.1	10.23	南北	N~21°~E	西北	楕柱	1期
	S B 1 (本削型)	2×3	4.3	3.8	16.34	南北	N~16°~E	西北	楕柱	1期
	S B 33 (1987年調査)	2×2	4.5	4.2	18.9	南北	N~2.5°~E	西北?	楕柱	8C前
	S B 24 (1987年調査)	2×2	3	3	9	南北?	N~2.5°~W	西北?	楕柱	8C前
北西木	C地区 S B 0.5	2×2	4.39	4.03	17.7	東西	N~2.5°~E	西北	楕柱	8C後～9C前
	D地区 S B 0.1	2×2	4	4	16	南北	N~2°~E	西北	楕柱	8C後～9C前
長瀬杉林	S B 0.3	2×2	2.7	2.7	7.3	東西	N~10°~E	西北	楕柱	8C前
	S B 0.4	2×2	4.8	4.8	23	東西	N~2°~E	西北	楕柱	9C後～10C前
任海宮田	B 1地区 S B 1.7	2×2	5.28	4.8	25.3	東西?	N~7.8°~E	西北	楕柱	9C後～10C前
青森B	S B 4.1	2×2	3.2	2.8	8.98	東西	N~14°~E	西北	楕柱	9C後～10C前
右名木本荘	B 2地区 S B 2.2	2×2	4.2	3.5	14.7	東西	N~3°~E	西北	楕柱	9C後～10C前
	C地区 S B 3	2×2	3.7	3.7	13.69	南北	N~2°~E	西北	楕柱	8C中
	C地区 S B 8	2×2	4.2	4.2	17.64	南北	N~34°~E	西北	楕柱	8C中
	C地区 S B 1.0	2×2	4.7	3.7	17.39	東西	N~7°~E	西北	楕柱	9C中
	D地区 S B 2.5	2×2	3.6	3.4	12.24	南北	N~6°~E	西北	楕柱	9C中
	D地区 S B 2.6	2×2	4.2	3.7	15.34	南北	N~5°~E	西北	楕柱	9C中
	D地区 S B 3.0	2×2	4.2	4	16.8	南北	N~22°~E	西北	楕柱	9C前
	D地区 S B 3.1	2×2	4.4	4.3	18.92	南北	N~6°~E	西北	楕柱	9C中
	D地区 S B 3.2	2×2	4.5	4	18	南北	N~6°~E	西北	楕柱	9C中
東田	東田 S B 4 (1984年調査)	2×2	3.8	3.2	12.1	南北	N~34°~W	西北	楕柱	8C前～後
	東田 S B 2.5 (1984年調査)	2×2	4	3.8	15.2	南北	N~24°~E	西北	楕柱	8C前～後
	東田 S B 4 (1985年調査)	2×2	3.6	3.6	12.9	南北	N~17.5°~E	西北	楕柱	8C中
	東田 S B 1.0 (1985年調査)	2×2	3	2.4	7.2	南北	N~6°~E	西北	楕柱	8C中
	中田 S B 0.1 (1987年調査)	2×2	4.7	3.1	15.9	東西	N~6°~E	西北	楕柱	9C前～中

第25表 県内の純柱建物類例一覧表

状配置をとることから、有力農民層の出現を示唆するものとしている。

桜町遺跡（第141図）

小矢部市の北部に位置し、前掲の石名田木舟遺跡からは約3km西方である。小矢部川と子撫川の合流部西側で、北西丘陵部下の谷から平野へと緩やかに傾斜する。高床建物の建築部材の発見を契機に、縄文遺跡として全国的に著名となったが、縄文時代の遺構・遺物は谷あいに集中し、平野部では古代～中世の集落のほか、古代北陸道、中世条里などがみつかっている。本稿では奈良・平安時代を部分的に抽出した。総柱建物は高床倉庫と考えられており¹⁰⁾、奈良時代で4棟、平安時代で1棟を挙げた。建物配置には特別、規則性はみられない。奈良時代のSB04の柱穴底には礎板が敷かれているものがあり、四隅および中央の柱穴を除く、間の柱穴4基で確認された。

倉庫の在り方

扱ったのは僅か7遺跡26資料であり、倉庫についての一般的傾向を示すには至らないが、幾つかの共通点が存在する。

概観してみると、柱穴規模が全て同じ建物とそうでない建物に大きく分かれるようである。特に、黒河尺目遺跡SB24、長岡林遺跡SB03、桜町遺跡SB04（1985調査）では四隅の柱規模が大きい。さらに桜町遺跡の例では間の柱穴に設けて底に礎板が敷かれており、全ての柱で床を支える構造ではないものと考えられる。こうした柱穴の形態差を上部構造の違いと解釈すれば、長岡林遺跡の例や、任海宮田遺跡SB18といった御柱建物も、ともに高床倉庫構造と考えられる。

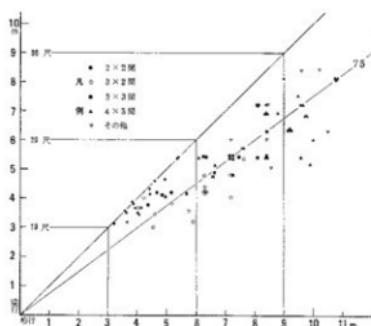
さらに配置については、当遺跡の類例に石名田木舟遺跡がある。Ⅷ期で3棟が直列し、隣接の建物と全体でL字状配置をとる。他のブロックではこうした規則的な配置はみられず、有力農民層の存在が考えられている。また任海宮田遺跡でも、大型掘立柱建物と主軸を揃えた倉庫2棟が並立しているとみられる。吉倉B遺跡の場合は、SB50以外全てが倉庫的な性格と考えられており、多様な倉庫が集中する様相は中核的な施設を彷彿とさせる。このように規則的な配置がとられる集落においては、概ね複数棟の倉庫が存在するようである。

D まとめ

従来の研究からは正倉の平面形式は3間×4間が代表例で、規模についても今回扱った資料より広いことはあきらかである（第26表）。仮に、当遺跡の4棟が正倉だとすれば小型の部類に入るが、こうした小さい正倉が存在する理由には

- ①収納物の形態が蓄積用の穀稻でなく運用目的的確だった、②都衙造成の際、資材・労働力・技術に限界があり一般集落と変わらない倉庫が造られた、③在地富豪層の施設を借りた、などが考えられている¹⁰⁾。確とは總先を束ねた状態の確で、出拳といった運用の際、用いられた形態である。

9世紀初頭になると私出拳が行われ始めることから、農民の格差は広がる一方であったと思われ、なかには相当な権力をもつ富裕層が出現したとみら



第26表 官衙遺跡の倉の平面形態(松村1983)

1. 黒河尺目遺跡の掘立柱建物について

れる。富裕層と官衙とがどのように関係していたかは解らないが、4棟の収納量は一般農民の程度を超えるものとみられ、正倉でないにしても富裕層の集落であったことは確実であろう。

また建物配置の位置関係から、倉庫は主屋の西に配される例が圧倒的に多いというデータ^{注1}があり、集落の主体は東にあることがいっそう強く予想される。以上、消化不良のまま文章を書き進めてきた。多くの遺漏や誤解もあると思うが、今後の研究課題としたい。

(町田尚美)

注1 富山県教育委員会 1987 『七美・太閤山・高岡鏡内遺跡群発掘調査概要（5）黒河尺目遺跡』

富山県教育委員会 1988 『七美・太閤山・高岡鏡内遺跡群発掘調査概要（6）黒河尺目遺跡』

小杉町教育委員会 1992 『小杉町黒河尺目遺跡発掘調査概要』

小杉町教育委員会 2002 『黒河尺目遺跡発掘調査報告』

注2 広岡公夫 1977 『考古地磁気および第四期古地磁気研究の最近の動向』『第四期研究』vol. 15

注3 前掲注1参照

注4 河西龍二 1993 『越中における様相』『中世北陸の家・墨敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究会

注5 三島道子 2001 『黒河尺目遺跡の竖穴状造構について』『富山考古学研究』第4号

注6 富山県教育委員会 1988 『七美・太閤山・高岡鏡内遺跡群発掘調査概要（6）黒河尺目遺跡』

注7 松村忠司 1985 『古代糧倉をめぐる諸問題』『文化財論叢』奈良国立文化財研究所

注8 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』

注9 日本考古学協会次減大会実行委員会 1995 『地方官衙とその周辺』

奈良国立文化財研究所 1998 『古代糧倉と村落・郷里の支配』

（財）かながわ考古学財団 1999 『公開セミナー 古代の大規模建築物群－役所か邸宅か－ 記録集』

奈良国立文化財研究所 2000 『郡衙正倉の成立と変遷』など

注10 富山 拓 2004 『日本古代正倉建築の研究』

注11 富山市教育委員会 2002 『富山市砺谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』ほか

注12 井上尚明 1989 『古代集落遺跡の再検討－郡衙・郷家・一般集落－』『研究紀要』第5号 （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

注13 富山県教育委員会 1987 『七美・太閤山・高岡鏡内遺跡群発掘調査概要（5）黒河尺目遺跡』

注14 大鳥町教育委員会 1995 『北高木遺跡発掘調査報告書』

注15 富山市教育委員会 1987 『長岡杉林遺跡』

注16 (財)富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2001 『埋蔵文化財調査概要』

注17 富山県埋蔵文化財センター 1994 『古倉B遺跡』

注18 (財)富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 2002 『石名山木舟遺跡発掘調査報告』

注19 小矢部市教育委員会 2003 『桜町遺跡発掘調査報告書』弥生・古須・古代・中世編I

注20 前掲注7参照

注21 山中敏史・石毛彩子 1998 『古代糧倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

2 粘土探掘坑について

A はじめに

今回の調査では、黒河尺目遺跡で縄文時代36基、黒河中老田遺跡で古墳時代115基、古代3基の粘土探掘坑を検出した。ことに、黒河中老田遺跡の古墳時代のものは、約90mに渡って土坑が密集するものである。遺跡の位置する射水丘陵周辺では粘土探掘坑の確認された遺跡が19例あり、遺構の形態や埋土等が類似していたことから、調査中より「粘土探掘坑」として扱ってきた。しかしながら、一定地域に密集する土坑群については、「土坑墓群」とする見解もある。そこで、県内外の類例と比較することにより、黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡の粘土探掘坑について検討していきたい。なお、遺構の名称は、各報告書で異なるが、ここでは「粘土探掘坑」を用いる。

B 粘土探掘坑

黒河尺目遺跡 射水丘陵先端の舌状に延びた微高地上に位置する。粘土探掘坑は円形・楕円形の土坑が重複するもので、7群36基が検出されている。埋土は褐色シルト・黄褐色粘質シルトをブロック状に含む黒褐色シルトである。底面は粘土層を掘り抜き、下層の砂質シルト層との境目まで達している。遺物は、埋土中～上位にかけて土器・石器がみられ、大半は破片であるが、SK1530の底部からは、ほぼ完形の鉢が3個体並んで出土しており、「埋設」したものと考えられる。遺物からは縄文中期後葉～後期前葉を主体とする時期のものと考えられる。

黒河中老田遺跡 丘陵裾の低地部、旧扇状地端部に位置する。古墳時代の粘土探掘坑は埋没した旧河道上で、帯状に分布する円形・楕円形・不整形の探掘坑を115基検出している。これらの探掘坑は単独のものと、重複するものがあり、後者は既存の探掘坑が掘り終わると壁を壊しながら横へ掘り広げたと考えられるものである。埋土はブロック土で、灰白色粘土と黒褐色粘土の混合土を主体としている。遺物は埋土下～中位にかけて土器・板材が出土している。土器は甕が9割をしめ、ほぼ完形で据え置かれたような状態のまま出土するものが多々みられた。また、「掘削具」として鍬と考えられる木製品や撥型の打製石斧が出土している。当初打製石斧は縄文の混入品かと思われたが、古墳時代前期頃^(注)まで「石鍬」としての打製石斧がみされることから、粘土探掘に伴うものと判断した。出土土器から粘土探掘坑の時期は古墳時代前期と考えられ、比較的短期間の間に探掘されたと想定される。

古代の粘土探掘坑は旧河道の肩部で3基検出された。古墳時代のものと同様に複数の坑が重複するものと単独のものが



第142図 黒河中老田遺跡埋土別遺構図

ある。埋土はブロック土である。にぶい黄色粘土を採掘しており、古墳時代のように集中的な採掘は行われず、採掘場を移動させたと想定される。遺物は土器・木製品があり、先端を刃状に加工した棒状のものは「掘り棒」と考えられる。また、須恵器制作に使用したと考えられる木製の叩き板が出土しており、須恵器制作に伴うものと推定している。

C 県内例

黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡の所在する射水丘陵周辺において、粘土採掘坑が確認された遺跡は19遺跡あり、時期は弥生～古墳時代3例、古代16例、中世・近世1例、不明2例である。

畠總No.15遺跡³³台地縁辺に位置する。古墳時代～中世の複合遺跡で、炭焼窯に隣接して2基の粘土採掘坑が検出されている。採掘された粘土は窯構築または補修材としての用途が考えられている。

塙越A遺跡³⁴台地縁辺に位置する弥生時代・古代・近世の複合遺跡。弥生時代及び奈良時代の粘土採掘坑が約85基検出されている。弥生時代のものは埋没谷に面した斜面に位置し、白黄色粘土を採掘し、奈良時代のものは炭焼窯に隣接しており、黄褐色砂質粘土質を採掘している。遺物は弥生時代のものは完形に近い状態で散発的に埋土から出土し、器種は甕・壺に限られる。奈良時代のものは、埋土中～上位から須恵器・羽口・鉄滓等が出土している。いずれも短期間に營まれたものと考えられる。採掘された粘土は弥生時代は土器制作用に、奈良時代は製鉄炉炉壁材と想定されている。

石太郎C遺跡³⁵丘陵先端の台地上に位置する古代の生産遺跡で、炭焼窯・製鉄炉が検出されている。炭焼窯からやや離れて粘土採掘坑5基があり、採掘された粘土は炭焼窯の修復や製鉄炉の構築に使用されたと考えられている。

東山1遺跡³⁶丘陵先端の台地上に位置する。奈良時代の製鉄炉に隣接して粘土採掘坑1基がある。採掘された粘土は製鉄炉炉壁材に使用されたと考えられる。

石太郎1遺跡³⁷丘陵先端の台地上に位置する古代の生産遺跡。須恵器窯に隣接して1基、炭焼窯2基の奥壁に接して人型の土坑2基があり、粘土採掘坑と考えられる。

野田A遺跡³⁸丘陵先端の台地上～裾部に位置する古代の生産遺跡。炭焼窯からやや離れて8基の土坑があり、粘土採掘坑と考えられる。

小杉丸山遺跡³⁹丘陵縁辺の樹枝状に入り込んだ谷に面した斜面に位置する弥生～古代の複合遺跡。谷筋及び斜面地に粘土採掘坑群が検出されている。弥生時代中～後期・古墳時代前期・飛鳥時代後期の各時期のものが確認されている。飛鳥時代のものは、粘土採掘坑のある斜面で同時期と思われる瓦陶兼業窯が検出されており、須恵器・瓦制作用の粘土採掘坑と推定されている。また、炭焼窯・製鉄関連遺構の他、豎穴住居跡が確認されており、丘陵上は須恵器・鉄などの生産遺跡とそれに伴う工人集落と考えられる。丘陵裾の谷部は弥生時代以降古代までの断続的な粘土の採掘場となっている。遺物は土器の他に弥生時代後期～古墳時代前期の粘土採掘坑に伴い、鍬・掘り棒などの掘削具、桶などの容器、豎杵などの木製品が出土している。

小杉流通業務団地内（以下流団）No.19遺跡⁴⁰丘陵縁辺の樹枝状に入り込んだ谷に面した斜面に位置する。绳文時代・奈良時代の複合遺跡で、豎穴住居跡・掘立柱建物からなる集落跡のある斜面上で、砂質粘土を採掘したと考えられる粘土採掘坑2基が検出されている。出土遺物はなく、時期不明。

流団No.18 A遺跡⁴¹丘陵縁辺の樹枝状に入り込む谷に面した斜面に位置する古代遺跡。須恵器窯・土器窯・住居・工房と考えられる集落跡が検出されており、須恵器窯に伴い粘土採掘坑3基がある。流団No.16遺跡⁴²丘陵縁辺の斜面～谷頭に位置する。須恵器窯3基と工房と考えられる集落跡を検出している。須恵器窯に隣接して粘土採掘坑6基があり、採掘した粘土は窯の構築材・補修材と考えられ

番号	遺跡名	時代	遺跡	年代	地質		解説	参考文献
					層位	地質		
1	高尾川流域	古墳時代-近世	高尾川流域 7ヶ所	新千葉層群・下部層	不變層	門限狀?	砂質冲积土	1996 高尾川流域、東山の遺跡 の一部
2	佐野中央山遺跡	古墳時代-近世	佐野中央山 遺跡複数箇所	古代	河岸段丘上・礫層・礫層堆积	砂質層・漂砾層	門限状、高砂層 門限状	門限状、高砂層から 佐野川に注ぐ。遺跡は主に 佐野川右岸に分布する。
3	猪俣丸山遺跡	新石器時代-中世後期	猪俣丸山 1ヶ所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 猪俣丸山遺跡、野原山 遺跡、猪俣丸山の北側に位置する 佐野川流域の下流側に位置する 丘陵上の遺跡
4	西原大塚跡	新石器時代-中世後期	西原大塚跡 1ヶ所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 西原大塚跡、佐野川流域 の一部
5	古川山遺跡	新石器時代-中世後期	古川山 遺跡複数箇所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 古川山遺跡、佐野川流域 の一部
6	御井山遺跡	新石器時代-中世後期	御井山 遺跡複数箇所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 御井山遺跡、佐野川流域 の一部
7	御井山遺跡	新石器時代-中世後期	御井山 遺跡複数箇所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 御井山遺跡、佐野川流域 の一部
8	御井山遺跡	新石器時代-中世後期	御井山 遺跡複数箇所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 御井山遺跡、佐野川流域 の一部
9	御井山遺跡	新石器時代-中世後期	御井山 遺跡複数箇所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 御井山遺跡、佐野川流域 の一部
10	御井山遺跡	新石器時代-中世後期	御井山 遺跡複数箇所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 御井山遺跡、佐野川流域 の一部
11	小糸丸山遺跡	新石器時代-中世後期	小糸丸山 遺跡複数箇所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 小糸丸山遺跡、佐野川流域 の一部
12	小糸丸山遺跡	新石器時代-中世後期	小糸丸山 遺跡複数箇所	古代	佐野川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 小糸丸山遺跡、佐野川流域 の一部
13	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部
14	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部
15	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部
16	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部
17	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部
18	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部
19	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部
20	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部
21	高尾川流域	新石器時代-中世後期	高尾川流域 2ヶ所	古代	高尾川流域、下流側に位置する丘陵上・上部	不變層	礫層	1996 高尾川流域、佐野川流域 の一部

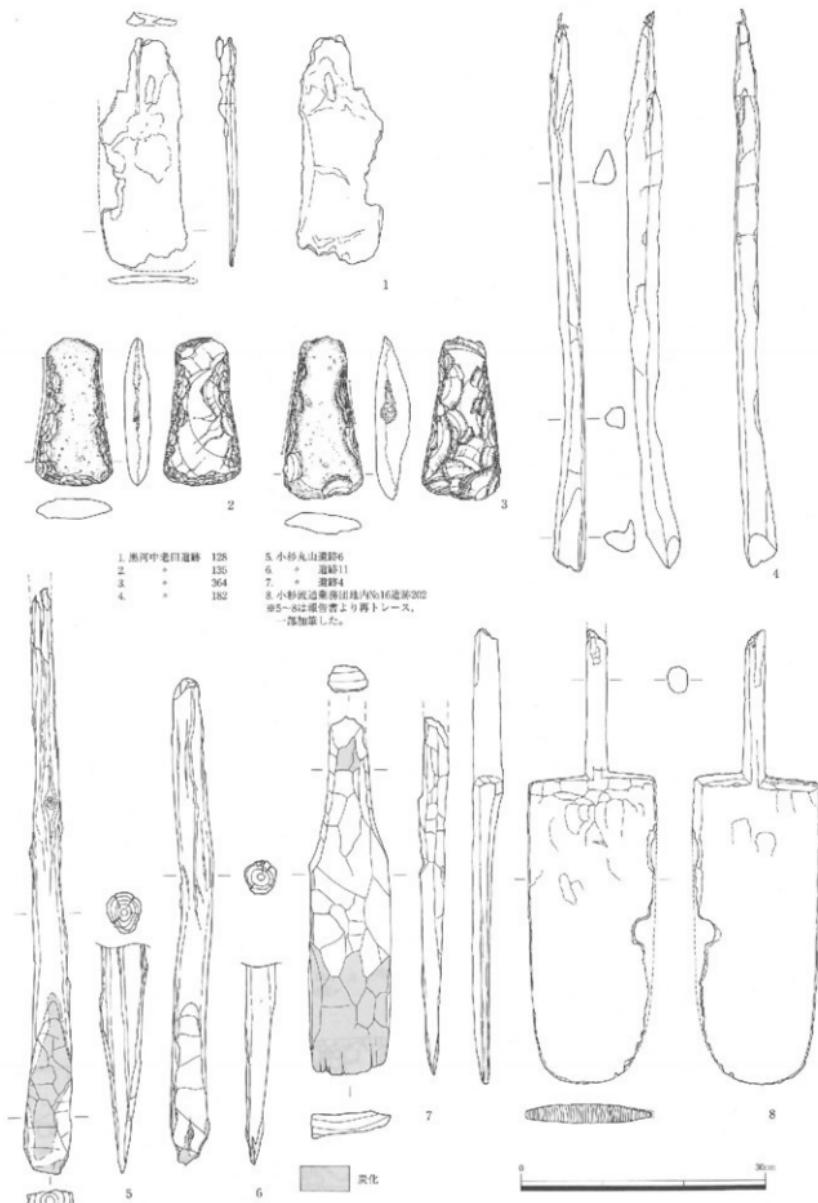
第27表 県内粘土探査坑一覧（射水丘陵周辺）



第143図 遺跡位置図



第144図 主な粘土探査坑



第145図 挖削道具 (1/6)

1. 鋸状 2・3. 石鋸 4～6. 掘り棒 7・8. 鉤

ている。遺跡内では須恵器の原料としての粘土探掘坑や粘土の集積場所と考えられる遺構が確認されておらず、須恵器の成形までは他所で行い、No.16遺跡では焼成を中心とする作業が行われたと想定されている。窯や集落のある斜面下の谷底から鋤が出土しており、周辺斜面の住居等からの廃棄遺物の可能性が高いとされる。

流団Na.7遺跡³²²丘陵先端の台地上に位置する縄文～古代の複合遺跡。尾根を挟んで西斜面に須恵器窯群、東斜面に古墳時代の集落跡が検出され、須恵器窯に隣接して1基、竪穴住居跡に隣接して6基の粘土探掘坑がある。古代のものは灰白色粘質土、古墳時代のものは白色砂質土を探掘している。

石名山窯跡³²³丘陵縁辺に位置する須恵器窯跡。粘土探掘坑3基は並行する2基の窯の間で検出されている。探掘された粘土は窯の補修材として用いられたと推定されている。

布目沢北遺跡³²⁴扇状地端部に位置する弥生～近世の複合遺跡。谷地形に並行する溝の先端にある落ち込み状の遺構1基が「土取り穴」と推定されている。時期は不明である。

北高木遺跡³²⁵扇状地端部に位置する。古代を主体とする縄文～中世の複合遺跡。遺跡東端の川に面した地区で、(粘)土探掘坑と推定される土坑15基が検出されている。

下村加茂遺跡³²⁶沖積平野のほぼ中央、海拔1m以下の低湿地帯に位置する。弥生～近世の複合遺跡である。粘土探掘坑は中世は館跡内で15基、近世は道路跡に沿って約90基が検出されている。近世のものは、川に沿う幅2mの道路の両側に幅約6m、長さ200m以上に渡り整然と並んでいる。特定の土の探掘を目的としたものではなく、集落（宿場）の建設・街道の造成という大規模な土木工事のために大量の土砂を必要としたことから、組織的に行われたと推測されている。

中老田C遺跡³²⁷扇状地端部に位置する古代の生産遺跡である。鑄造遺構・製鉄炉・炭焼窯等からなる製鉄遺跡で、炭焼窯に隣接して25基の粘土探掘坑が検出されている。灰白色粘土を探掘しており、炭焼窯の壁材として用いられたと考えられている。

桟谷南遺跡³²⁸扇状地端部に位置する。谷地形を利用した瓦陶兼業窯・土師器焼成遺構・井戸の他、窯のある斜面から谷底を挟んで、約30基の粘土探掘坑が検出されている。灰白色粘土を探掘しており、胎土分析の結果、瓦の原料としていたことが明らかにされている。焼成不良品が廃棄されている。

御坊山遺跡³²⁹扇状地頂部付近の低丘陵に位置する縄文～古代の複合遺跡。炭焼窯2基・製鉄炉が検出され、炭焼窯の奥壁側に接するように粘土探掘坑2基がある。灰白色粘土・砂質粘土を探掘しており、炭焼窯の煙道・天井等の構築に使用されたと考えられている。窯の奥壁に接して粘土探掘坑を設けるタイプは、初期の炭焼窯構築に伴うものと捉えられている。

開ヶ丘中山I遺跡³³⁰丘陵縁辺に位置する古代の生産遺跡。炭焼窯の奥壁に接して粘土探掘坑1基が検出されている。探掘された粘土は炭焼窯の構築に使用されたと考えられている。

県内例の大半は古代に属するもので、須恵器・瓦窯または炭焼窯・製鉄炉等と同一の地形上であったり、窯跡群の位置する丘陵の縁辺に立地することから、須恵器や瓦生産及び窯・炉の構築のための粘土探掘坑と理解されている。これに対し、古墳時代以前のものは集落の縁辺に位置するものと、集落から離れて土坑群のみが検出されるものとがある。後者は塚越A・小杉丸山遺跡があり、谷地形に不整形土坑が密集するものである。黒河尺目遺跡及び黒河中老田遺跡（古代）の例は調査地区内に同時期の遺構が検出されており、周囲に集落の存在が想定されることから前者に、黒河中老田遺跡（古墳時代）の例は旧河道上での土坑群のみの検出であることから後者にあたる。

D 県外例

富山県外において粘土探掘坑の確認された遺跡は、縄文時代から近世に至るまで多くの報告がある。

ここでは、主に黒河中老田遺跡（古墳時代）の粘土探掘坑にみられるような古墳時代以前のものについてみていくたい。

多摩ニュータウン遺跡群¹²⁴東京都の多摩丘陵西部では、縄文時代から近世に及ぶ多くの遺跡で粘土探掘坑が検出されている。この地域は古代の南多摩窯跡群に含まれており、縄文時代以来の粘土産出地に古代の窯跡群が位置している。のことから、時代を超えた粘土に対する遺跡の重層性が指摘されている。No248遺跡は縄文中～後期の約5,500m²に及ぶ大規模な露天掘りの粘土探掘坑群である。No947・949遺跡は尾根を挟んだ東西両斜面を掘り抜いた古墳時代後期の粘土探掘坑群で、No949遺跡では坑内より木製の鍬・掘り棒・ヘラ状木製品・薬製品が出土している。埋土下位からは完形に近い甕が多く検出されている。No146遺跡は平安時代の粘土探掘坑群で、埋土の観察より探掘した粘土を溜め置く粘土土坑、また粘土の均質化を計る水簸を行った可能性が想定されている。

上信越自動車道関連遺跡群¹²⁵長野県北部の千曲川沿いに位置する高丘丘陵は古代の窯跡群の存在が古くから知られている地区である。この丘陵一帯で、縄文時代・古墳時代・古代の粘土探掘坑群が検出されている。沢田鍋土遺跡では谷に面した斜面で古墳時代前期の粘土探掘坑群が検出され、丘陵上では同時期の住居跡が確認されている。埋土から縄文土器や石器が出土することから、縄文時代の粘土探掘坑の存在が推定されている。沢田鍋土遺跡とは同一遺跡と考えられる清水山窯跡の粘土探掘坑群は縄文中～後期のもので、他集落の石器組成と比べ打製石斧が多く出土しており、周辺で住居跡が確認されていないことから粘土探掘のみに関わる空間であったとされている。

長原遺跡¹²⁶大阪府の大和川沿いの低地に位置する。弥生時代中期～古墳時代前期にかけての土坑204基が検出された。土坑は帶状の低地部に分布し、掘削深度は粘土層の深度や層厚に由来するものであること等から、粘土探掘坑と判断されている。出土遺物には甕が多く完形品に近いものがみられることが多い。これは「採掘行為に伴う、あるいはこれに係わる祭祀行為」と考えられている。

筒江浦石遺跡¹²⁷兵庫県北部の円山川流域の谷に面した緩斜面に位置する。周辺には多くの古墳群が存在している。流路に挟まれた地点で粘土探掘坑182基が検出されている。出土遺物や他の遺構との関係から粘土探掘坑は古墳時代初頭の非常に短期間の間に営まれたものと推測されている。坑内からは完形に近い土器と板材を中心とした木製品が出土しており、土器の9割以上が甕である。

空港跡地遺跡¹²⁸香川県東部の高松平野に位置する。弥生時代後期～古墳時代前期にかけての400基余の土坑群が検出されている。強粘性的黄色系粘土の分布域と土坑群の分布域とはほぼ一致しており、土坑の掘削深度と粘土層の層厚との間に相関的関係が認められるとし、粘土探掘坑と理解されている。粘土探掘坑の半数近くから、甕を主体とした土器が出土しており、完形に近い土器がみられる。

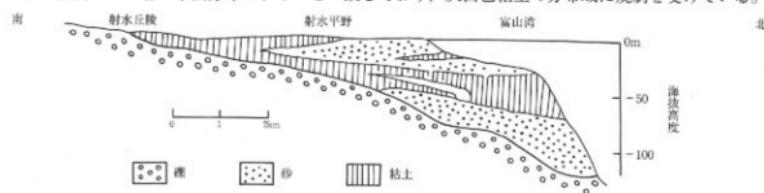
福岡遺跡¹²⁹鳥取県西部の淀江平野中央にあり、扇状地扇端部に位置する。自然流路と人為的な構に囲まれるように粘土探掘坑313基が検出されている。弥生中期後葉を主体とするもので、一部古墳時代のものが含まれる。坑内から土器・木製品が出土しており、木製品には掘削具と考えられる鍬・掘り棒・掘削具に転用したと考えられる櫛があり、「壁体を突き崩し土坑を掘り広げる」使用方法が推定されている。また、編籠が探掘坑底部付近から出土している。

E 他遺跡との比較

発掘調査の対象が台地上に限定されず、谷部や低地にまで拡大されるようになった1980年代以降、粘土探掘坑は各地で確認されるようになり、特殊な遺構ではなくなってきている。これらの遺跡にみられる特徴には、地域や時代を超えて共通する点が挙げられる。そこで、粘土探掘坑が確認された各遺跡について、黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡の例と以下の諸要素について比較・検討してみたい。

立地 粘土探掘坑が立地する場所は、台地縁辺や開析谷の斜面地、沖積平野、扇状地扇端部など様々で遺跡によって異なっている。長原遺跡では微地形をセンターで示し、粘土探掘坑の分布は微地形の低地部を意図的に選択しており、類例との比較から「段丘上の谷地形などに堆積した粘土層の分布域や沖積地の比較的浅い位置で埋没する段丘粘土層が検出される地区にあることで共通」とされる。粘土探掘坑の平面的な分布は、各遺跡における粘土層の分布域と密接な関係にあり、地形及び地質による選地が行われているといえる。

黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡も同様に、丘陵先端の微高地上から低地にかけて位置する。両遺跡周辺の射水丘陵先端部には境野新扇状地の上に第一疊層、下部砂層、中部泥層、上部砂層、最上部泥層の順で堆積しており、疊層より上は30~200cmの厚さの砂と泥（粘土）の互層となっている¹²⁷⁾。両遺跡では、この最上部泥層にあたる粘土を採掘している。また、黒河中老田遺跡（古墳時代）は丘陵裾の低地に位置し、粘土探掘坑は旧河道（埋没谷）上に帯状に分布している。この旧河道左岸の自然堤防帶を境に粘土探掘坑は検出されず、粘土探掘坑の分布西端ラインは、基盤の灰白色粘土層と砂混じりの粘質シルト層の平面分布のラインと一致しており、灰白色粘土の分布域に規制を受けている。



第146図 射水平野断面模式図（10万1富山県地質図説明書より一部改変）

形態 粘土探掘坑の平面形態は円形・楕円形・隅丸方形・不整形と各遺跡とも様々である。平面規模は径1~2m前後を平均とするが、5mを超える大型のものもあり一様ではない。また、単独のものと重複するものがあり、後者には塚越A遺跡のような4~5基を単位とするものから、多摩ニュータウンNa248遺跡のように斜面地で露天掘りすることで500mを超える大規模な粘土探掘坑群を形成するものがあるが、大規模な群となるものも単独若しくは小規模な探掘坑の連続によるものである。断面形は円筒状・逆台形状・フラスコ（袋）状で、底面は起伏にとむものと平坦なものとがあり、空港跡地遺跡・上中遺跡¹²⁸⁾などで底や壁に掘削具の痕跡が認められている。フラスコ状のものについては、粘土探掘坑とする根拠の1つに挙げられることが多いが、遺跡によっては確認されていない遺跡もある。掘削深度については、長原遺跡の分析で粘土層の層厚に由来するものとされている。

黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡の粘土探掘坑は平面円形・楕円形・不整形を呈し、規模は径0.8~4mで、1~2m前後のものを主体としている。断面形は黒河尺目遺跡で円筒状・すり鉢状、黒河中老田遺跡（古墳時代）で円筒状を呈するものが多く、若干オーバーハングしているものがあるが、明確にフラスコ状となるものは確認されていない。掘削深度は、黒河尺目遺跡で0.3~0.8m、黒河中老田遺跡で0.4~0.7mを測る。底面はやや起伏にとむが、大半は平坦である。これは、周辺の粘土層が0.3~2mの厚さでほぼ水平に堆積していることに由来すると思われる。



第147図 粘土探掘坑・掘削模式図（薮田東遺跡より一部改変）

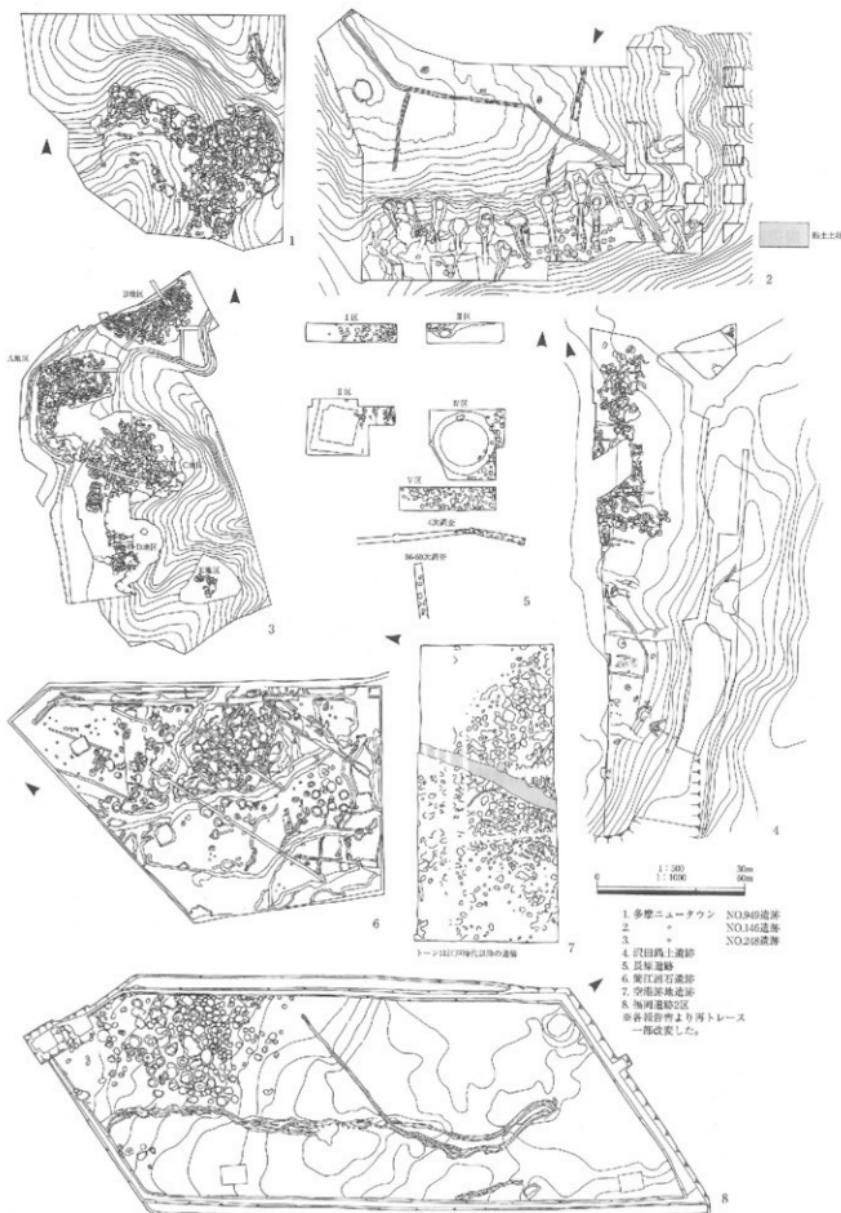
埋土 各遺跡において埋土は基盤層をブロック状に含むものが主体となっている。敷田東遺跡^[33]では粘土の探掘方法を「第1段階 縦坑の掘削の後、底部の粘土の探掘。第2段階 壁部分の粘土の探掘。第3段階 探掘坑の拡張及び旧坑の埋め戻し。第4段階 拡張部分の探掘。」の4段階で示しており、人為的な埋め戻しを想定している。これに対し空港跡地遺跡・多摩ニュータウンNa146遺跡（以下、Na146遺跡）では、埋土は壁の崩落などによる自然堆積と考えている。自然堆積の場合、埋没状態について、徐々に埋没したとする（空港跡地遺跡・城山遺跡^[34]）見解と、比較的短期間の間に埋没したとする（Na146遺跡）見解とがある。また、Na146遺跡では粘土を溜め置く粘土上坑を検出している。これは探掘終了後に坑道部に集中的に作られ、規模や埋土においては他遺跡の粘土探掘坑と何ら変わりはみられないが、坑内の粘土が上層は粘土質、下層はシルト質と分層されるものがあり、粘土の均質化を図り、水築を行ったものと理解されている。

黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡の埋土は、他遺跡と同様にブロック土を主体とし、自然堆積を成すものは少ない。敷田東遺跡で示された探掘方法が当てはまると考えられることから、人為的埋め戻しを想定しているが、壁の崩落によるブロック土の混入の可能性も否定できない。しかしながら、いずれにしても掘削後は一気に埋まった状態を呈するもので、比較的短期間の間に埋没したものと考える。また、黒河中老田遺跡（古墳時代）の埋土は以下の3パターンに分かれる。A：灰白色粘土をブロック状に含む混合土。B：下層に灰白色粘土を主とする混合土、上層は黒褐色粘土の単層、または混合土。C：黒褐色粘土の単層または混合土の中位に帯状に灰白色粘土・砂が堆積する。B・Cは旧河道の肩部に多くみられ、Na146遺跡の粘土上坑の埋土と類似しており、粘土土坑の可能性があると考える。また、Dの平面方形で壁下に溝を巡らせるタイプのものは水築を行っている可能性を想定した。

遺物 遺物は土器・木製品・石器が出土している。土器は大半が破片の場合と、坑内の底部付近から完形に近い土器が出土する場合とがあり、後者では据え置かれたと思われる状態のものがある。土器の器種は弥生後期以降の上中遺跡・寺岡遺跡^[35]・長原遺跡・筒江浦石遺跡・空港跡地遺跡などで壺が主体となる傾向が認められる。完形に近い土器の出土や、人為的埋め戻しは「土坑墓」とする見解^[36]の根拠の一つともなっている。弥生後期頃を境として土坑周辺出土の土器が壺を主体とするものになることの背景について、福永氏は埋葬に伴う壺を使用する儀礼という共通の習俗の存在を想定している^[37]。また、京嶋氏は弥生後期～古墳前期にかけて壺に限定される傾向は当該時期の供獻土器には認められず、主体部（棺・墓坑）内への土器供獻（または副葬）は一般的な行為ではないとし、土坑墓を否定した上で、探掘行為に伴う何らかの祭祀行為の存在を想定している^[38]。

木製品は掘り棒・鋤・鎌の掘削具、桶などの容器、板材が主である。掘り棒は小杉丸山遺跡・Na949遺跡・福岡遺跡で出土しており、先端を刃状に加工した棒状木製品で、福岡遺跡では「壁体を突き崩し土坑を掘り広げる」使用方法を推定している。石器ではNo248遺跡・沢田鍋土遺跡・清水窓跡で多量の打製石斧が出土している。茨城県東大橋原遺跡^[39]は縄文時代の粘土探掘坑が検出されており、打製石斧は掘削具、坑内の土器は土掘り具に密着する土を洗うためのものであると想定している。

黒河尺目遺跡では土器・石器が出土しており、大半は破片で埋土中～上位で出土しているが、SK1530では鉢3個体が互い違いに並んだ状態で検出され、何らかの祭祀行為が想定される。また、石器では包含層出土も含めると縄文～後期の他遺跡と比べ、打製石斧が多い傾向にあり、粘土探掘に伴う掘削具と考える。黒河中老田遺跡（古代）では須恵器・木製品があり、木製品は掘り棒と須恵器製作に用いたと思われる叩き板が出土している。（古墳時代）では土器・木製品・石器が出土しており、木製品には板材、掘り棒・鎌がある。石器は打製石斧で、鋤型のもので石鋤と考える。この石鋤の刃



第148図 県外の主な粘土採掘坑 (1・2・6~8 1/500, 3~5 1/1000)

2. 粘土探掘坑について

部幅は約10cmで、他遺跡出土の木製鋤・鋤の身幅が10~15cmであるのとほぼ一致する大きさである³³⁸。土器は埋土中へ下位にかけて検出され、底面近くから完形に近い土器が据え置かれたような状態で出土している。これらの土器の器種は甕・壺に限られ、甕は9割を超えており、甕の全てに日常的に使用されたと思われる煤・コゲの付着が認められる。また、甕の口径は15~20cm台がほとんどで、17~18.5cm台に集中することから、器種だけでなく法量的な選択も行われているといえるだろう。この甕の選択は何によるものであるかを検証するのは難しいが、東大橋原遺跡の縄文時代の粘土探掘坑で、土器は土掘り具に密着する土を洗うためのものと想定されている。黒河中老田遺跡の灰白色粘土及び周辺粘土は粘性が強く、調査時にはスコップを濡らして使用しないと粘土が密着して剥がれないという状態であった。甕の口径は17~18.5cm台が40%を主体を占め、掘削具の身幅が10~15cm台であるので、探掘時に掘削具を水に漬けるには調度良い大きさといえないとどうか。また、甕は完形のものその他に、縫半分の破片・脇部下半等の大型の破片でも出土しており、掘削具を濡らす、あるいは洗うために用いたという実用性もあるのではないかと思われる。探掘終了後、使用していた道具を廃棄したのか、何らかの祭祀行為により埋設したのかは、現時点では不明である。しかしながら、黒河中老田遺跡だけでなく、各時代・各地域の粘土探掘坑で埋土中から完形に近い土器や掘削具を含む木製品が出土するのは共通してみられる現象であり、そこに何らかの慣習が存在するのであろう。

F まとめ

これまで、立地・形態・埋土・遺物等の諸要素から黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡の粘土探掘坑について、県内外の類例と比較・検討を試みた。その結果、黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡例を粘土探掘坑と理解することに整合性があると思われる。黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡（古代）は、同時期の遺構が検出されており、集落の縁辺部に位置すると推定され、土器及び須恵器制作用の粘土探掘と考えられる。黒河中老田遺跡（古墳時代）は調査区内で同時期の他の遺構が検出されず土坑群のみの検出であるが、粘土層の分布する低地に立地すること、鍬・振り棒等の掘削具が出土していること等から、粘土探掘に伴う作業場（探掘場）と理解した。また、黒河中老田遺跡では水築を行ったと思われる土坑が検出されており、粘土の精製も行っていたと思われる。

最後に、黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡は周辺遺跡との係わりの上で、どのように位置付けられるのかをみてみたい。両遺跡のある射水丘陵先端部及び、丘陵からの河川により開析谷の発達した境野新扇状地端部では、多数の粘土探掘坑が確認されている。射水丘陵周辺では地質的に良質な粘土が堆積しており、古代以降、須恵器・瓦などの窯業が発展する大きな要因となっている。今回、黒河尺目遺跡で縄文時代、黒河中老田遺跡で古墳時代・古代の粘土探掘坑が確認されたことは、丘陵北部を中心とする一帯が良質な粘土の産出地として、時代を問わず粘土探掘が行われてきた地域であることを示しているといえる。古代の大規模な窯跡群中で、縄文時代・古墳時代と時代の異なる粘土探掘坑が確認されている遺跡は、多摩丘陵西部（東京）、高丘丘陵（長野）などが知られており、これらはいずれも縄文中期、古墳時代前期の時期のもので、射水丘陵における黒河尺目遺跡、黒河中老田遺跡の粘土探掘坑の時期とも一致している。射水丘陵及び射水平野一帯では、気候の寒冷化と共に陸化が進む縄文海退の始まる縄文中期、及び低湿地（ラグーン）の陸地化が安定する弥生時代後期～古墳時代前期に掛けての頃は急激に遺跡数が増加している³³⁹。黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡はこうした遺跡の増加期の粘土探掘坑で、各集落の土器作り用粘土の需要に応えるための探掘場であったと思われる³⁴⁰。以上、県内外の類例との比較・検討を行ったが、先入観のため客観的な検討ができなかつた所もある。粘土探掘坑の廃棄の理由や在地の土器生産との係わり等、再度検討したい。（金三津道子）

遺跡名	所在地	遺構	形態	断面	文 稿	備 注
新田永遠跡	群馬県伊勢崎市大字月夜野字新田	台地縦溝・低地	平安		敷用面成績 1982 (4) 新田永遠 化財埋蔵文化財調査報告書	多い
葛原遺跡	群馬県伊勢崎市大字月夜野字葛原	台地縦溝・低地	平安	粘土探査坑群 II	東北遺跡 上越市立上越城周辺低地文化 化財埋蔵文化財調査報告書 4 集 (財)群馬県立美術館・文化財研究会	
多摩ニュータウンNo.346 道跡	東京都八王子市南大沢	谷戸に面する斜面	平安	粘土探査坑群 II 粘土上塗 54	多摩ニュータウン 道跡 西側 56 平方メートル (第 1 次) 1982	本部足掛り点、跡跡
多摩ニュータウンNo.967 道跡	東京都町田市小山	谷戸に面する斜面	走破後削	粘土探査坑群 2 粘土上塗 54	多摩ニュータウン 道跡 西側 56 平方メートル (第 1 次) 1982 先行調査 報告书 1 (967) 富士見丘教育委員会・ 東京都埋蔵文化財センター	
多摩ニュータウンNo.949 道跡	東京都町田市小山	谷戸に面する斜面	走破後削	粘土探査坑群 I 粘土上塗 54	多摩ニュータウン 道跡 東側 56 平方メートル (第 1 次) 1982 先行調査 報告书 1 (949) 富士見丘教育委員会・ 東京都埋蔵文化財センター	
多摩ニュータウンNo.245 道跡	東京都町田市小山	尾根と谷に挟まれた斜面	一級	粘土探査坑群 6	多摩ニュータウン 道跡 西側 56 平方メートル (第 1 次) 1982 先行調査 報告书 1 (245) 富士見丘教育委員会・ 東京都埋蔵文化財センター	
御殿二之宮跡	静岡県御殿山御殿二之宮	松丘縦溝	六代		伊豫二之宮遺跡・御殿山御殿二之宮 古墳前	多い。一ノ字便。歩道、 井戸、水路
沢山城上山跡	「野間」中野市人字立ノ字字頭上	丘陵縦溝	古墳前	粘土探査坑群 5	「佐野」中野市人字立ノ字字頭上 古墳上	多い。一ノ字便。 井戸、水路
沢山城跡	「野間」中野市人字立ノ字字頭上	古墳前	第六十一代	粘土探査坑群 2 並 粘土上塗 9 基	「佐野」中野市人字立ノ字字頭上 古墳上	多い。一ノ字便。 井戸、水路
池田塙跡	「野間」中野市人字立ノ字字頭上	谷戸に面した斜面	良・平安	粘土探査坑群 82 番	「佐野」中野市人字立ノ字字頭上 古墳上	多い。一ノ字便。
I.中遺跡	京都府宇治市京北町	台地縦溝	古墳前	粘土探査坑群 38 基	京都府宇治市京北町 1996 (財)京都府埋蔵文化財調査 研究センター	多い。桜材
守安遺跡	京都府宇治郡守安村	谷字野 (津桂地)	残生後	粘土探査坑群 21 基	守安遺跡 守安町の谷川町文化財 調査報告書 2 基	多い
吳原遺跡	大阪府大阪市平野区長吉長原	低地	残生中・後	粘土探査坑 204 基	大阪府大坂市平野区長吉長原 古墳遺跡発掘調査報告書 1994 (財)大阪府埋蔵文化財センター	多い
東安堵遺跡	奈良県宇陀郡	神積平野	残生後	土塁 226 基	奈良県宇陀郡 1996 (財)奈良県埋蔵文化財調査 研究センター	多い。動 植生坑
淀川塙石造跡	兵庫県朝来市和田山町	谷戸に面した斜面	山頂斜面	粘土探査坑 182 基	淀川塙石造跡 2002 (2) 在地時代初期 における土塁探査とそれに伴う石 体の伝承 (兵庫県埋蔵文化財調査 記録) 兵庫県教育委員会埋蔵文化 財調査班	多い。集、 植生坑
空港跡地遺跡	香川県高松市野町	津横平野	残生後	粘土探査坑 400 基	空港跡地遺跡発掘調査報告書第 4 年度 1993 香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財センター	多い
福岡遺跡	鳥取県岩美郡福岡町福岡	緩状地・墓地	古墳	粘土探査坑 312 基	福岡遺跡 1992・福岡遺跡 6 (区) (財)鳥取県教育文化財團	多い。集、 植生坑

第28表 主な県外粘土探査坑一覧

注1 河合忠・安英樹 1999 「石跡叢考」 [石川県考古資料調査・集成事案報告 墓新兵] 石川考古学研究会

注2 原田義範 2000 「塙跡貝貫遺跡、塙跡No.15遺跡発掘調査概要」 小杉町教育委員会

注3 越前慶祐他 1992 「古沢バイパス拡張工事発掘調査報告」 湖西河内老田C遺跡・堀越A遺跡・富山県埋蔵文化財センター

注4 関 清 1983 「石太郎C遺跡」 [県民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告 (2)] 富山県教育委員会

注5 神保孝造他 1983 「丸山C遺跡」 [市谷町西街路・七美・太閤山・高岡鏡内遺跡群発掘調査概要] 富山県教育委員会

注6 池野正男 1998 「ジャパンエキスボン遺跡群発掘調査報告書告 II」 右太郎・堀越・右太郎J遺跡・富山県埋蔵文化財センター

注7 関 清 1983 「野田A遺跡」 [県民公園対応山ランド内遺跡群調査報告 (2)] 富山県教育委員会

注8 小杉流通営業団地内遺跡群No.21遺跡を昭和59年に小杉山遺跡と改名した。

齊藤隆也 1983~1986 「小杉流通業務団地内遺跡群第 5~8 次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会

注9 酒井洋洋他 1989 「小杉流通業務団地内遺跡群第 9 次緊急発掘調査概要」 富山県埋蔵文化財センター

注10 池野正男他 1993 「小杉流通業務団地内遺跡群第 10~11 次緊急発掘調査概要」 富山県埋蔵文化財センター

注11 齊藤隆也 1984 「小杉流通業務団地内遺跡群第 6 次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会

注12 上野草也 1983 「小杉流通業務団地内遺跡群第 3~4 次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会

注13 池野正男他 1986 「石名山麻床発掘調査報告」 大門町教育委員会

注14 山本正敏他 1991 「石名山遺跡」 [大門町企業団地内跡群発掘調査報告 (1)] 大門町教育委員会

注15 安念幹倫他 1995 「北高木遺跡発掘調査報告書」 大門町教育委員会

注16 久々志義他 1999 「下村加茂遺跡発掘調査報告書」 下村教育委員会

注17 古川知明 2000 「中老田C遺跡発掘調査報告書」 富山市教育委員会

注18 魚島昌也 1999 「富山市内遺跡発掘調査概要」 桑谷南遺跡・富山市教育委員会

2002 「富山市桜谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 富山市教育委員会

注19 古川知明 2002 「富山市御坊山遺跡発掘調査報告書」 富山市教育委員会

注20 近藤顯子 2002 「富山市開ヶ丘中山J遺跡・開ヶ丘中山IV遺跡・開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書」 富山市教育委員会

2. 粘土探査坑について

- 注21 多数の粘土探査坑が確認されている。下記の報告書はその代表的なものである。
- ・齊藤進也 1982「多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度」第1分冊 (財)東京都埋蔵文化財センター
 - ・宇佐美義春 1998「多摩ニュータウン遺跡：先行調査報告9」東京都教育委員会・(財)東京都埋蔵文化財センター
 - ・及川良彦他 2000「多摩ニュータウン遺跡 No247・248遺跡」(財)東京都埋蔵文化財センター
- 注22 鶴田英昭他 1997「沢田鍋土遺跡・清水山廬跡・池田塙宮跡」上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』
長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 注23 永島暉臣編纂 1991「長原遺跡発掘調査報告Ⅳ」(財)大阪市文化財協会
- 注24 萩木辛治 2001「古墳時代初頭における粘土探査坑とそれに伴う具体的活動」兵庫県朝来郡和田山町菅江遺石遺跡の調査」
〔兵庫県埋蔵文化財研究紀要〕創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 注25 岐阜晋司他 1993「空港終地遺跡発掘調査概要 平成4年度」香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 注26 西川徹也 1992「一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書」福岡遺跡」(財)鳥取県教育文化財団
太田正康 1993「一般国道9号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II 今津塙田遺跡 福岡遺跡(6区)」
(財)鳥取県教育文化財団
- 注27 藤井昭二他 1992「10万1富山県地質図説明書」富山県
- 注28 増田孝彦 1986「上中遺跡第3次」『京都府遺跡調査概報 第20回』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注29 原雅信他 1982「蘇我東遺跡」(財)郡馬県埋蔵文化財調査事業団
- 注30 阿部一也 1987「近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 城山(その3)」
(財)大阪文化財センター
- 注31 奥村清一郎他 1988「寺岡遺跡」西田川町教育委員会
- 注32 多数の論考がある。
- ・内口陽一 1990「畿内の群集土坑墓」「考古学研究」145号 考古学研究会
 - ・竹原一彦 1993「三宅遺跡の土葬屏風について」『京都府遺跡調査報告書 第18回』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
 - ・市方芳二 1994「大庭寺遺跡検出の『密集型土坑群』について」『大阪文化財研究』第6号 (財)大阪文化財センター
- 注33 榎本仲哉 1989「古墳時代の共同墓地 密集型土坑群の評価について」「待兼山論叢」23号 大阪大学文学部
- 注34 京崎覚 1991「群集土塚の性格と意義」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』(財)大阪市文化財協会
- 注35 川崎純徳 1978～1980「石岡市東大坂遺跡第1～3次調査報告」石岡市教育委員会
- 注36 犬は身幅15cm前後を目安に「狹臍」「広臍」の二種に分けられるが、区別の目安はそれほど明確な基準は設けられていない。
黒崎直 1996「日本の美術No357 古代の農具」至文堂
- 注37 植瀬勝 1997「小杉町史 通史編」小杉町役場
- 注38 各遺跡出土の土器の胎土分析及び、黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡の粘土の分析を行うことで、証明できると思われるが、今回の調査では、残念ながら土器サンプルの採取をしておらず分析を行うことができなかった。